

熊本県文化財調査報告第 313 集

新南部遺跡群 4

—瀬田熊本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015.3

熊本県教育委員会

新南部遺跡群 4

熊本県文化財調査報告書 第三一三集

二〇一五

熊本県教育委員会

発行者：熊本県
所属：教育庁教育総務局文化課
発行年度：平成 26 年度

熊本県文化財調査報告第 313 集

新南部遺跡群 4

2015.3

熊本県教育委員会

序 文

本書は、県道瀬田熊本線道路改良事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した「新南部遺跡群」の発掘調査報告書です。本書では平成11年度から平成13年度及び平成16年度に実施した新南部遺跡群の発掘調査の成果を整理・報告しています。

新南部遺跡群の所在する一帯は、以前から縄文時代後晩期の遺跡が集中する地域で、今回の調査では、確実な縄文時代の遺構は確認されていませんが、縄文時代の後晩期の土器や土偶が多数出土しています。また奈良・平安時代に属する建物跡が検出されています。

今回の調査成果が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけると幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施に御理解と御協力を賜りました関係機関、地元の方々に対して、心より感謝申し上げます。

平成27年3月12日

熊本県教育長 田 崎 龍 一

例 言

- 1 本書は、県道瀬田熊本線道路改良事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県熊本市東区新南部3丁目に所在する新南部遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は、熊本土木事務所の依頼を受け、平成11年度から平成13年度及び平成16年度の期間に、熊本県教育庁文化課が行った。
- 3 整理・報告書作成は平成25年度・26年度に行った。
- 4 国土座標軸による測量基準杭の設定は、平成11年度・平成13年度は有限会社飯干コンサルタント、平成12年度は株式会社有明測量開発社、平成16年度は有限会社坂井設計コンサルタントに委託した。座標はいずれも日本測地系を用いている。
- 5 本書の周辺遺跡地図で使用した地図は、国土地理院発行の熊本1：25,000地形図である。
- 6 遺物実測及び製図は、師富成香、出家麻里、白木はる乃、佐々木舞、隈田香織が行った。
- 8 遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵、師富、出家、白木、佐々木、隈田が行った。
- 9 本書の執筆は、古城史雄が執筆した。
- 10 本書の編集は、25年度は坂田和弘、26年度は古城を中心に行い、師富、出家、白木、佐々木、隈田が補助した。
- 11 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。
- 12 新南部遺跡群に係る報告書は『西谷遺跡』熊本県文化財調査報告第76集及び『新南部・潤野遺跡』熊本県文化財調査報告書第84集が刊行されている。また平成26年度に先行して刊行される熊本県文化財調査報告書第311集を『新南部遺跡群3』とし、本書を『新南部遺跡群4』と表記する。

凡 例

- 1 本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
- 2 報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。
- 3 須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
- 4 土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖（財団法人日本色彩研究所：2004）に準拠した。
- 5 写真の縮尺は任意である。
- 6 図の灰色塗りの部分はカクランを示している。

本文目次

序文

例言・凡例

第I章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯 1

第2節 調査及び整理の組織 2

第3節 調査と整理の方法と経過

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 3

第2節 歴史的環境 3

第III章 調査の方法と成果

第1節 遺構・遺物の概要と取捨選択基準 9

第2節 層序 24

第3節 遺構と遺物 24

第IV章 総括 63

参考文献

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	熊本市周辺の地質図	4
第 2 図	周辺遺跡分布図 (S=1/20000)	6
第 3 図	遺跡周辺地図 (S=1/10000)	15
第 4 図	グリッド図 (S=1/2000)	16
第 5 図	A 区遺構配置図 (S=1/200)	17
第 6 図	B 区遺構配置図 (S=1/300)	18
第 7 図	C 区遺構配置図 (S=1/200)	19
第 8 図	D 区遺構配置図 (S=1/200)	20
第 9 図	E 区遺構配置図 (S=1/200)	21
第 10 図	F 区遺構配置図 (S=1/200)	22
第 11 図	G 区遺構配置図 (S=1/200)	23
第 12 図	H 区遺構配置図 (S=1/200)	25・26
第 13 図	I 区遺構配置図 (S=1/300)	27・28
第 14 図	J 区遺構配置図 (S=1/200)	29
第 15 図	K 区遺構配置図 (S=1/300)	30
第 16 図	L 区遺構配置図 (S=1/200)	31
第 17 図	B 区 1 号・2 号・3 号・4 号建物平面図及び断面図 (S=1/60)	33
第 18 図	F 区 5 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	34
第 19 図	G 区 6 号建物平面図及び断面図 (S=1/40)	35
第 20 図	G 区 6 号建物 (2-3)・7 号建物 (4) 出土遺物実測図 (S=1/3)	36
第 21 図	G 区 7 号建物平面図及び断面図 (S=1/40)	37
第 22 図	G 区 8 号建物平面図及び断面図 (S=1/40)	38
第 23 図	G 区 8 号建物出土遺物実測図 (S=1/3)	39
第 24 図	G 区 9 号・10 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び 9 号建物 (8)・10 号建物 (9・10) 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第 25 図	G 区 11 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	42
第 26 図	G 区 12 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	43
第 27 図	H 区 13 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	44
第 28 図	H 区 14 号・15 号建物平面図 (S=1/40) 及び 14 号 (17)・15 号 (18) 出土遺物実測図 (S=1/3)	45
第 29 図	I 区 16 号建物平面図・断面図 (S=1/80) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	46
第 30 図	I 区 17 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)	47
第 31 図	I 区 18 号建物平面図及び断面図 (S=1/40)	48
第 32 図	I 区 19 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び遺物実測図 (S=1/3)	50
第 33 図	K・L 区 1 号溝状遺構平面図 (S=1/200) 及び断面図 (S=1/40)	52
第 34 図	K・L 区 1 号溝状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)	53
第 35 図	K・L 区 1 号溝状遺構 (34-39)・A 区 (40)・B 区 (41-42) 出土遺物実測図 (S=1/3)	54
第 36 図	B 区 (43-45)・C (46-49)・D 区 (50-58) 出土遺物実測図 (S=1/3)	55
第 37 図	D 区出土遺物実測図 (S=1/3)	56
第 38 図	E 区出土遺物実測図 (S=1/3)	57
第 39 図	E 区出土遺物実測図 (S=1/3)	58
第 40 図	E 区出土遺物実測図 (S=1/3)	59
第 41 図	E 区 (117-121)・F 区 (122-124)・G 区 (125-131) 出土遺物実測図 (S=1/3)	60

第 42 図	H 区 (132-134)・I 区 (135-141) 出土実測図 (S=1/3)	61
第 43 図	K 区 (142-146)・L 区 (147-150) 出土実測図 (S=1/3)	62

表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	7
第 2 表	遺構一覧表	10
第 3 表	遺物観察表	65

写真図版目次

図版 1	1 号建物完掘状況 3 号建物完掘状況 4 号建物完掘状況 5 号建物完掘状況 6 号建物完掘状況 7 号建物カマド近景 8 号建物カマド近景 9 号・10 号建物カマド完掘状況
図版 2	11 号建物完掘状況 12 号建物カマド近景 16 号建物完掘状況 17 号建物完掘状況 18 号建物完掘状況 19 号建物完掘状況 1 号溝状遺構完掘状況 A 区全景
図版 3	B 区全景 C 区全景 D 区全景 E 区全景 I 区全景
図版 4	出土遺物 (1 ~ 18)
図版 5	出土遺物 (19 ~ 35)
図版 6	出土遺物 (36 ~ 53)
図版 7	出土遺物 (54 ~ 70・72)
図版 8	出土遺物 (71・73 ~ 88)
図版 9	出土遺物 (89 ~ 106)
図版 10	出土遺物 (107 ~ 122)
図版 11	出土遺物 (123 ~ 139)
図版 12	出土遺物 (140 ~ 150)

第 I 章 調査の経緯と経過

第 1 節 調査にいたる経緯

平成 10 年 6 月 17 日付けで熊本土木事務所より熊本県教育庁文化課あてに、一般県道瀬田熊本線道路改良事業の予定区間における埋蔵文化財確認調査の依頼がなされた。それを受け同年 8 月 4・5 日に確認調査を実施した。その結果多くの箇所遺構・遺物を確認し、発掘調査が必要である旨を 9 月 1 日付けで通知した。その後の熊本土木事務所の協議で、翌平成 11 年度下半期から発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

発掘調査の組織

（平成 11 年度調査）

調査責任者 豊田貞二（主席教育審議員兼文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査総括 江本 直（主幹兼文化財調査第 2 係長）

調査事務局 小齊久代（総務係長） 広瀬泰之（参事） 川口久夫（主事）

調査担当 坂口圭太郎、河野真理子（文化財保護主事） 上高原聡（非常勤嘱託）

（平成 12 年度調査）

調査責任者 阪井大文（文化課長）

島津義昭（課長補佐）

調査総括 江本 直（主幹兼文化財調査第 2 係長）

調査事務局 中村幸弘（主幹兼総務係長） 広瀬泰之（参事） 杉村輝彦（主事）

調査担当 坂口圭太郎（文化財保護主事） 下東嘉也（非常勤嘱託）

（平成 13 年度調査）

調査責任者 阪井大文（文化課長）

島津義昭（課長補佐）

調査総括 木崎康弘（文化財調査第 2 係長）

調査事務局 中村幸弘（主幹兼総務係長） 広瀬泰之（参事） 杉村輝彦（主事）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事） 石橋和久、和田敏郎（非常勤嘱託）

（平成 16 年度調査）

調査責任者 島津義昭（文化課長）

倉岡 博（課長補佐）

調査総括 西住欣一郎（文化財調査第 2 係長）

調査事務局 欄杭正義（主幹兼総務係長） 天野寿久（主任主事） 小谷仁志（主任主事）

調査担当 馬場正弘（文化財保護主事） 中尾健照、松野直子（非常勤嘱託）

整理の組織

（平成 25 年度調査）

整理責任者 小田信也（文化課長）

西住欣一郎（課長補佐）

整理総括 岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）

整理事務局 廣石啓哉（主幹兼総務文化係長） 松尾康延、有馬綾子（参事） 天草英子（主任主事）

整理担当 坂田和弘（参事） 師富成香、永松望（非常勤嘱託）

(平成26年度調査)

整理責任者 手島伸介(文化課長)

西住欣一郎(課長補佐)

整理総括 岡本真也(主幹兼文化財調査第2係長)

整理事務局 廣石啓哉(主幹兼総務文化係長) 松尾康延、有馬綾子(参事) 天草英子(主任主事)

整理担当 古城史雄(主幹)、師富成香、出家麻里(非常勤嘱託)

白木はる乃、佐々木舞、隈田香織(臨時職員)

第3節 調査と整理の方法と経過

1 調査の方法と経過

調査は用地買収等の関係もあり、4年間にまたがって断続的に行われている。一番北側の調査区をA区とし、南西にむかってL区までの呼称がつけられている。

平成11年度は、平成11年7月9日から平成12年3月31日までにA区からG区までの調査を行っている。翌12年度は、平成13年1月22日から平成13年3月30日までにH・I区の調査が行われている。平成13年度から調査担当者が変わり、平成13年6月6日から平成13年7月18日の間にJ区の調査が行われている。その後16年度は、平成16年6月23日から平成16年7月24日にK区・L区の調査が行われている。

2 整理作業の経過

整理作業の工程 平成12年度までの調査については、既に遺物の洗浄、注記、接合は平成25年度以前に完了しており、遺物の実測も一部は完了してあった。

遺構番号は、すべて頭に「S」を付け番号付してあり、11・12年度の調査区AからI区で通し番号をつけてあり、S132まで番号がふられている。I区までは、その他に無数のピットが存在するが、これらには番号はふられていない。一方調査担当者が変更になったJ区以降は、検出された遺構の多くはピットであり、柱穴位置からは掘立柱建物跡を構成するものではないため、ピット一つ一つに先頭に「S」を付け番号を付してある。13年度のJ区はS001からS033まで番号がふられている。また16年度はK・L区でその後樹痕と判断され欠番とされたものもあるが、S201からS259までの番号がふられている。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新南部遺跡群が所在する熊本市は、東方に阿蘇火山がそびえ、西部は有明海（島原湾）に面している。

熊本市の北西部は、金峰火山からなり、北部・東部・南部一帯は、台地及び沖積平野によって構成されている。熊本市の地形は、阿蘇火山や金峰火山の火山活動により大方が形成され、その後の白川等の河川の堆積・侵食、活断層による断層運動及び干拓によって現在の地形が形成された。

熊本市の北部から東部にかけて台地が分布する。この台地は、火砕流台地と河成段丘（河岸段丘）からなる。火砕流台地は、ほとんどが約9万年前に阿蘇火山の大噴火の際発生した火砕流による堆積物（阿蘇-4火砕流堆積物）である。これらを取り囲むように分布するのが、河成段丘の堆積物である。河成段丘の堆積物は、託麻砂礫層（中位段丘堆積物）と保田窪砂礫層（低位段丘堆積物）に区分できる。託麻砂礫層（中位段丘堆積物）は、託麻台地一帯に分布し中心街の地下にも広く伏在している。また、保田窪砂礫層（低位段丘堆積物）は、託麻台地を縁取るように龍田付近から木山付近まで分布している。

さらに熊本市の中央を流れる白川一帯には、海拔20m以下の低地（沖積平野）が分布している。この低地を細かく見ると高さ2～3m以下のわずかな起伏が認められる。この微起伏のうち高所は一般に自然堤防で、低所は後背湿地と言われている。自然堤防は、白川や緑川などの現流路沿いのほか、現流路から離れた場所にも散在する。自然堤防上は、古くから畑地として利用され、ここに集落が立地し、さらに古くからの主要道は自然堤防上を選んでつくられる傾向が強かった。縄文時代以降多くの遺跡の分布も自然堤防上である。

一方後背湿地は古くから水田に利用されてきた。しかし近年は都市化により自然堤防や後背湿地の如何を問わず宅地化や建造物の建設が急速に進行している。

第2節 歴史的環境

現在の新南部遺跡群は、以前は新南部遺跡A・B・C・Dと呼称されていたものに加え、西原遺跡が含まれている。この新南部遺跡群が位置する託麻原台地には、多くの遺跡が存在する。新南部遺跡群周辺の遺跡について時代ごとに概観してみたい。

【旧石器】

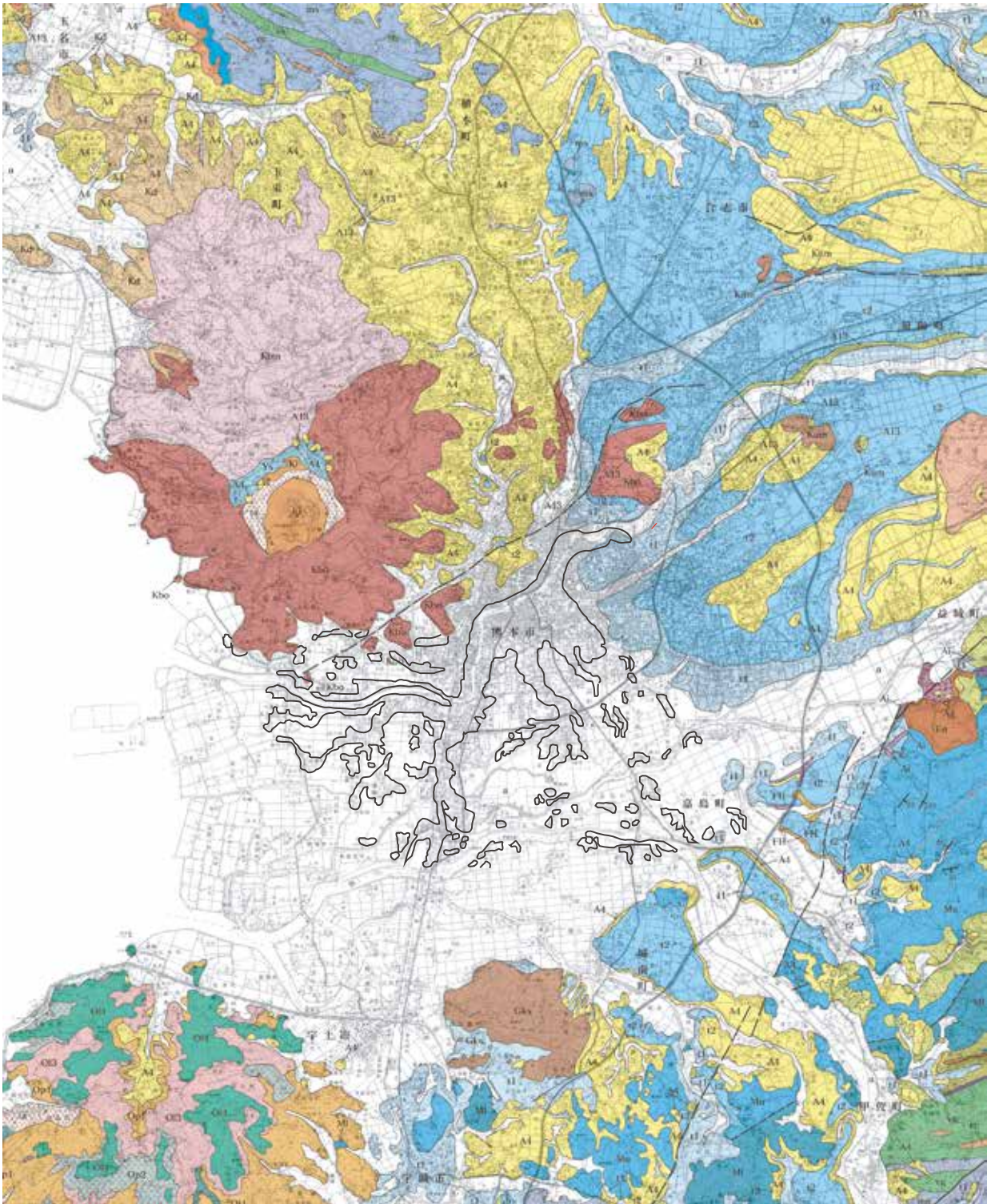
熊本平野部における旧石器時代の遺跡分布は、全体的に少ない。その中で白川中流域と金峰山周辺地域とに遺跡の分布が見られる。本遺跡のある白川中流域では、立田山周辺地域に集中する傾向がみられるが、いずれも採集資料である。新南部遺跡群では、東海大付属熊本星翔高等学校（旧東海大学第二高校）付近において、ナイフ形石器1点が表面採集されている。

【縄文時代】

熊本平野部では、早期から中期までの遺跡数は少ない。その中で立田山周辺地域では比較的早期の遺跡が顕著である。秣野遺跡からは押型文土器が多量に出土し、竪穴建物2軒、炉穴18基、集石遺構20基が検出されている。またカブト山遺跡から表面採集により押型文や貝殻条痕文土器が認められている。

前期はより少数で、轟式土器、曾畑式土器などが、上南部遺跡、託麻弓削遺跡群（旧弓削宮原遺跡）、新南部遺跡群（旧北久根山遺跡）、陣内遺跡などで認められるものの、ほとんどが客体的な在り方を示す。中期においては更に資料数が減少し、竜田内遺跡群、渡鹿遺跡群（旧渡鹿貝塚）、大江遺跡群、帯山遺跡群などで阿高式土器などが少量散見される程度である。

後期前半から資料が増加する。渡鹿貝塚・新南部遺跡群（北久根山遺跡）など白川左岸段丘上に立地する。



第1図 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

- A4：阿蘇-4火砕流堆積物 Kbo：金峰火山古期噴出物 A13：阿蘇-1～3火砕流堆積物 t1：低位段丘堆積物 t2：中位段丘堆積物
 Ki：金峰火山新期堆積物 Ys：芳野層 ta：崖錐堆積物 Kbm：金峰火山中期噴出物 Kum：熊本層群 Ai：赤井火山（砥川溶岩）
 Mu：御船層群上部層 FH：布田層・花房層 MI：御船層群下部層 vg：苦鉄質火山岩類 cc：結晶質チャート um：超苦鉄質岩類
 Gks：雁回山層 O11：大岳古期輝石安山岩溶岩 O13：大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14：大岳新期輝石安山岩溶岩
 Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩

○の範囲は調査地、○の範囲は自然堤防の範囲を示す。

渡鹿貝塚では鐘崎式系の土器が出土し、竪穴建物を検出している。北久根山遺跡は、北久根山式土器の標識遺跡であり、円形竪穴建物が検出されている。

後期後半から晩期前半になると台地上に多くの遺跡が存在するようになる。全国的にみても人口密度の高い地域であったことが指摘されており、上南部遺跡をはじめとして大規模遺跡が出現している。上南部遺跡石囲炉を伴う竪穴建物やその可能性が高いもの 12 軒が馬蹄形に並ぶ集落構成が明らかとなっている。また 108 点を数える土偶の出土も注目される。

一方晩期後半になると急激に遺跡数が減少し、黒髪町遺跡や上南部遺跡など少数の遺跡で確認されている程度である。

【弥生時代】

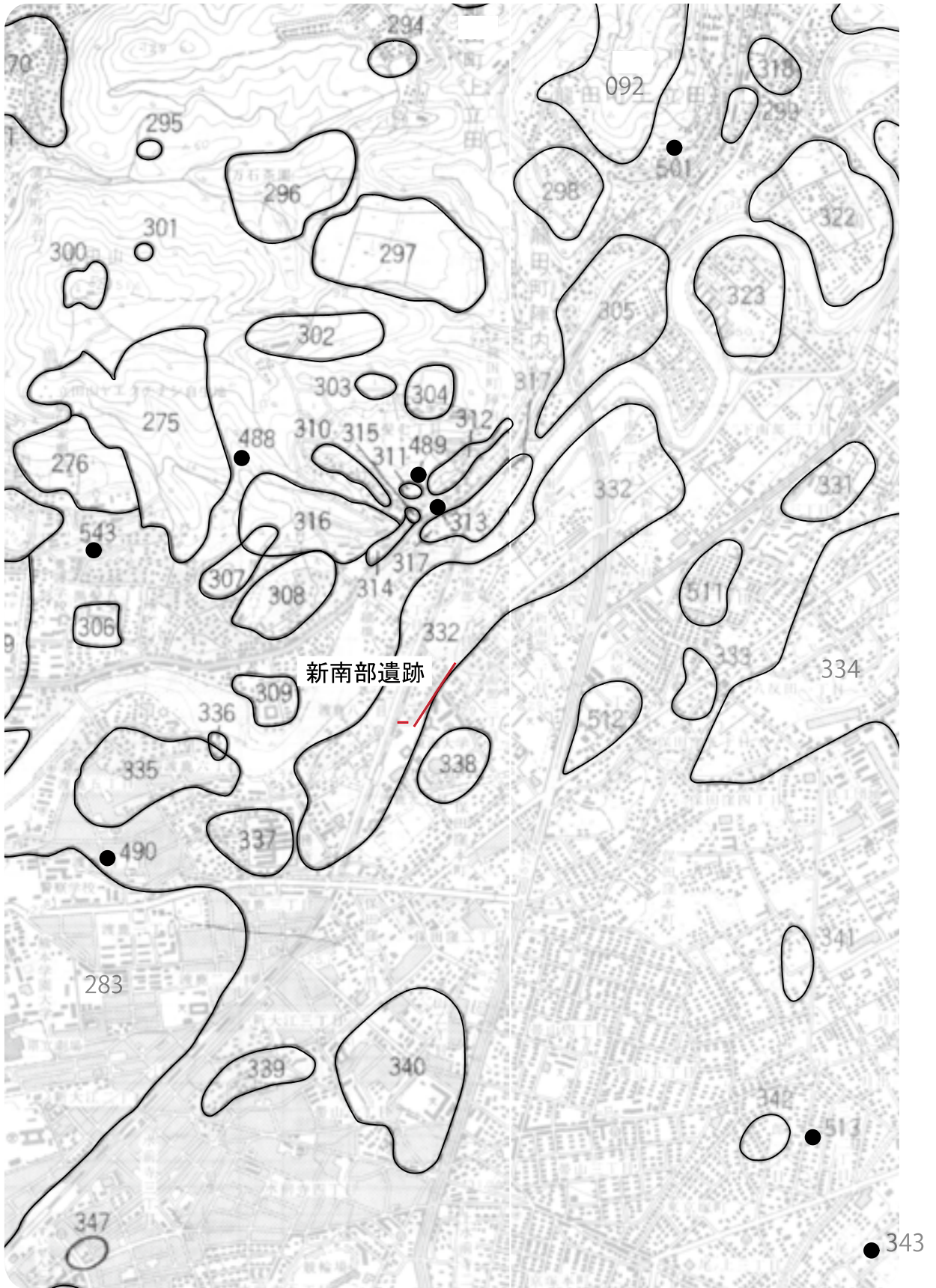
前期も前代に引き続き資料が少ない。黒髪町遺跡群、新屋敷遺跡から前期後半の土器が出土している。中期後半から後期になると黒髪式土器の標識遺跡である黒髪町遺跡群をはじめとして甕棺墓を主体として展開している。その他下南部遺跡、竜田口遺跡、新南部遺跡群・大江白川遺跡群など白川沿いの段丘のやや低い位置に分布が認められる。新南部遺跡群では県の 11 次調査で、標石のある甕棺群が確認されている。集落も同様の立地を示すという。一方後期後半になると遺跡数が減少する。

【古墳時代】

現在まで確実な前方後円墳は確認されていない。富ノ尾 3 号墳は全長 30m の前方後円墳の可能性もあるが消滅しており詳細が不明である。前期・中期に属する顕著な古墳も確認されておらず、陳内上ノ園遺跡群で方形周溝墓群が、牧鶴遺跡群で箱式石棺群が発見されている程度である。後期以降では立田山麓など、白川右岸に円墳や横穴墓群の存在することが特筆される。集落は白川沿いの段丘に分布し、白川左岸域に分布が濃い傾向を示す。竜田陳内遺跡群、下南部遺跡、渡鹿遺跡群、新南部遺跡群、大江遺跡群、迫ノ上遺跡群において竪穴建物跡が検出されている。

【古代】

7 世紀後半から 8 世紀初頭には託麻郡家と推定される大江遺跡群（渡鹿 A 遺跡）、8 世紀前半には大江遺跡群（渡鹿廃寺）が創建されており、同遺跡群において当該期の集落も形成される。8 世紀中葉から後半になると国分寺、国分尼寺が創建され、託麻国府の設置や駅路の整備もその前後になされたと考えられる。大江遺跡群、黒髪町遺跡群においては南北に延びる西海道跡が検出されている。8 世紀後半から 9 世紀前半において、大江遺跡群、大江白川遺跡、新屋敷遺跡、黒髪町遺跡群を中心に周辺地域においての濃密な資料の分布が認められる。今回報告する新南部遺跡群においても古代の竪穴建物跡が 16 軒確認されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/20000)

第1表 周辺遺跡一覧表

県 No	遺跡名	時代	種別	備考
092	迫ノ上遺跡群	縄文～平安	包蔵地	堂の前窯跡は平安期か？
240	京町2丁目	縄文～近世	包蔵地	
275	黒髪町下立田遺跡群	古墳～江戸	包蔵地	
276	泰勝寺細川家墓所・庭園	江戸	寺社	細川家霊廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
277	小峰	縄文～平安	包蔵地	
283	大江遺跡群	縄文～明治	包蔵地	
294	天拝山	旧石器～弥生	包蔵地	石槍、須玖式甕棺群
295	万石乗越	縄文～古代	包蔵地	
296	万石茶山	縄文・弥生	包蔵地	夜臼式土器
297	秣野	縄文～平安	包蔵地	
298	陳内上ノ園遺跡群	縄文～古墳	包蔵地	御手洗 A 式、押型文、須玖式甕棺、方形周溝墓
299	三の宮 (牧鶴宮脇)	縄文	包蔵地	
300	立田山山頂	古墳～平安	包蔵地	
301	万石茶山古墳	古墳	古墳	横穴式石室
302	立田山東中腹	古代・中世	包蔵地	
303	宇留毛浦山市宮墓地	縄文～平安	墓地	
304	九女グラウンド		包蔵地	
305	竜田陳内遺跡群	旧石器～中世	包蔵地	曾畑式土器、県報告あり
306	桜山中学校校庭	古墳～平安	包蔵地	
307	カプト山	縄文	包蔵地	早期、轟 B、北久根山、黒川、山の寺
308	宇留毛 A	縄文	包蔵地	
309	宇留毛 B	縄文～平安	包蔵地	
310	浦山第2横穴群	古墳	古墳	
311	浦山第1横穴群	古墳	古墳	18基
312	女瀬平横穴群	古墳	古墳	
313	長薫寺古墳	古墳	古墳	円墳横穴式石室
314	宇留毛小磯橋際横穴群	古墳	古墳	
315	つつじヶ丘横穴群	古墳	古墳	
316	宇留毛神社周辺遺跡群	古墳・中世	包蔵地	立田山南麓古墳円墳2基横穴式石室
317	竜田口	縄文～平安	包蔵地	
318	堂前畠	縄文～平安	包蔵地	
322	牧鶴遺跡群	古墳	包蔵地	
323	下南部	縄文～古墳	包蔵地	須玖式甕棺
331	松の窪		包蔵地	
332	新南部遺跡群	旧石器～平安	包蔵地	県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり
333	南原		包蔵地	
334	乾原・迎八反田	縄文～平安	包蔵地	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
335	渡鹿遺跡群	縄文・弥生	包蔵地	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑釈迦像天文16年銘
336	渡鹿菅原神社境内		寺社	市指定史跡
337	辻	縄文～平安	包蔵地	縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
338	新南部西原	縄文～平安	集落	
339	南平上	奈良・平安	包蔵地	
340	帯山遺跡群	縄文～平安	包蔵地	布目瓦、曾畑、阿高、竹崎
341	保田窪東一本松	縄文～平安	包蔵地	
342	三郎塚	縄文～平安	包蔵地	
343	豪潮宝篋印塔	中世	石造物	元は天福寺境内にあった
347	北水前寺	奈良・平安	包蔵地	
488	狐穴古墳参考地	古墳	古墳	

第II章 遺跡の位置と環境

県 No	遺跡名	時代	種別	備考
489	宇留毛城床古墳	古墳	古墳	石材各所に散乱
490	渡鹿板碑	中世	石造物	釈迦座像、天文 16 年
501	伝立田将監墓・古塔碑群	中世	石造物	五輪塔
511	市営託麻団地	縄文	包蔵地	押型文、御領式
512	西原	縄文	包蔵地	押型文
513	三郎塚古墳	古墳	古墳	
543	常楽寺	中世	寺社	

第三章 調査の方法と成果

第1節 遺構・遺物の概要と取捨選択基準

11年度12年度の調査では円形プランの建物37軒、方形プランの竪穴建物41軒(うちカマド付建物12軒)を確認したとされている。整理作業当初の段階では、硬化面が確認されているもの、柱穴が確認されているもの、炉が確認されているもの、そのうちの一つでも条件が満たされていれば建物の可能性があるとして広く取り上げる予定であった。ところが、建物に伴う遺物を選定していると多くで古代の遺物が伴っており、改めて土層の堆積状況などを確認した。すると炉と認定しているものについては、埋土の注記は、色調は暗褐色で、わずかに炭化物を含むと記述され、焼土についての記述はないので、炉としての認定も不確実であることがわかった。また削平がひどいことも一因ではあるが、竪穴建物の埋土の堆積状況の多くが作成されておらず、あっても理解しがたい堆積状況を示すものがほとんどであった。炉については、屋外炉である可能性もあるので炉が無くても認定は可能だが、積極的に認定することはできなかった。その主な理由は以下のとおりである。その結果、竪穴建物4軒、カマド付竪穴建物12軒を認定した。

1) 調査区のA区からI区には径10cmから15cm程度のピットが多数あり、その中で円形になりそうなものを単に結びつけ円形建物としてあるものについては除外した。ピットの埋土の色調が同じ等各ピット選定の根拠はしめされていない。またピットの断面図は現地では作成されておらず、レベル高が注記されているだけであり形状は不明である。いずれも硬化面は確認されていない。多くのピットは、掘り方の径は10cm程度で、深さは1mを超えるものがほとんどであるが、掘りすぎてしまった可能性が高い。また柱径は不明だが、掘り方の径が10cmであることから少なくとも10cmより小さいはずであり、この径の小ささも疑問が残る。

2) 竪穴建物が調査区外に延びるものについて、調査区壁面の土層図をみると、竪穴建物である浅い落ち込みは表現されているが、そこには建物の埋土はなく、基本土層である層が堆積しているものがある。分層が難しかったのかも知れないが、除外せざるを得なかった。

3) 竪穴建物が調査区内に収まるもののほとんどは、埋土の堆積状況の図はない。削平され、床面のみ或いは残存しても10cm未満で浅いため埋土が残存していない可能性はある。しかし硬化面が認められないもの、硬化面があっても、建物の一方向に偏るなど、硬化面の広がり不自然なものについても除外した。その多くは縄文時代の建物とされていたが、出土遺物は、縄文時代の遺物以外に古代の遺物も一定量出土している。

その他掘立柱建物跡についても、単に平面的に2間×1間や2間×2間等に並ぶものを掘立柱建物とし、断面がレベル高を記入してあるだけのものについては、家畜小屋や工房跡の可能性もないとはいえないが、集落の建物の構成等検証することが出来ないため、遺構から除外した。一方でカマド付建物については、土の堆積状況等理解しがたいものも多々あったが、カマドがあることを根拠にすべて建物と認定した。

竪穴建物については、確かに削平されて床面だけの残存であれば、縄文時代の遺物と古代の遺物が共伴することもあり得るので、すべてを否定できるものではなく、あるいはこの中の数基は縄文時代の竪穴建物かもしれないが、検証することが出来ない。掘立柱建物についても、完全に存在を否定できるものではないので遺構配置図には、調査時に遺構とされたものすべてを掲載している。なお、調査時の遺構番号と報告書掲載時の遺構番号の対応表は、表2のとおりであり、備考欄に遺構ではないと判断した主な理由を記述している。なお理由1)、理由2)、理由3)の番号は、上記1) 2) 3)の内容である。

遺物の取捨選択は整理時に遺構と認定したものに伴うものは、小片でも図化可能であれば選択している。但し前述したように途中で遺構ではないと判断したものがあり、そこに伴っていた遺物については、包含層出土の遺物として掲載している。

出土遺物量は、それほど多くないが、その中では縄文土器と古代の土器の出土量が目を引く。縄文時代の土器は完形品がなく、口径や胴部径がかるうじて反転復元できるものから2・3cm程度の小片のものがほとんどである。また石器の量は更に少なく、縄文時代後期・晩期に多くみられる打製石斧類も確実なものは

1点だけであり、石皿も確認されていない。その割に土偶は、7例が確認されている。

表2-1 遺構一覧表

区	遺構番号	報告書遺構番号	調査時の認定	判断理由
A	S001	—	方形建物	深さ10cmに満たない4軒の切り合い。北西端に位置し、北側壁面土層に断面がかかるはずだが、土層図には表現されていない。レベルから行くと、ニガシロ中で遺構を検出したことになってしまい整合性がとれないので、除外。
A	S002	—	方形建物	//
A	S003	—	方形建物	//
A	S004	—	方形建物	//
B	S006	—	方形建物	硬化面と思われる面があるが注記がなく、プランが不整。明確な掘り込みなし。
B	S007	—	方形建物	不整形の落ち込み
B	S008	—	円形建物	理由1)
B	S009	—	土坑	不定形の落ち込みで遺構ではないと判断
B	S012	—	道路状遺構	道路状遺構としてあるが、底部幅は40cmに満たず道路とは認定できない。
B	S013	—	方形建物	壁の立ち上がりがなだらかで、不整形の落ち込みと判断
B	S014	—	円形建物	理由1)
B	S019	—	土坑	不定形の落ち込みで、自然地形と判断
B	S020	—	掘立柱建物	1間2間になりそうなピットを平面的に結びつけている以外に根拠がない。
B	S021	—	掘立柱建物	桁と梁の間隔が違いすぎる。
B	S022	—	方形建物	建物のコーナーが1カ所確認されただけで、炉・硬化面は確認されていない。
B	S023	—	掘立柱建物	柱配置に無理がある。並ばない。
B	S025	—	掘立柱建物	1間2間であり、1間が1m以下で小さすぎる。
B	S026	—	掘立柱建物	2間1間、2間2間のものが切り合っているが、柱間隔が1m以下で50cm程のものもある。建物としても小さすぎる。
B	S027	—	掘立柱建物	//
B	S028	—	掘立柱建物	//
B	S030	—	柵列	L字に並ぶように見えるが、時期不明。
B	S048	—	掘立柱建物	調査時点で遺構ではないと判断してある。
B	S050	—	掘立柱建物	1間2間であり、柱間隔が70cm程で小さすぎる。
B	S017	1号竪穴建物	方形建物	柱穴の並びはいびつだが、硬化面が明確にしめされていたので認定。
B	S018	2号竪穴建物	方形建物	焼土と周辺に3つの柱穴が確認されたので認定。推定で建物の輪郭が描かれるが、推定線の根拠は不明。
B	S016	3号竪穴建物	方形建物	硬化面が確認されているので認定。
B	S029	4号竪穴建物	方形建物	硬化面と炉が確認されているので認定。
B	S015	—	掘立柱建物	2間2間であるが、各柱間隔が違いすぎる。
B	S024	—	掘立柱建物	2間2間であるが、各柱間隔が違い、狭いものは60cm程である。
B	S031	—	方形建物	平面プランは不明であり、硬化面は部分的で広がらない。
B	S032	—	方形建物	//
C	S051	—	円形建物	理由1)
C	S052	—	円形建物	理由1)
C	S053	—	円形建物	理由1)
C	S054	—	円形建物	理由1)

表 2 - 2 遺構一覧表

区	遺構 番号	報告書 遺構番号	調査時の 認定	判断理由
C	S055	—	円形建物	理由 1)
C	S056	—	円形建物	理由 1)
C	S057	—	円形建物	理由 1)
C	S058	—	円形建物	理由 1)
C	S065	—	円形建物	理由 1)
C	S066	—	円形建物	理由 1)
C	S067	—	円形建物	理由 1)
C	S068	—	円形建物	理由 1)
C	S069	—	円形建物	理由 1)
C	S070	—	円形建物	理由 1)
C	S071	—	円形建物	理由 1)
C	S072	—	円形建物	理由 1)
D	S035	—	円形建物	理由 1)
D	S036	—	円形建物	理由 1)
D	S037	—	円形建物	理由 1)
D	S042	—	方形建物	土層堆積状況は存在するものの、堆積状況の説明がつかない。硬化面もなく柱も並ばないようである。
D	S043	—	方形建物	//
D	S044	—	方形建物	//
D	S046	—	方形建物	理由 3)
D	S047	—	溝状遺構	時期不明。断面をみると複数の切り合いがある。
D	S049	—	円形建物	理由 1)
D	S039	—	円形建物	理由 1)
D	S040	—	円形建物	理由 1)
D	S041	—	円形建物	理由 1)
E	S059	—	円形建物	理由 1)
E	S061	—	円形建物	理由 1)
E	S062	—	円形建物	理由 1)
E	S064	—	円形建物	理由 1)
E	S073	—	溝状遺構	同方向に 3 本の溝が走るので道路の可能性はある。G 区ではカマド付建物を破壊する。時期不明だが近世以降と思われる。
E	S063	—	円形建物	理由 1)
F	S074	—	円形建物	理由 1・2)
F	S077	—	円形建物	理由 1)
F	S078	—	円形建物	理由 1)
F	S079	—	方形建物	理由 2)
F	S081	—	土坑	時期不明
F	S082	—	円形建物	理由 1)
F	S085	—	円形建物	理由 1)
F	S086	—	円形建物	理由 1)
F	S080	5号竪穴建物	カマド付建物	
G	S089	—	円形建物	理由 2)
G	S101	—	土坑	S090 を切る。
G	S110	—	竪穴建物	理由 3)
G	S111	—	竪穴建物	理由 3)
G	S099	6号竪穴建物	カマド付建物	
G	S092	7号竪穴建物	カマド付建物	

表 2-3 遺構一覧

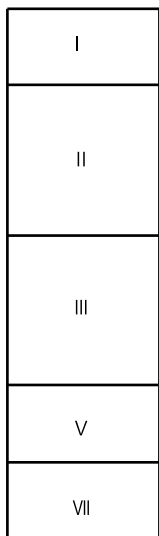
区	遺構番号	報告書遺構番号	調査時の認定	判断理由
G	S100	8号竪穴建物	カマド付建物	
G	S084	9号竪穴建物	カマド付建物	
G	S083	10号竪穴建物	カマド付建物	
G	S109	11号竪穴建物	カマド付建物	
G	S088	12号竪穴建物	カマド付建物	
G	S096		方形建物	理由 2)
H	S075	—	溝状遺構	S075 が埋まった後に S073 が掘られている。しかし 平行して走っている所もあるので、それほど時期は離れていないか？
H	S087	—	掘立柱建物	柱配置が不規則すぎる。
H	S090	—	土坑	不定形の落ち込み、攪乱か？
H	S091	—	溝状遺構	時期不明の遺構
H	S093	—	土坑	イモ穴の可能性が高い。
H	S094	—	土坑	//
H	S095	—	土坑	//
H	S102	—	円形建物	理由 3) 土師器・須恵器も出土。
H	S106	—	方形建物	理由 2・3) 柱配置が不規則。
H	S112	—		断面のみで位置不明。
H	S113	—	竪穴建物	理由 3) 断面形がレンズ状になる。
H	S114	—	掘立柱建物	ほとんどが調査区外になるため、遺構がどうか不明。
H	S115	—	方形建物	理由 2・3)
H	S118	—	溝	不定形の掘り込みでカクランか？ S119 を切る。
H	S076	13号竪穴建物	カマド付建物	硬化面確認。
H	S108	14号竪穴建物	カマド付？	
H	S107	15号竪穴建物	カマド付？	
I	S117	—	近世道路	S120 を破壊する。近世以降の導水のための溝或いは道路の溝。
I	S119	—	方形建物	柱・硬化面ともに確認されていない。
I	S121	—	方形建物	理由 3)
I	S122	—	方形建物	日誌では硬化面でこの遺構を確認したらしいが図面では硬化面が確認できない。
I	S124	—		時期不明の土坑。
I	S126	—	溝状遺構	不定形の落ち込みと判断。
I	S128	—		理由 3)
I	S129	—		理由 3)
I	S120	16号竪穴建物	方形建物	硬化面確認・カマド？
I	S123	17号竪穴建物	方形建物	硬化面、掘方確認。
I	S127	18号竪穴建物	カマド付建物？	カマド有り。
I	S125	19号竪穴建物	方形建物	
I	S130	—	溝状遺構	S131 を切る。時期不明

表 2 - 4 遺構一覧

区	遺構 番号	報告書 遺構番号	調査時の 認定	判断理由
I	S131	—	溝状遺構	時期不明
I	S132	—	溝状遺構	時期不明
J	S004	—	ピット	
J	S005	—	ピット	
J	S006	—	ピット	
J	S007	—	ピット	
J	S008	—	ピット	
J	S009	—	ピット	
J	S010	—	ピット	
J	S011	—	ピット	
J	S012	—	ピット	
J	S013	—	ピット	
J	S014	—	ピット	
J	S015	—	ピット	
J	S016	—	ピット	
J	S017	—	ピット	
J	S018	—	ピット	
J	S019	—	ピット	
J	S020	—	溝?	位置不明
J	S021	—	ピット	
J	S022	—	ピット	
J	S023	—	ピット	
J	S024	—	ピット	
J	S025	—	ピット	
J	S026	—	ピット	
J	S027	—	ピット	
J	S028	—	ピット	
J	S029	—	ピット	
J	S030	—	ピット	
J	S031	—	ピット	
J	S032	—	ピット	
J	S001		溝状遺構	時期不明
J	S002		土坑	炉のようであるが、古代の屋外炉には大きすぎる。
J	S033		土坑?	時期不明
K	S201	—	攪乱	
K	S203	—	ピット	
K	S204	—	樹痕	
K	S205	—	ピット	
K	S206	—	ピット	
K	S207	—	ピット	
K	S208	—	ピット	
K	S209	—	ピット	
K	S210	—	ピット	
K	S211	—	ピット	
K	S212	—	ピット	
K	S213	—	樹痕	
K	S214	—	樹痕	
K	S215	—	樹痕	
K	S216	—	樹痕	
K	S217	—	ピット	
K	S218	—	ピット	

表 2 - 5 遺構一覧

区	遺構 番号	報告書 遺構番号	調査時の 認定	判断理由
K	S219	—	樹痕	
K	S220	—	樹痕	
K	S221	—	樹痕	
K	S222	—	ピット	
K	S223	—	ピット	
K	S224	—	ピット	
K	S225	—	ピット	
K	S226	—	樹痕	
K	S227	—	樹痕	
K	S228	—	樹痕	
K	S229	—	樹痕	
K	S230	—	ピット	
K	S231	—	樹痕	
K	S232	—	ピット	
K	S233	—	ピット	
K	S234	—	ピット	
K	S235	—	ピット	
K	S236	—	ピット	
K	S237	—	ピット	
K	S238	—	ピット	
K	S239	—	ピット	
K	S240	—	ピット	
K	S241	—	ピット	
K	S242	—	ピット	
K	S243	—	ピット	
K	S244	—	ピット	
K	S245	—	ピット	
K	S246	—	ピット	
K	S247	—	ピット	
K	S248	—	ピット	
K	S249	—	ピット	
K	S250	—	ピット	
K	S251	—	ピット	
K	S252	—	ピット	
K	S253	—	ピット	
K	S254	—	ピット	
K	S255	—	ピット	
K	S256	—	ピット	
K	S257	—	ピット	
K	S258	—	ピット	
K	S259	—	ピット	
K	S202	1号溝状遺 構	溝状遺構	



L=31.5m

L=31.0m

基本土層註記

I層 表土

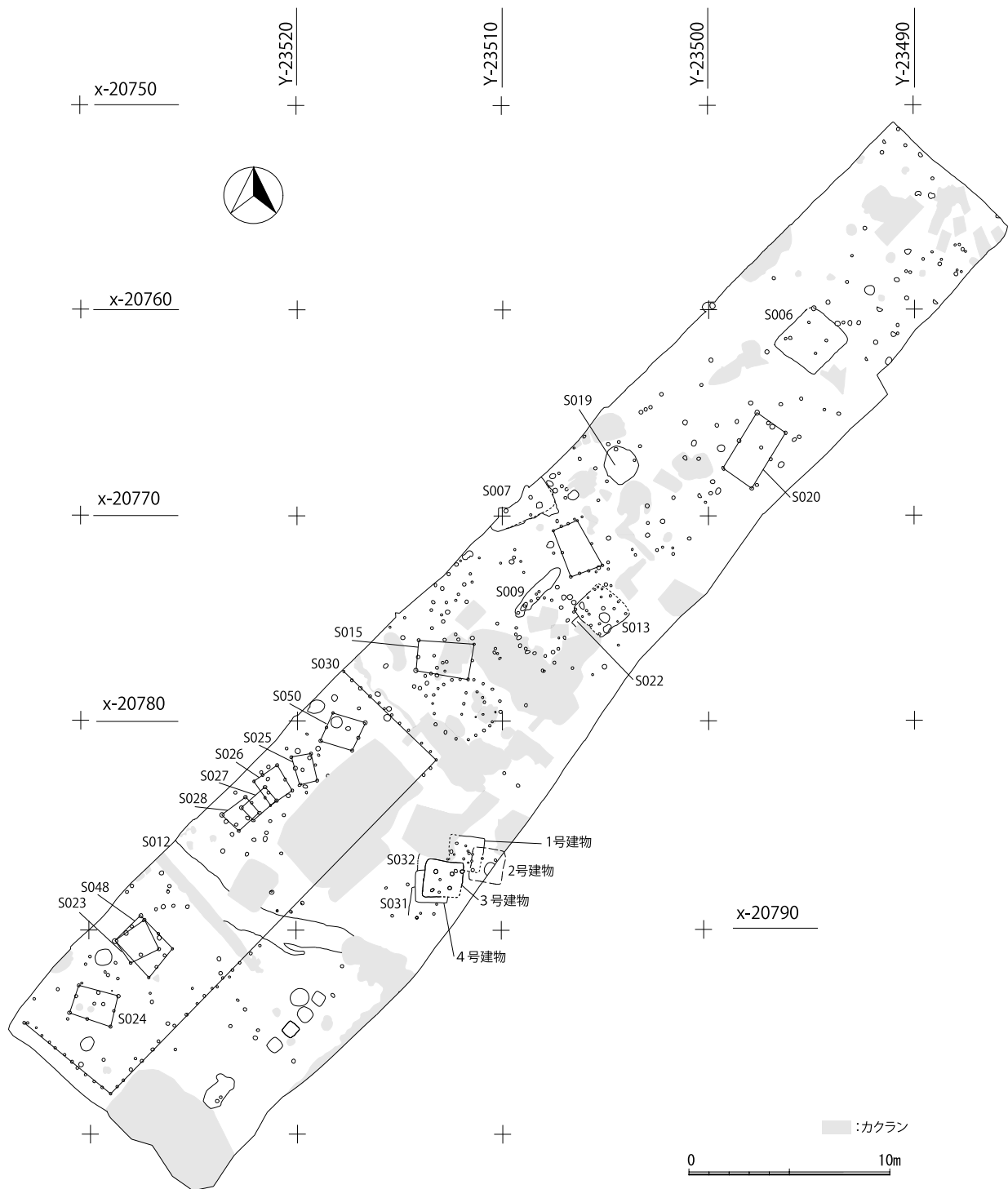
II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5 mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。

III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5 mm以下の
橙色粒を微量に含む。粘土ブロックをまれに含む。
所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。

V層 暗黄褐色粘質土 硬く強くしまり、粘性に富む。

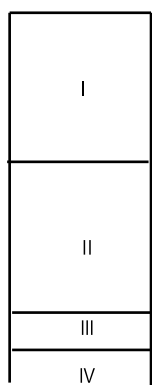
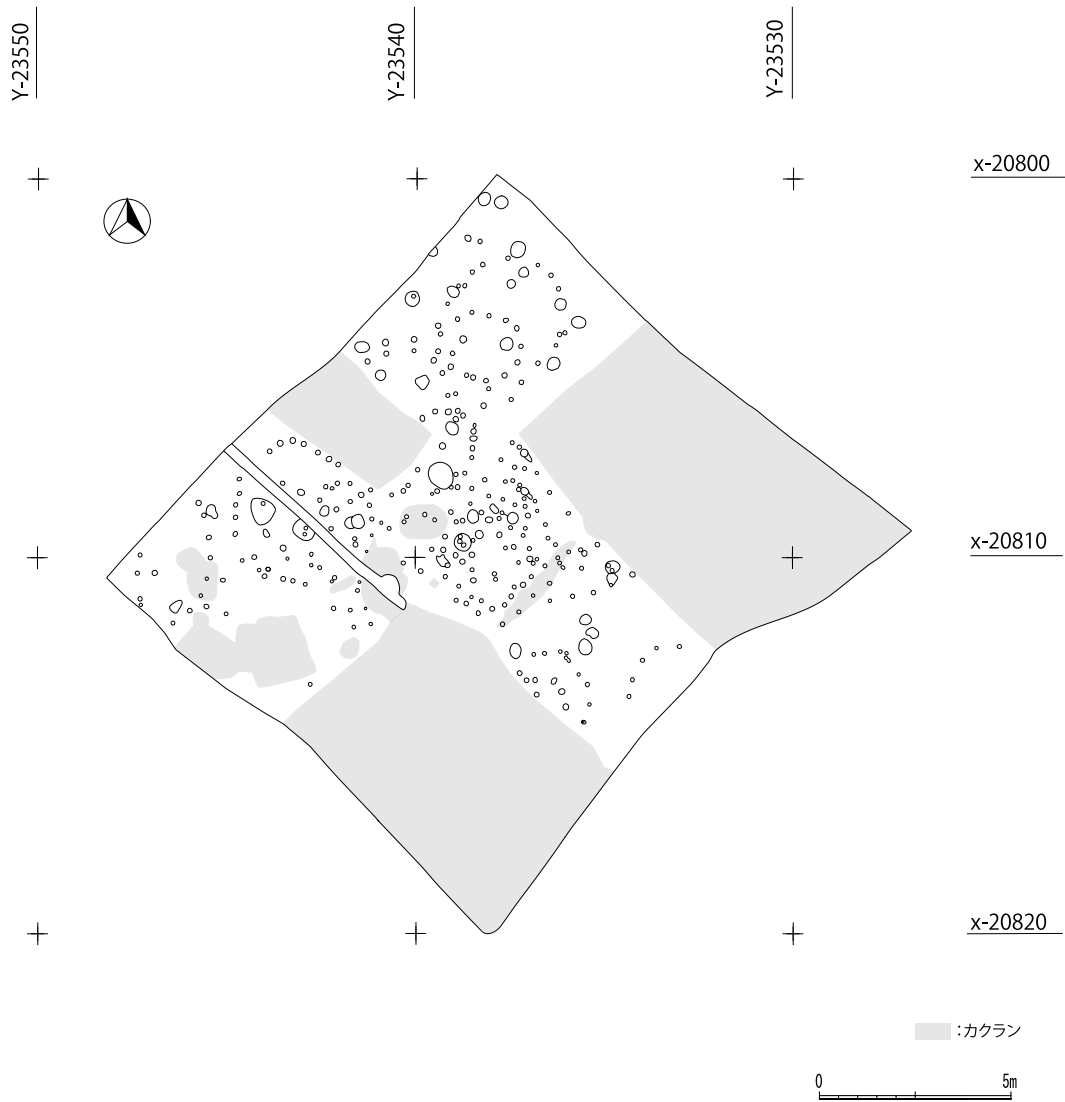
VII層 シロニガ

第5図 A区遺構配置図(S=1/200)



I	L=31.5m	基本土層註記 I層 表土 II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。5mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。 III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5mm以下の橙色粒を微量に含む。粘土ブロックをまれに含む。 所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。
II		
III		
IV	L=31.0m	IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。
V		V層 暗黄褐色粘質土 硬く強くしまり、粘性に富む。
VI		VI層 黄褐色土 下層のVI層の間に入り込んでいる。弱粘性。
VII		VII層 シロニガ

第6図 B区遺構配置図(S=1/300)



L=31.5m

L=31.0m

基本土層註記

- I層 表土
- II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。
- III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5mm以下の橙色粒を微量に含む。粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。
- IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。

第7図 C区遺構配置図(S=1/200)

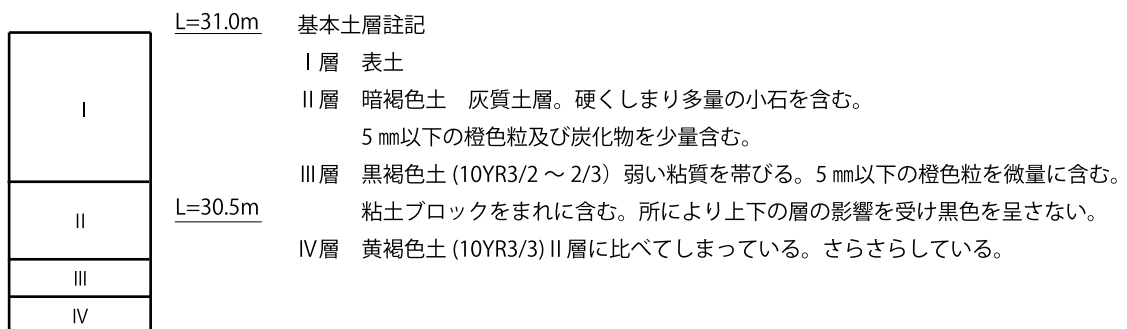


I	L=31.0m
II	
III	
IV	L=30.5m

基本土層註記

- I層 表土
- II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5 mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。
- III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5 mm以下の橙色粒を微量に含む。
粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。
- IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。

第8図 D区遺構配置図(S=1/200)



第9図 E区遺構配置図(S=1/200)



I
II
III
IV

基本土層註記

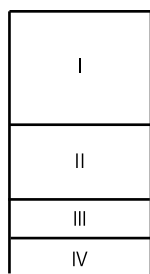
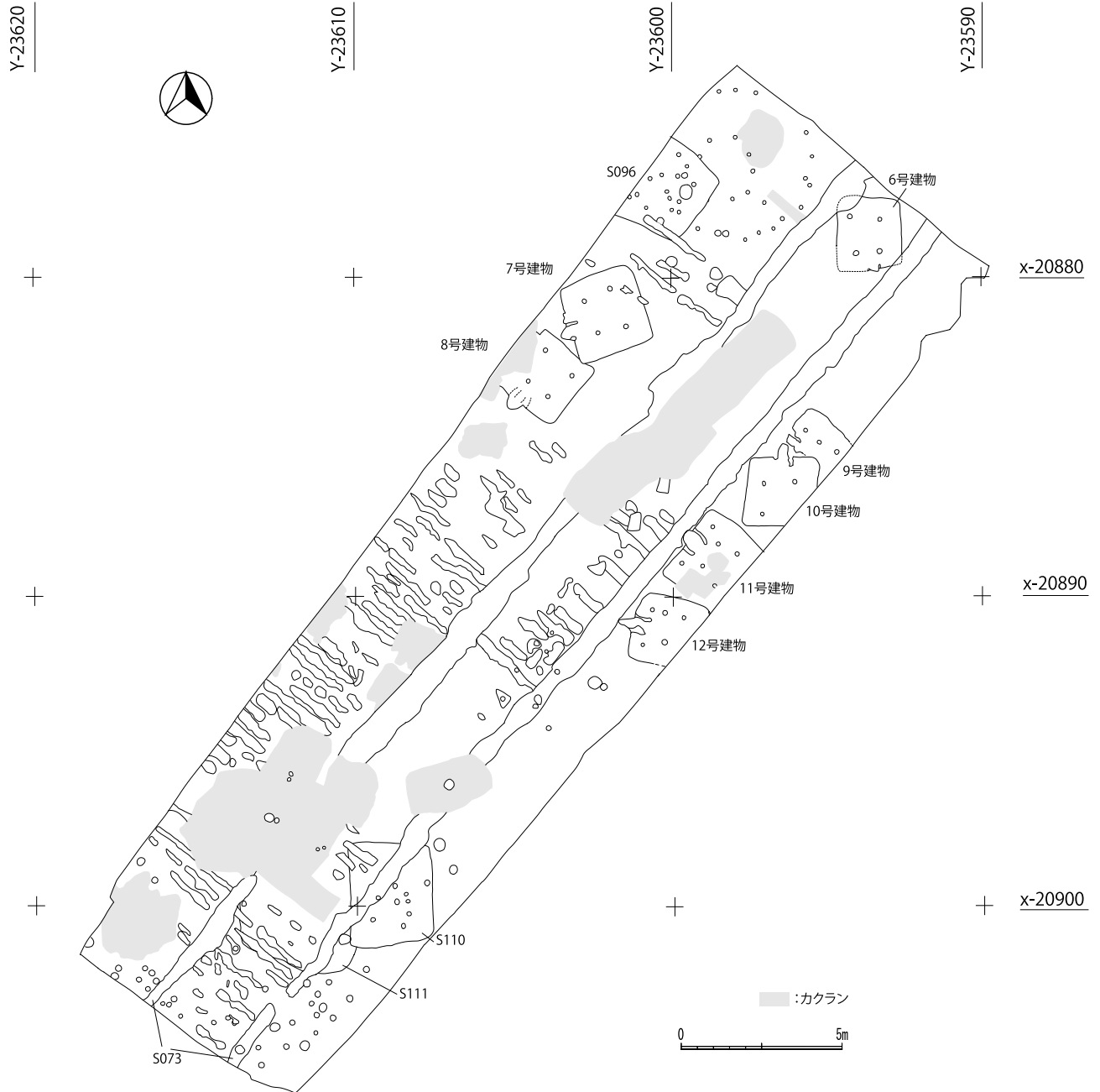
I層 表土
L=30.5m

II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。

III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5mm以下の橙色粒を微量に含む。
粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。

IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。
L=30.0m

第10図 F区遺構配置図(S=1/200)



L=30.5m

L=30.0m

基本土層註記

- I層 表土
- II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5 mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。
- III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5 mm以下の橙色粒を微量に含む。
粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。
- IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。

第11図 G区遺構配置図(S=1/200)

第2節 層序

基本土層は8層に分層される。調査区によっては、その中の層の幾つかが欠如している。その中で、I区ではII層を更にa～fの6層に細分し、J区では、VII層をA・Bの2つに分けてある。K区は、I区の土層を参考に分層されている。

以下基本土層について記述する。

I層は、表土である。

II層は、暗褐色土で、硬くしまり多量の小石を含む。5mm以下の橙色粒及び炭化物を少量に含む。

調査区によっては更に細分出来るようで、I区ではa・b層は暗褐色、c層以下は黒褐色土で、更に含まれる粒で細分されている。遺構検出面である。L区では確認されていない。

III層は、黒褐色土で、弱い。わずかに粘性がある。II層同様5mm以下の橙色粒を微量に含む。また粘土ブロックを含む場合がまれにある。I区・K区・L区では、確認されていない層である。

IV層は、黄褐色土で、II層より更にしまっている。A区・I区には存在しない。

V層は、暗黄褐色粘質土で硬くしまる。粘性に富む。C区・D区・E区・F区・G区・H区では存在しない。

VI層は、黄褐色土で、VI層の間に入り込んでいる。B区以外には存在しない。

VII層は、いわゆるシロニガである。C区・D区・E区・F区・G区・H区では確認されていない。

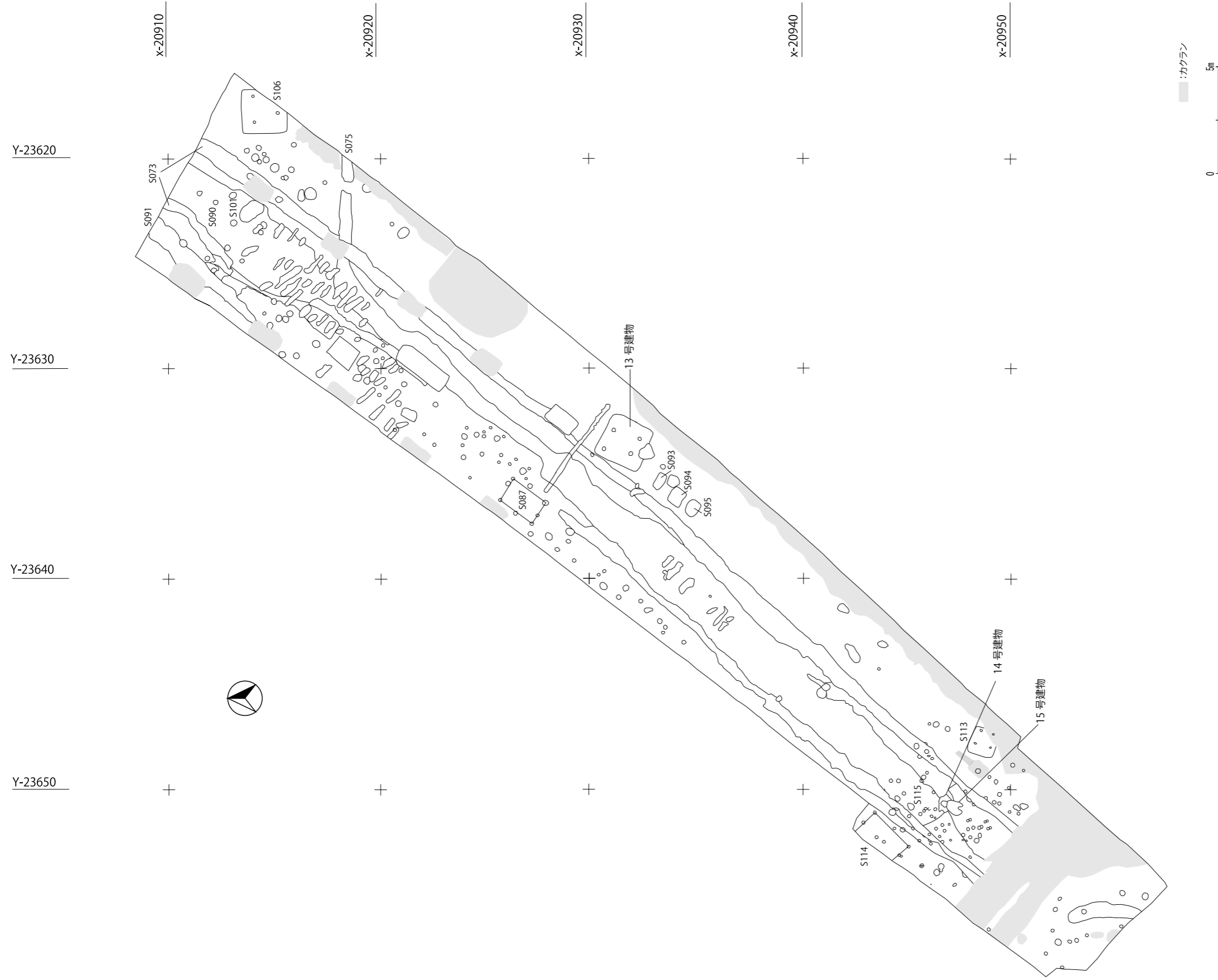
VIII層は、黄褐色ロームである。J区でのみ確認されている。

第3節 遺構と遺物

B区では4軒の竪穴建物を、F区では1軒の竪穴建物が確認されている。またG区では7軒のカマド付竪穴建物を、H区で1軒のカマド付建物及び、カマド部分のみの遺構2基を検出している。I区では2軒のカマド付竪穴建物、カマドのみの検出1基、カマドの有無は不明な建物1軒を検出している。一方でA区では明確な遺構はなく、C区・D区・E区では、多数の柱痕跡が検出されているが、竪穴状の建物は確認されていない。また調査担当者が異なるJ区、K区ではピットは検出されているが明確な遺構はK区の溝状遺構を除いては確認されていない。

竪穴建物については遺物を伴うものが少なく、時期は不明である。カマド付竪穴建物については、古代のものであろうと推測されるが、カマドを有さないものについては、時期は不明である。調査区全体としては、北側では縄文時代の後・晩期の遺物が多く、南にいくにつれ古代の遺物と遺構が増えるようである。

その他既存の道路にほぼ並列して2本の溝状遺構も検出されている。A区からD区では確認されておらず、E区から確認されはじめ、F区・G区・H区で検出され、I区でも部分的であるが確認され、更にK区でも確認されており、同じような性格の遺構と考えられる。K区のなかで一括して記述する。以下個々の遺構について見ていきたい。



- 基本土層註記
- I層 表土
 - II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。
5mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。
 - III層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5mm以下の橙色粒を微量に含む。
粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。
 - IV層 黄褐色土 (10YR3/3) III層に比べてしまっている。さらさらしている。

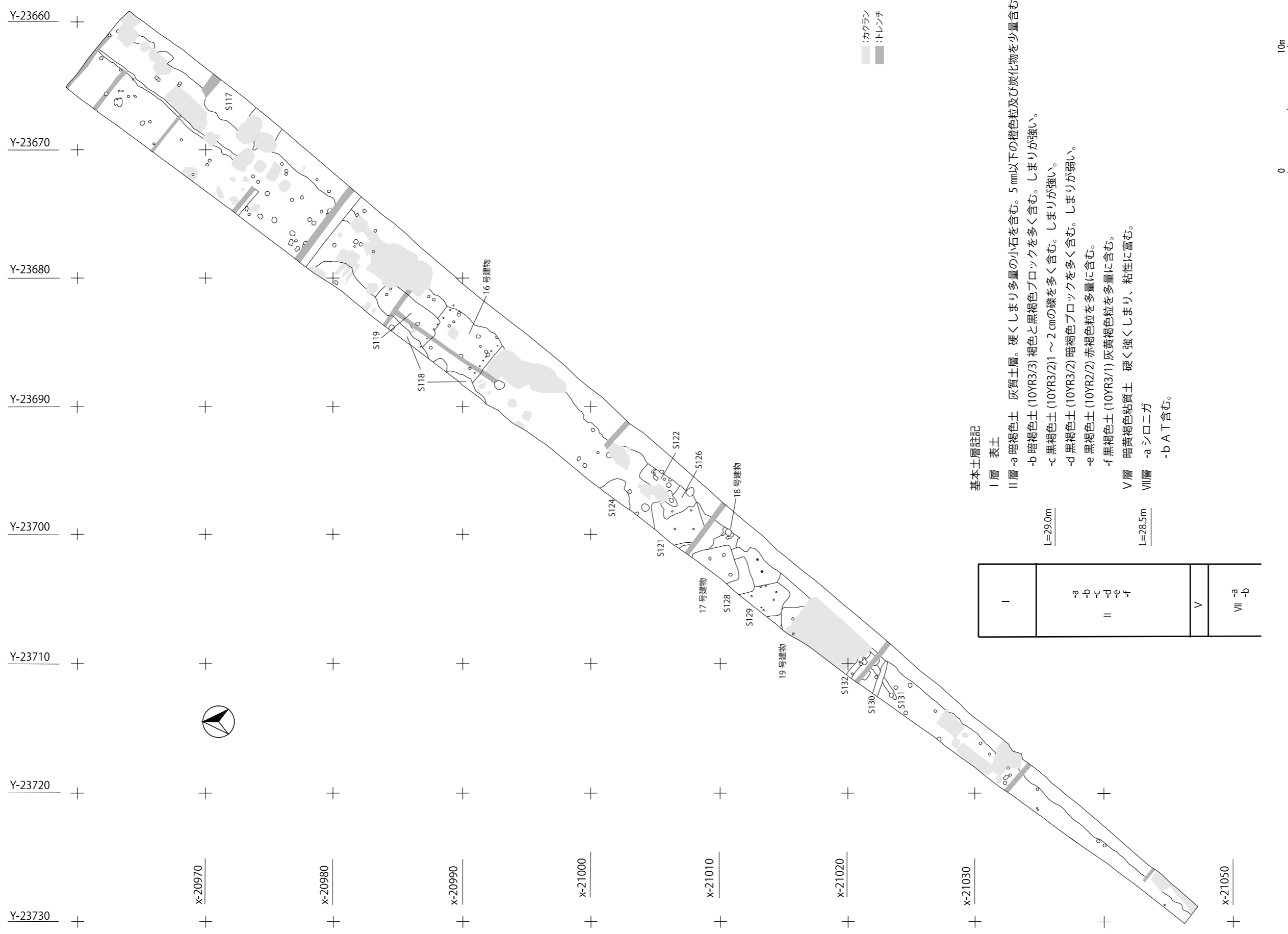
L=30.0m

I	II	III	IV
---	----	-----	----

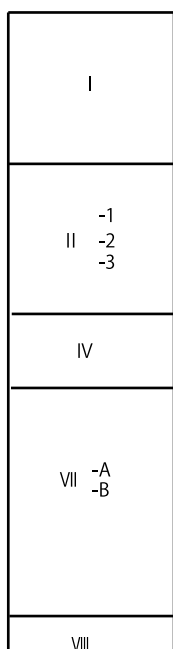
L=29.5m



第12図 H区遺構配置図 (S=1/200)



第 13 図 I 区遺構配置図 (S=1/300)



L=28.0m

L=27.0m

基本土層註記

I層 表土

II層 黒褐色土 (10YR3/2 ~ 2/3) 弱い粘質を帯びる。5 mm以下の橙色粒を微量に含む。

粘土ブロックをまれに含む。所により上下の層の影響を受け黒色を呈さない。

-1 黒褐色土 粘質小、しまり中。純粋な土だけでなく褐色粘質ブロックが所々混入する。

-2 暗褐色土 粘質小、しまり中。ぼやけた黒褐色土が所々混入している。

-3 黒褐色土 粘質小、しまり中。2層と比べて混じりがなくきれいである。

IV層 黄褐色土 (10YR3/3) II層に比べてしまっている。さらさらしている。

VI層 黄褐色土 下層のVI層の間に入り込んでいる。弱粘性。

VII層 シロニガ

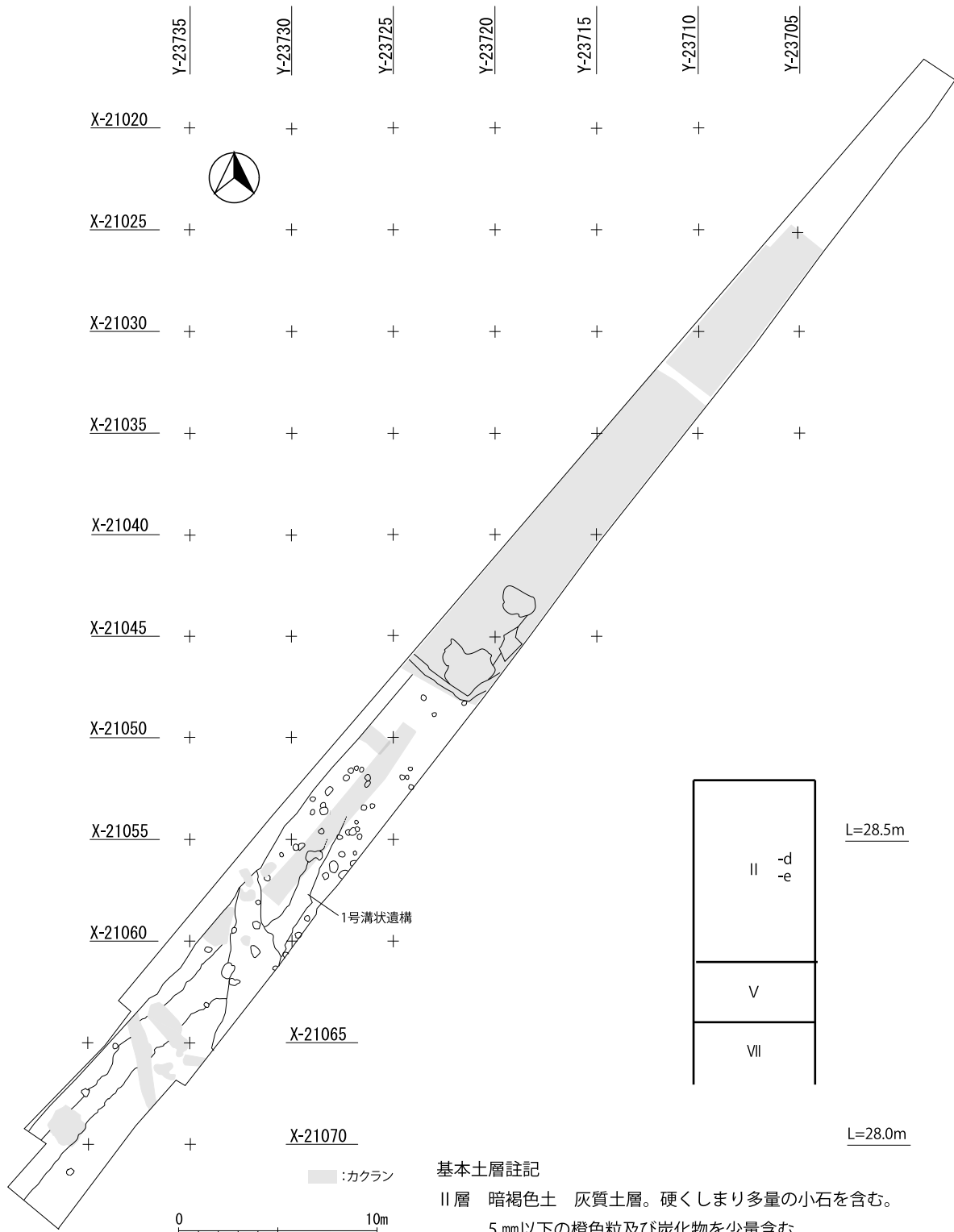
-A シロニガ 粘質小、しまり小。ニガの筋が縦に部分的に見られる。

-B シロニガ 粘質小、しまり小。-A層よりもニガの割合が高く

黄褐色ロームブロックが全体的に混入する。

VIII層 黄褐色ローム

第14図 J区遺構配置図(S=1/200)



基本土層註記

II層 暗褐色土 灰質土層。硬くしまり多量の小石を含む。

5 mm以下の橙色粒及び炭化物を少量含む。

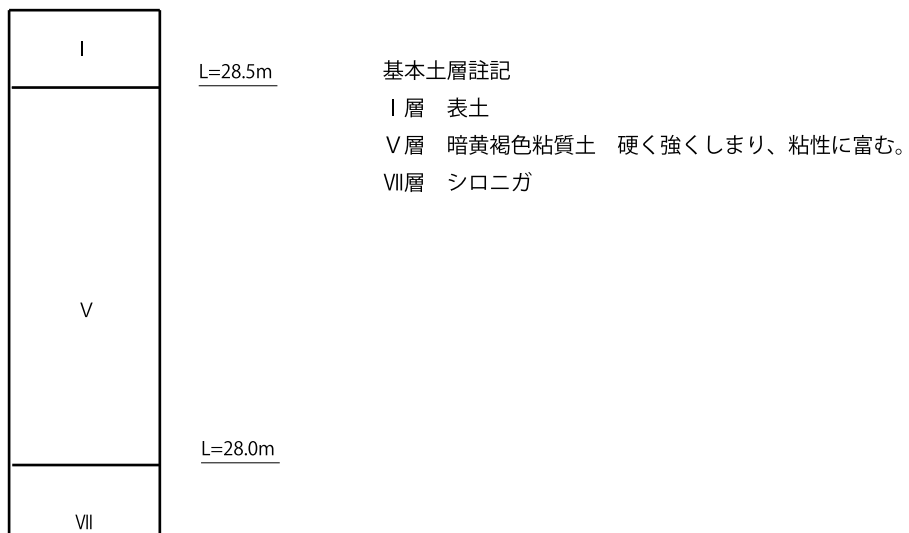
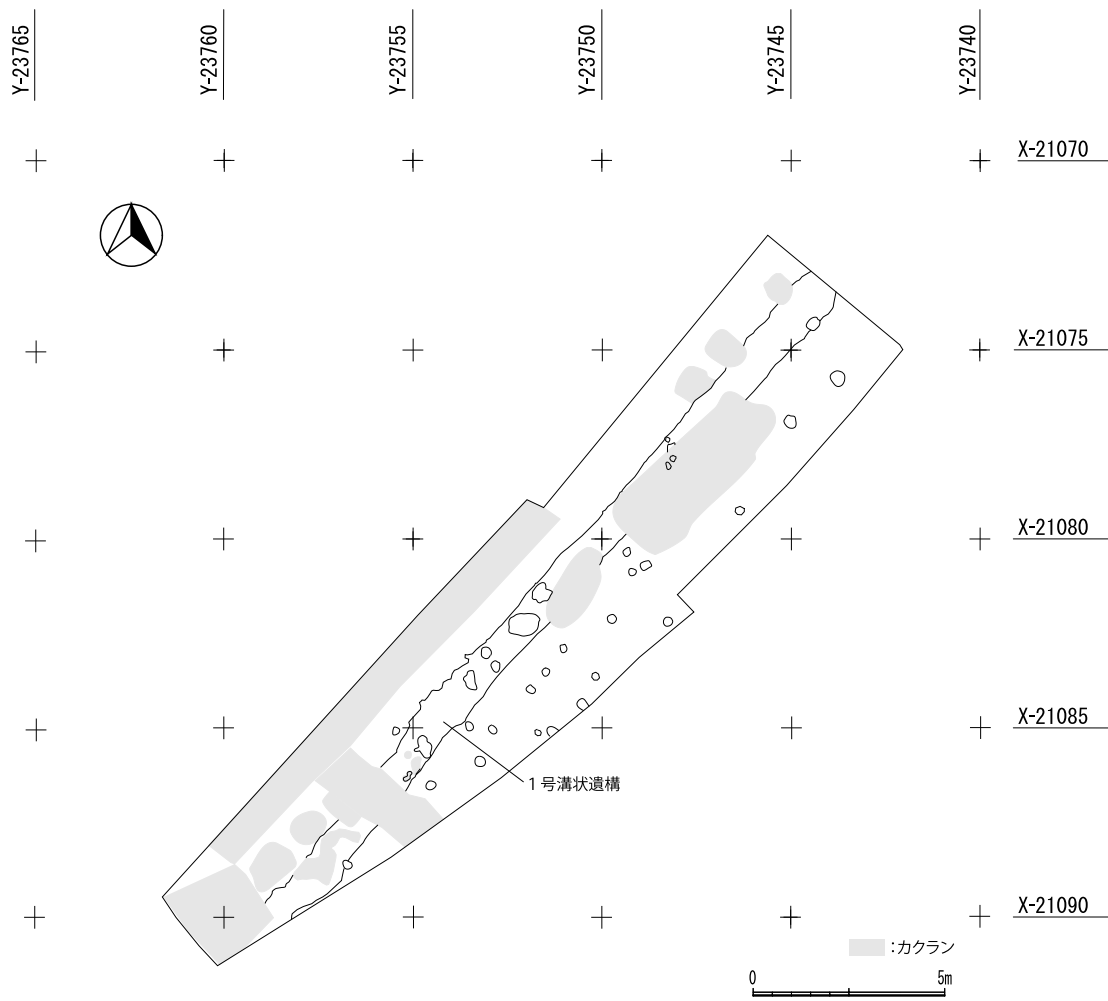
-d 黒褐色土 (10YR3/2) 暗褐色ブロックを多く含む。しまりが弱い。

-e 黒褐色土 (10YR2/2) 赤褐色粒を多量に含む。

V層 暗黄褐色粘質土 硬く強くしまり、粘性に富む。

VII層 シロニガ

第15図 K区遺構配置図 (S=1/300)



第16図 L区遺構配置図(S=1/200)

B 区の調査（第 6・17 図）

南東寄りで 4 軒の竪穴建物跡が一部重なりあって検出されている。築造順は 2 号→1 号→4 号→3 号竪穴建物としている。ほとんど削平されているので、土の堆積状況からの判断ではなく、平面的な切り合い関係からの判断のようである。

1 号竪穴建物

4 軒の竪穴建物の一番北側に 1 号竪穴建物が存在する。南西隅を 3 号竪穴建物により破壊されている。削平されており、北東側で僅かにコーナー部分の立ち上がりを確認されているだけで、ほとんど硬化面だけである。また柱穴の配置が西側に寄り過ぎで、炉も確認されていないので、確実に竪穴建物とは認定できないかもしれないが、建物として取り扱った。

2 号竪穴建物

1 号竪穴建物の東側に位置する竪穴建物である。北西側 4 分の 1 程が、1 号竪穴建物により破壊されている。また東側は調査区外となる。削平され硬化面も確認されていないが、焼土の存在と、焼土の周辺で 3 つの柱穴痕跡を確認されていることから竪穴建物と認定した。調査者は、1 辺 160cm 程の方形プランの建物を推定している。

3 号竪穴建物

4 軒の建物の中で一番新しいもので、4 号・1 号竪穴建物の一部を破壊している。南北長約 175cm、東西長約 190cm を測る。削平され、深さは 10cm にも満たない。4 本柱であるが、並びがやや歪である。北西側の柱痕跡は、深さ約 38 cm で、断面形から推察すると柱直径は 5 cm 程と推察される。他の 3 本は掘り過ぎている。

4 号竪穴建物

かなりの部分が 3 号竪穴建物により削平を受けているが、3 号竪穴建物より深度が深いので床面は残り、ほぼ全体形が把握できる。東西 158cm、南北側は削平を受け建物の立ち上がりが不明確な所はあるが約 159cm で、正方形に近い建物である。前述したように削平を受け深さは 10cm に満たない。4 本柱の建物であるが、柱掘り方径は 10cm 程度で、北西側の柱は深さ 50 cm 程を測る。他の 3 本は掘り過ぎてしまっているようである。中央に楕円形の炉（40 cm × 30 cm 程度）があり、炉の周りには硬化面が広がる。

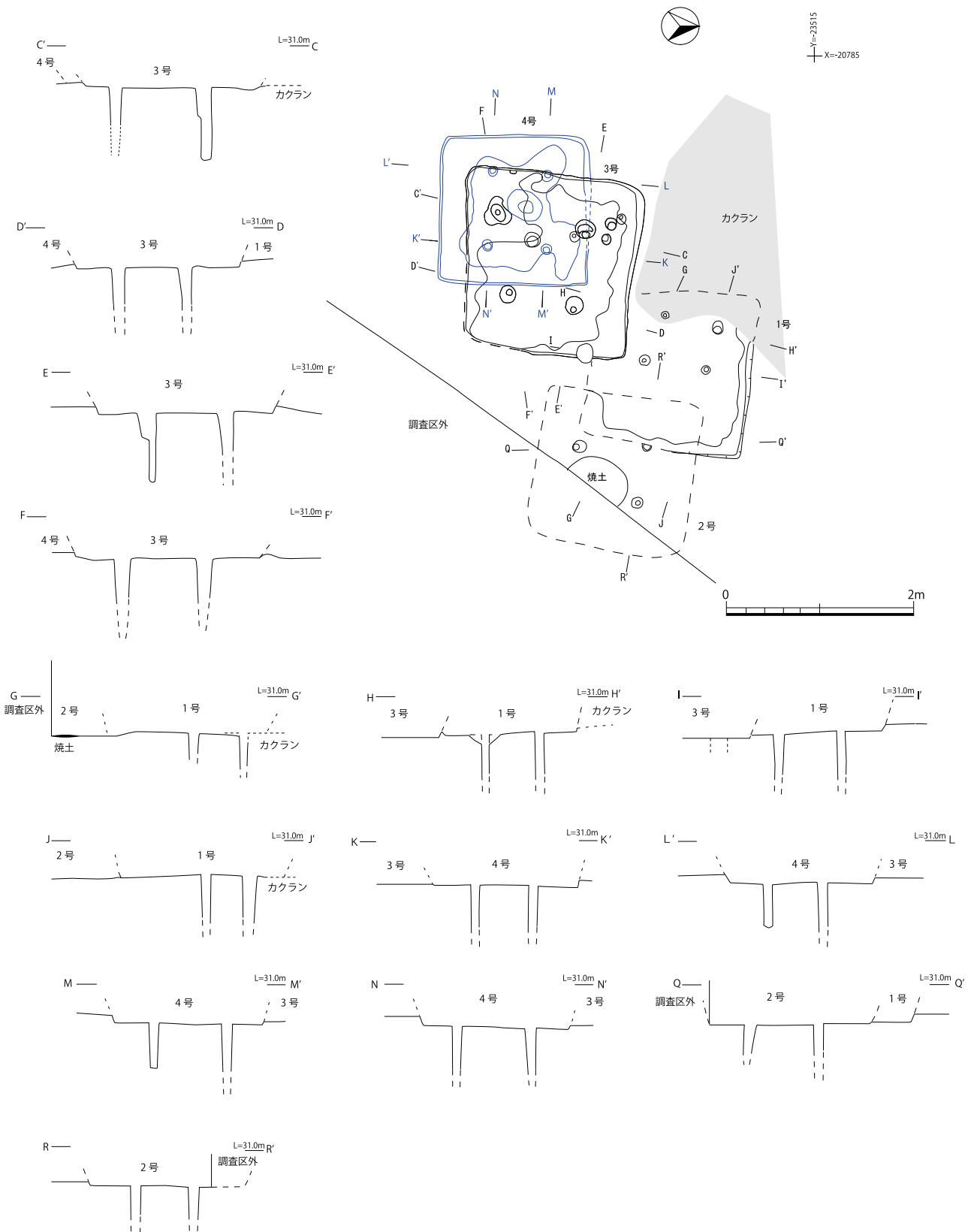
いずれの建物からも遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

F 区（第 10 図）

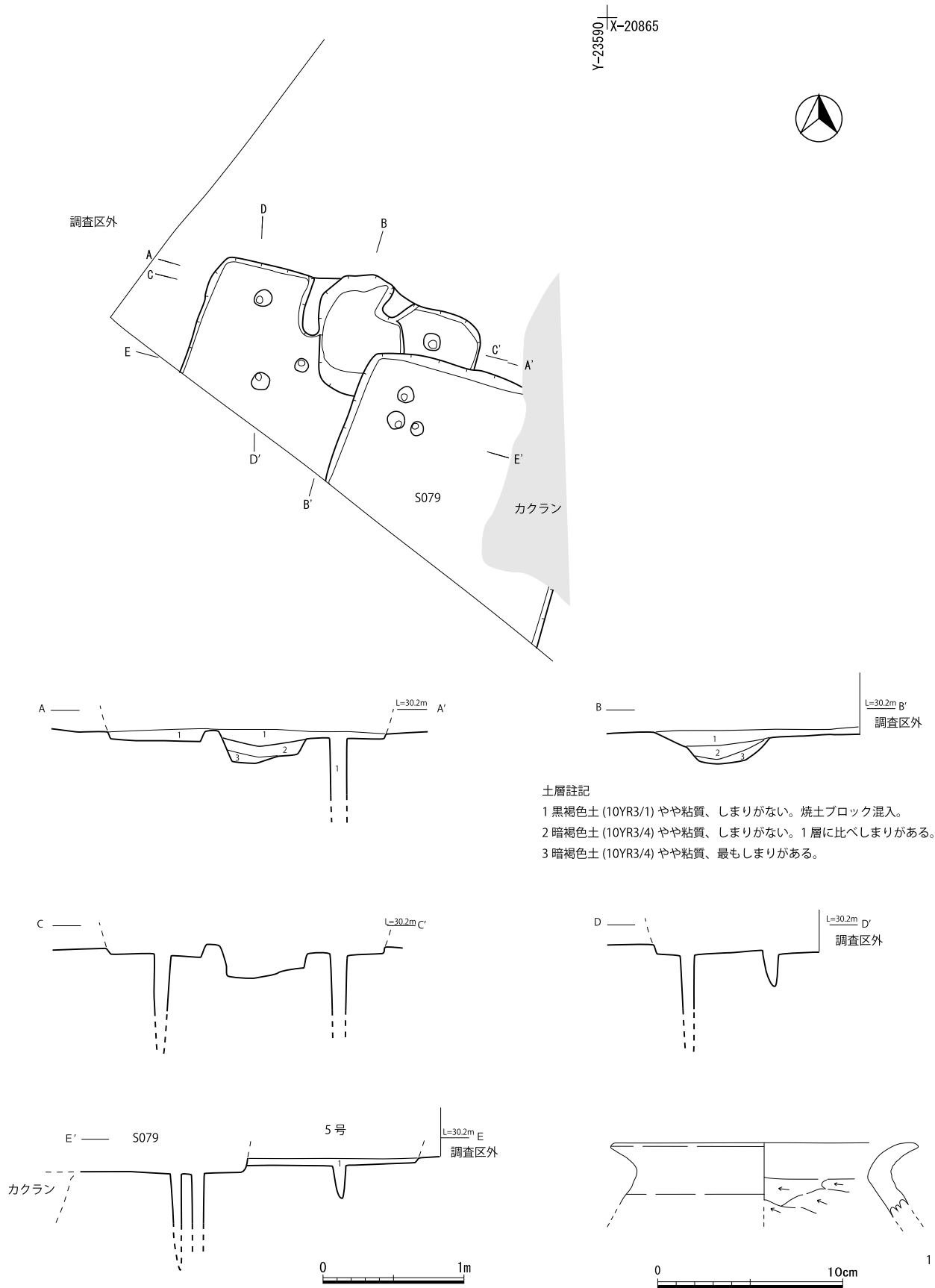
C 区・D 区同様多数の柱痕跡のようなピットが検出されている調査区の中で 1 軒竪穴建物が検出されている。

5 号竪穴建物（第 18 図）

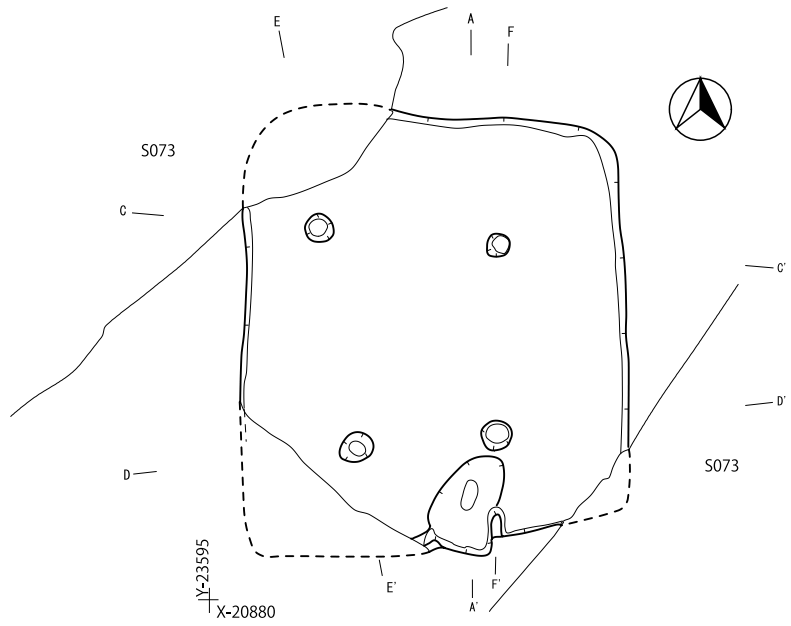
F 区南西隅で検出された造り付けカマド付竪穴建物跡である。S079 により部分的に破壊されている。また南側は調査区外となる。東西幅約 196cm、削平を受けており、床面までの深さは 5 cm にも満たない。柱の本数は不明であり、カマドを挟んだ左右の穴については、この建物に伴うものか不明である。カマドは北側についている。建物の大きさに比べ、カマドが巨大な印象を受ける。カマドの袖が部分的に残存している。B - B' の断面図を見ると北側壁（B 側）が斜めに削られているので、煙道部があった可能性がある。また燃焼部の床面は 20cm 程掘り込まれている。A - A' の断面図をみると、突出した部分はカマドの袖部分と思われるが、断面図を見る限り、単に床面が盛り上がっているだけで、粘土の存在等は不明である。また



第17図 B区1号・2号・3号・4号建物平面図及び断面図 (S=1/60)

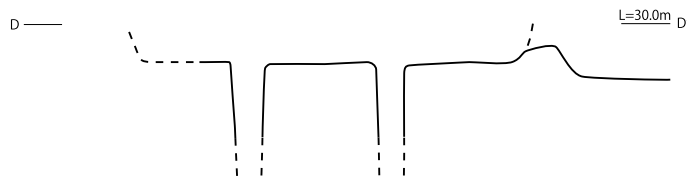
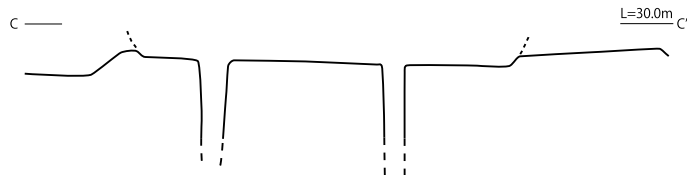
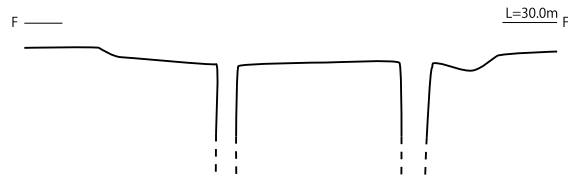


第18図 F区5号建物平面図・断面図(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)

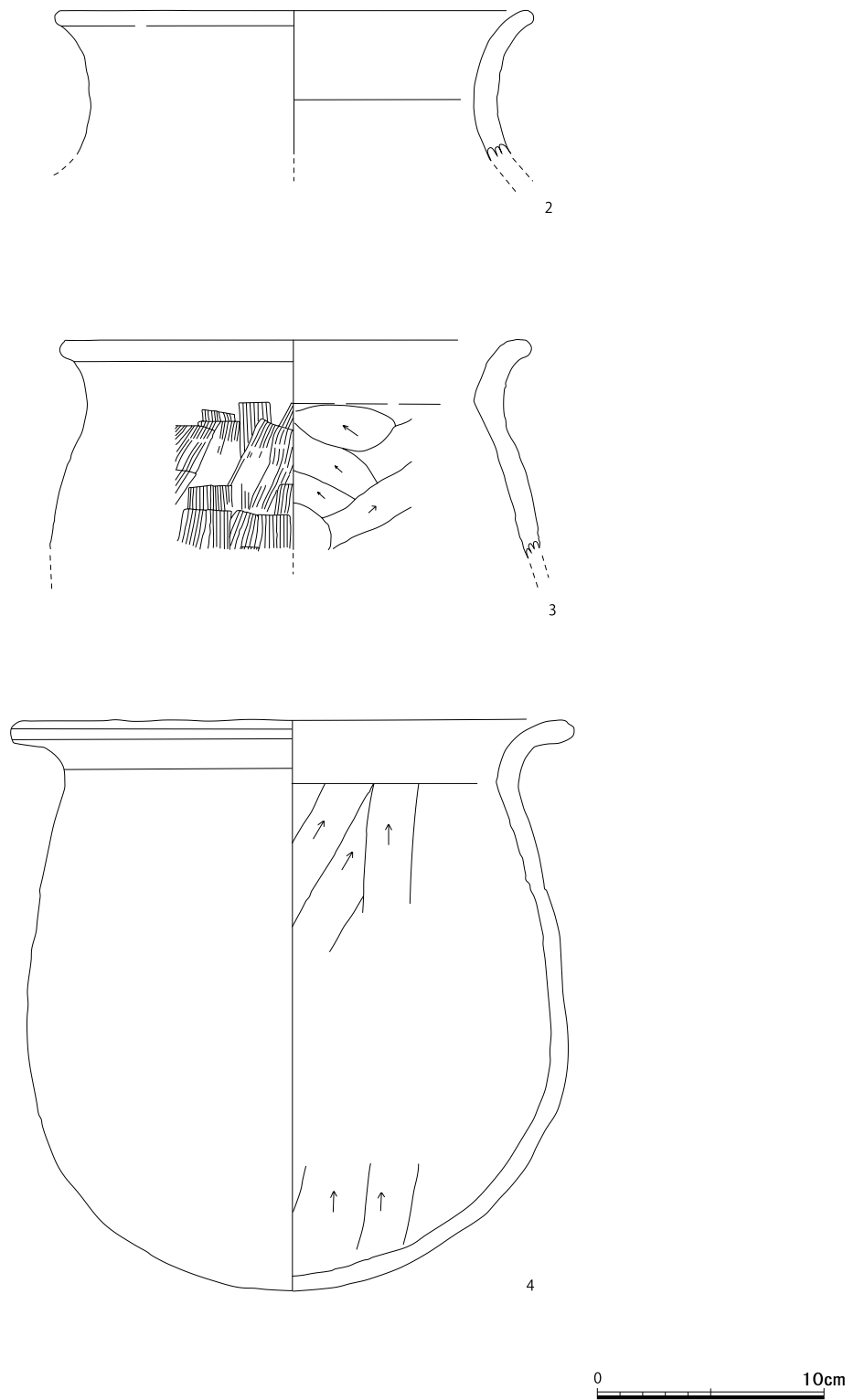


土層註記

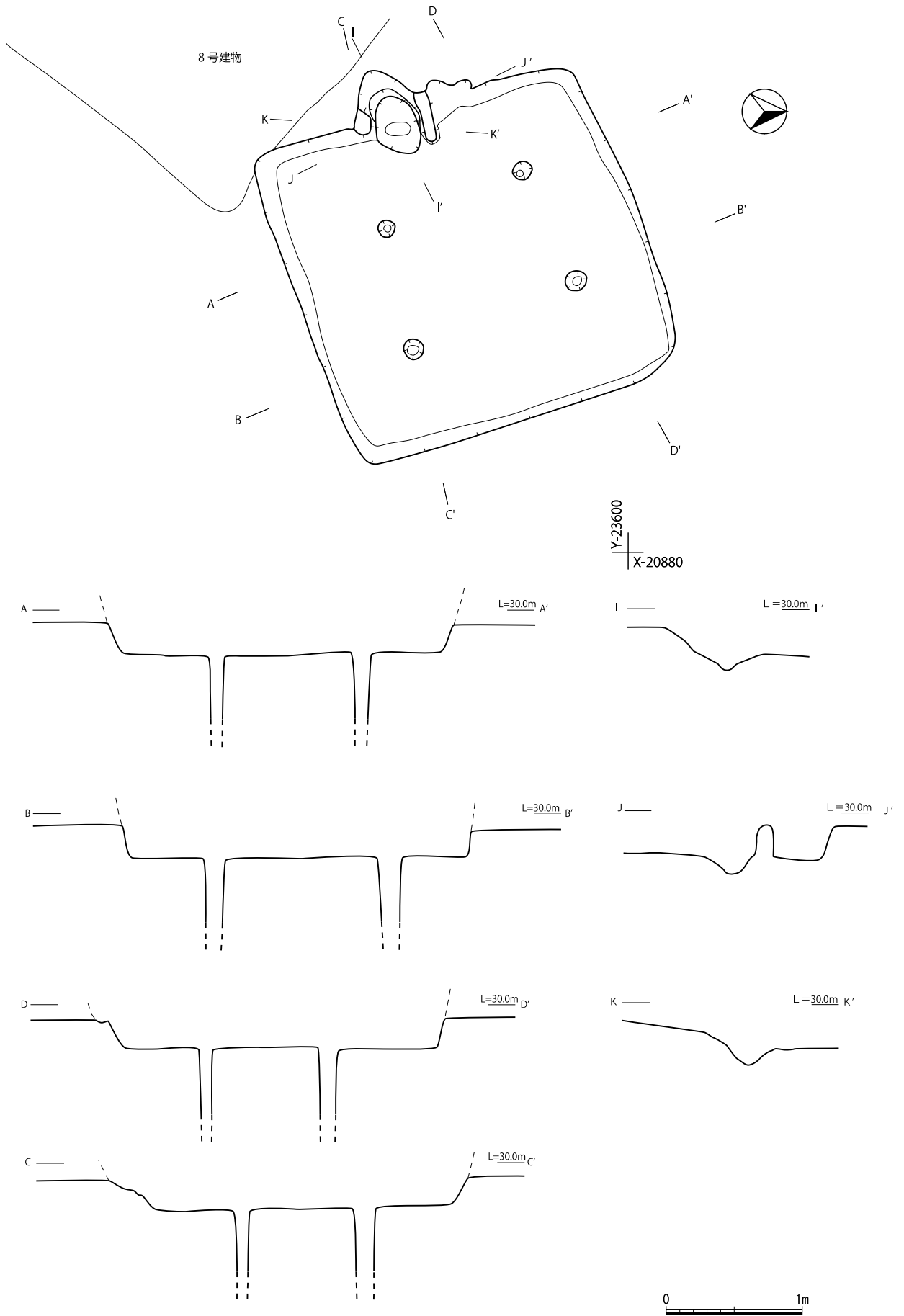
- 1 黒褐色土 (5YR2/1) やや粘質、しまりがある。
- 2 赤褐色土 (5YR4/6) やや粘質、しまりが無い。カマド内の焼土を多量に含む。
- 3 暗赤褐色土 (5YR3/2) やや粘質、しまりがある。



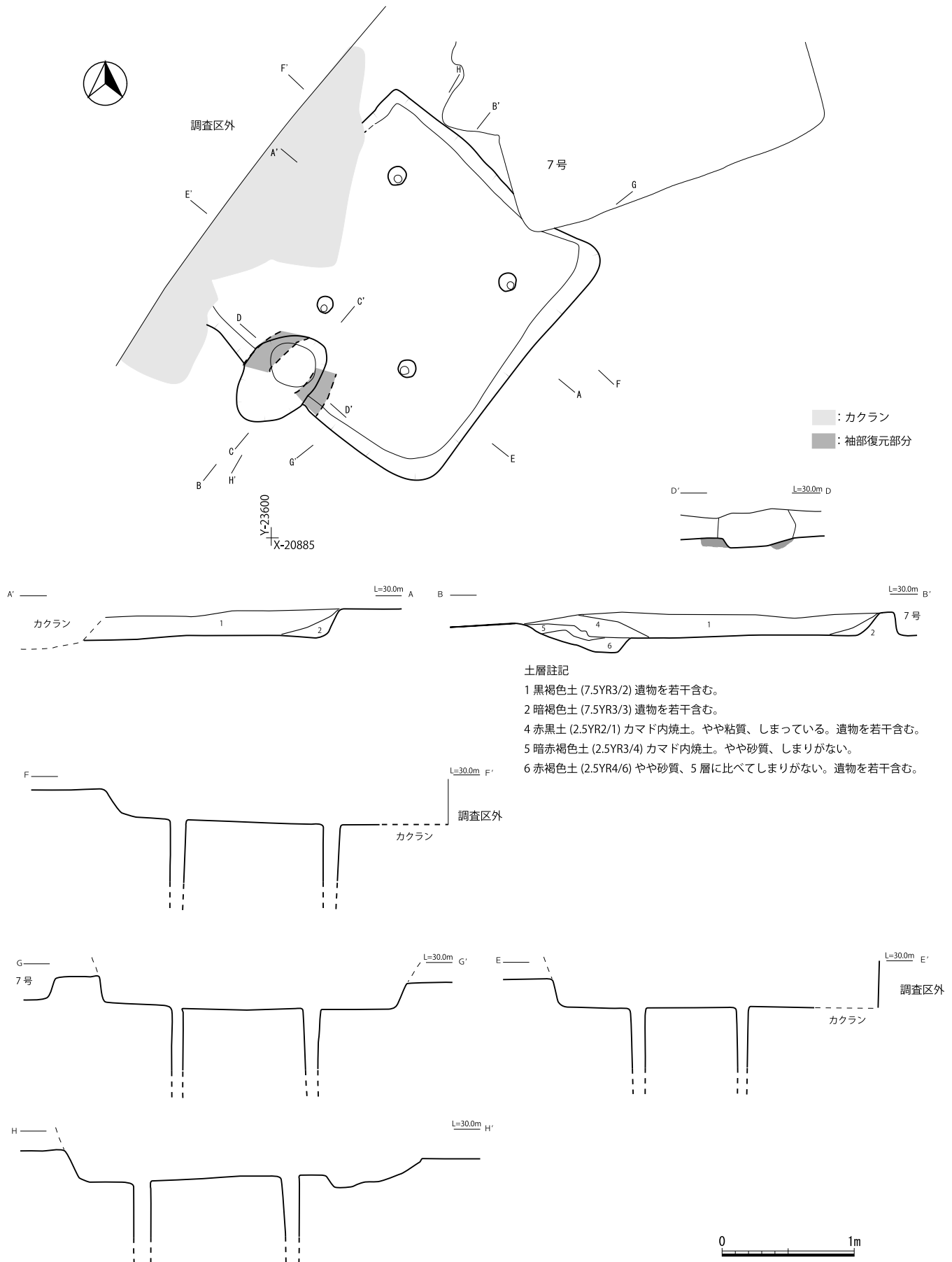
第 19 図 G 区 6 号建物平面図及び断面図 (S=1/40)



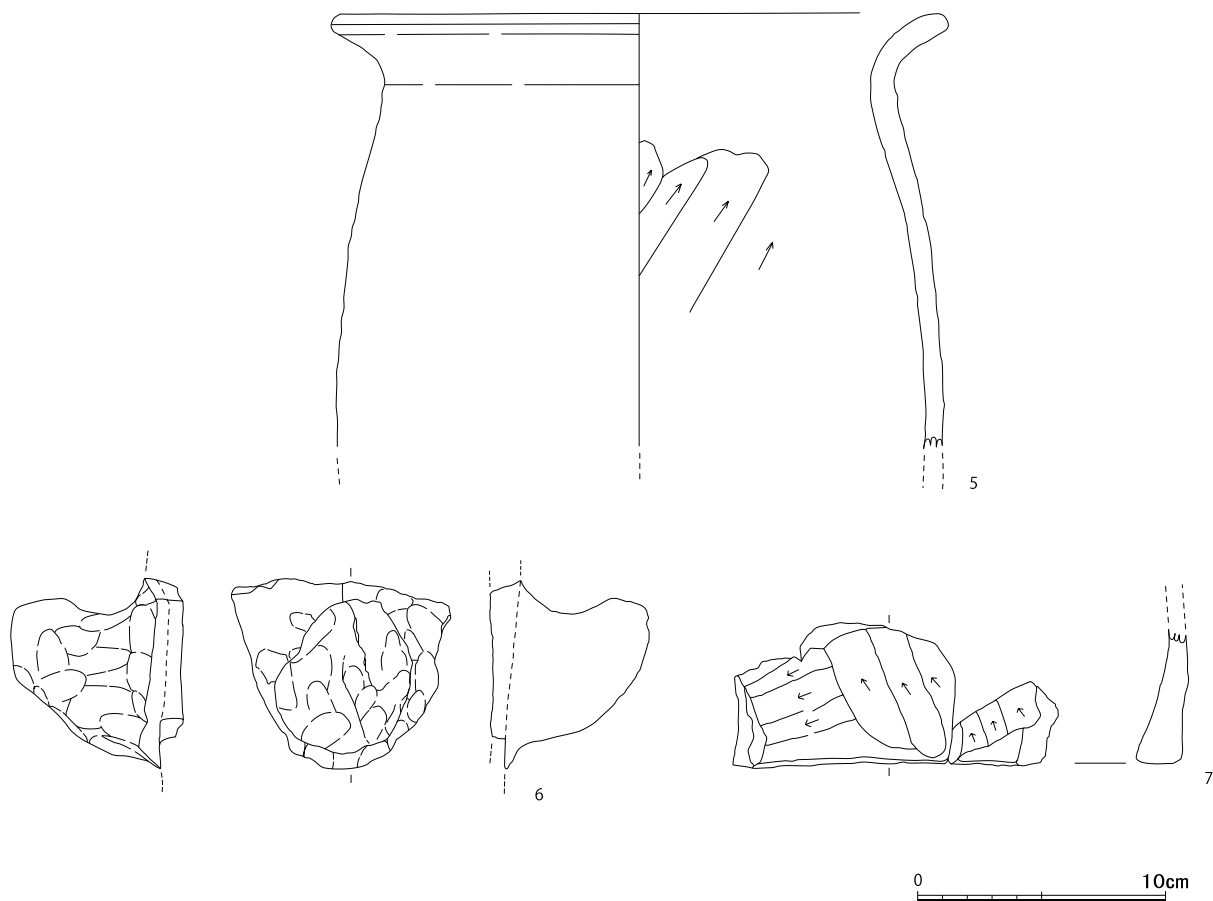
第20図 G区6号建物(2-3)・7号建物(4)出土遺物実測図(S=1/3)



第 21 図 G区 7号建物平面図及び断面図 (S=1/40)



第22図 G区8号建物平面図及び断面図 (S=1/40)



第 23 図 G 区 8 号建物出土遺物実測図 (S=1/3)

土層の堆積はかなり不自然で、カマドの崩落部分等を一旦きれいに撤去し、その後でいっきに埋め戻したような状況を示すが、分層が誤っている可能性もある。出土遺物としては、土師器の甕がある。

G 区 (第 11 図)

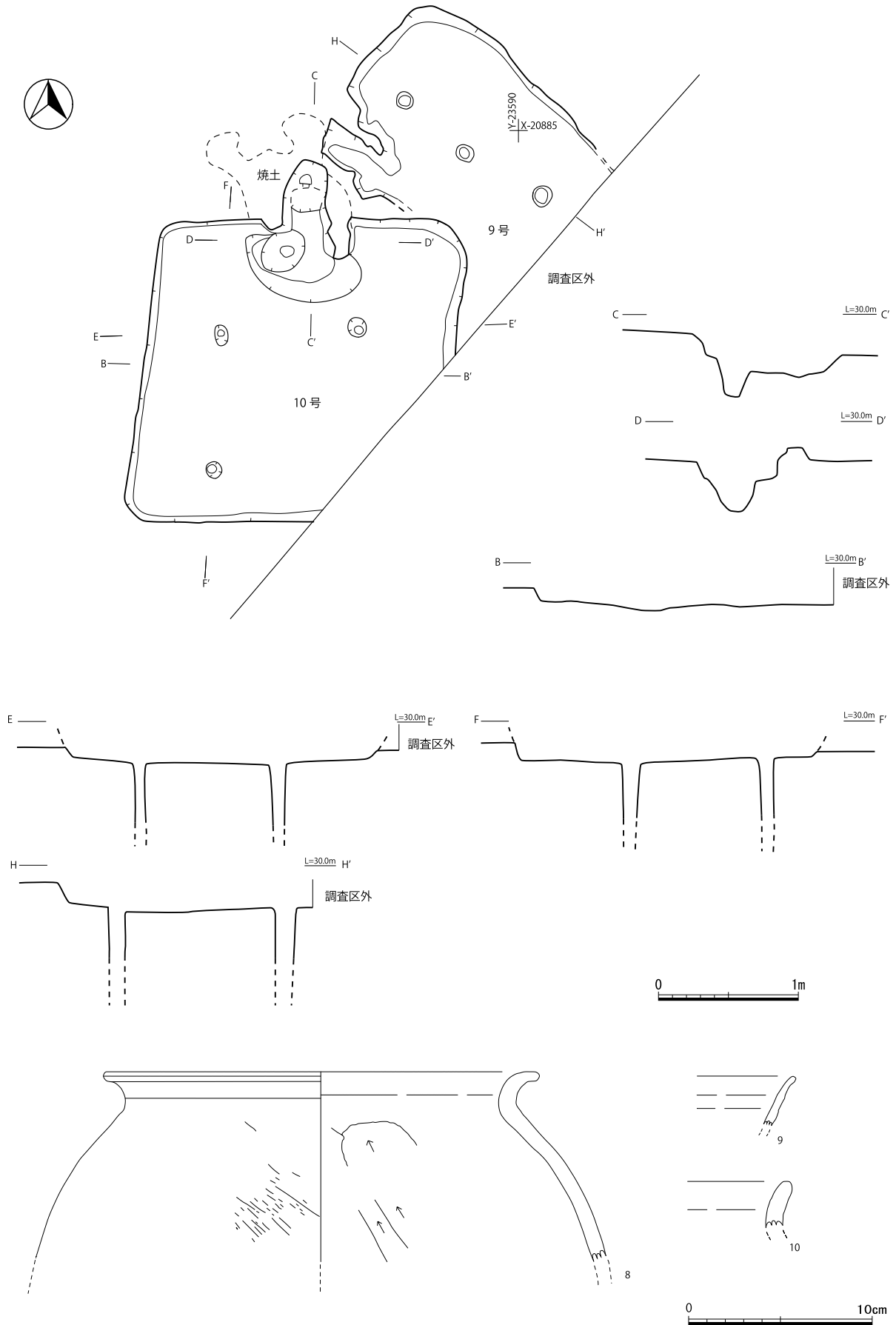
調査区の中で一番造り付けカマドを有する建物が多い箇所である。

6 号竪穴建物 (第 19・20 図)

G 区北東端で検出されている。溝状遺構 (S073) により北西隅、南東隅が破壊されている。また南西側は削平を受け南西隅も不明確である。また南壁中央付近にカマドの袖のような張り出し及び床面の掘り込みがあり、掘り込みの埋土に焼土を多量に含むので、カマドの存在が想定される。建物は、東西幅約 202cm、南北は推定 230cm 程である。深さは 5 cm にも満たない。四本柱の建物である。またカマドは、袖の先端が残存しているように見え、そうであるならカマドは壁面を切り込んで設置されるようである。また燃焼部の掘り込みから推察すると、壁面に斜めにつくようでもある。出土遺物は、土師器甕の口縁部片が 3 点出土している。

7 号竪穴建物 (第 20・21 図)

北西付近で検出された。8 号竪穴建物を一部破壊する。西に造り付けカマドを有する竪穴建物である。規模は、南北で 260 cm、東西で 240 cm 程、深さは約 20 cm で 4 本柱の建物である。柱掘方径は最大で 18 cm 程であるが、掘り過ぎのため、柱径や深さは不明である。平面図や I-I の断面図からみると煙道部が残存しているようである。中央の楕円形のピットが支脚用のピットと考え、また西壁の下端の状況が間違いないければ、北側のカマド袖は建物内に少し出っ張っているが、南側の袖は壁内に収束しているので、カ



第24図 G区9号・10号建物平面図・断面図 (S=1/40)

及び9号建物(8)・10号建物(9-10)出土遺物実測図 (S=1/3)

マドは壁面を切り込んで設置され、壁面に対してわずかに斜めに設置されるようである。しかし土層堆積状況が作成されておらず詳細は不明である。出土遺物として土師器甕がある。

8号竪穴建物（第22・23図）

G区北西側で検出されて南西に造り付けカマドをもつ竪穴建物である。建物の北西側は、後世のカクランにより破壊されている。また北東壁の一部も7号竪穴建物により破壊されている。4本柱として認識されているが、柱間隔に差がありすぎるようにも思える。柱掘り方径14cm程であるが、柱径や深さは掘り過ぎのため不明である。一方カマドは床面と煙道部まで熱をうけ焼土面を形成しているようである。また袖は破壊され、床面部分に僅かに痕跡が認められるようである。その他焚口付近にも粘土が認められるが、ブロック状で原位置ではないと考えられる。しかしB-B'の土層堆積状況の図が理解できないため、これ以上言及できない。

出土遺物は、土師器甕、甑の把手の他、移動式カマドの底部片が出土している。

9号竪穴建物（第24図）

G区北東側で検出されている。9号竪穴建物は、10号竪穴建物により南側が破壊されている。また南東側は調査区外となる。北西壁は中央付近で舌状に突出しており、カマドの袖と考えられるが、注記もなくこれ以上の情報は不明である。現状で長さ190cm以上、深さ15cm程を測る。2つの柱痕跡が確認されているが、本来は4本柱が想定される。柱掘り方径15cm前後であるが、掘り過ぎており柱径や深さは不明である。

出土遺物は、土師器の口縁部片が出土している。

10号竪穴建物（第24図）

北に造り付けカマドをもつ建物であり。南東部隅は調査区外となる。F-F'で215cm、E-E'で225cm程である。カマドの袖となる粘土が北壁に接した箇所を確認されている。この平面図が正しいならばカマドの東側袖は、建物内に突出し、西側袖は僅かに突出している程度であること、カマドの奥に支脚用のピットと思われるものが存在することから、北壁を切り込んでカマドが配置されたことが推察される。また西側袖の南側延長上に30cm前後のピットが存在するが、その性格は不明である。その他焼土が建物の外に広がっていることについても、その理由は不明である。或いは焼土の痕跡は9号竪穴建物のカマドに伴うものであったのかも知れない。柱痕跡は、3か所で確認されており、本来は4本柱が想定される。柱掘り方径は15cm前後であるが、掘り過ぎのため柱径、深さは不明である。

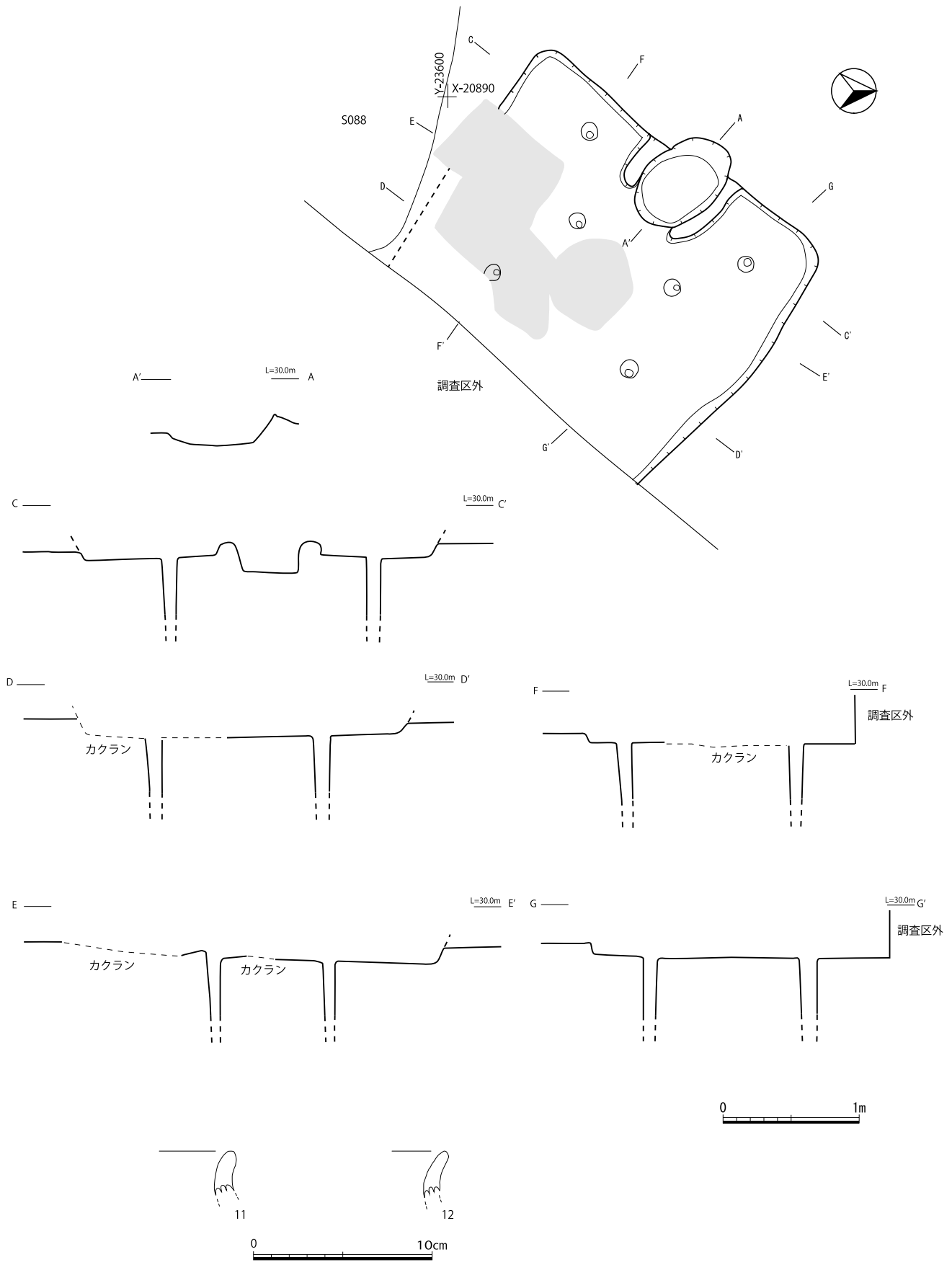
遺物は、土師器の口縁部の小片が出土している。

11号竪穴建物（第25図）

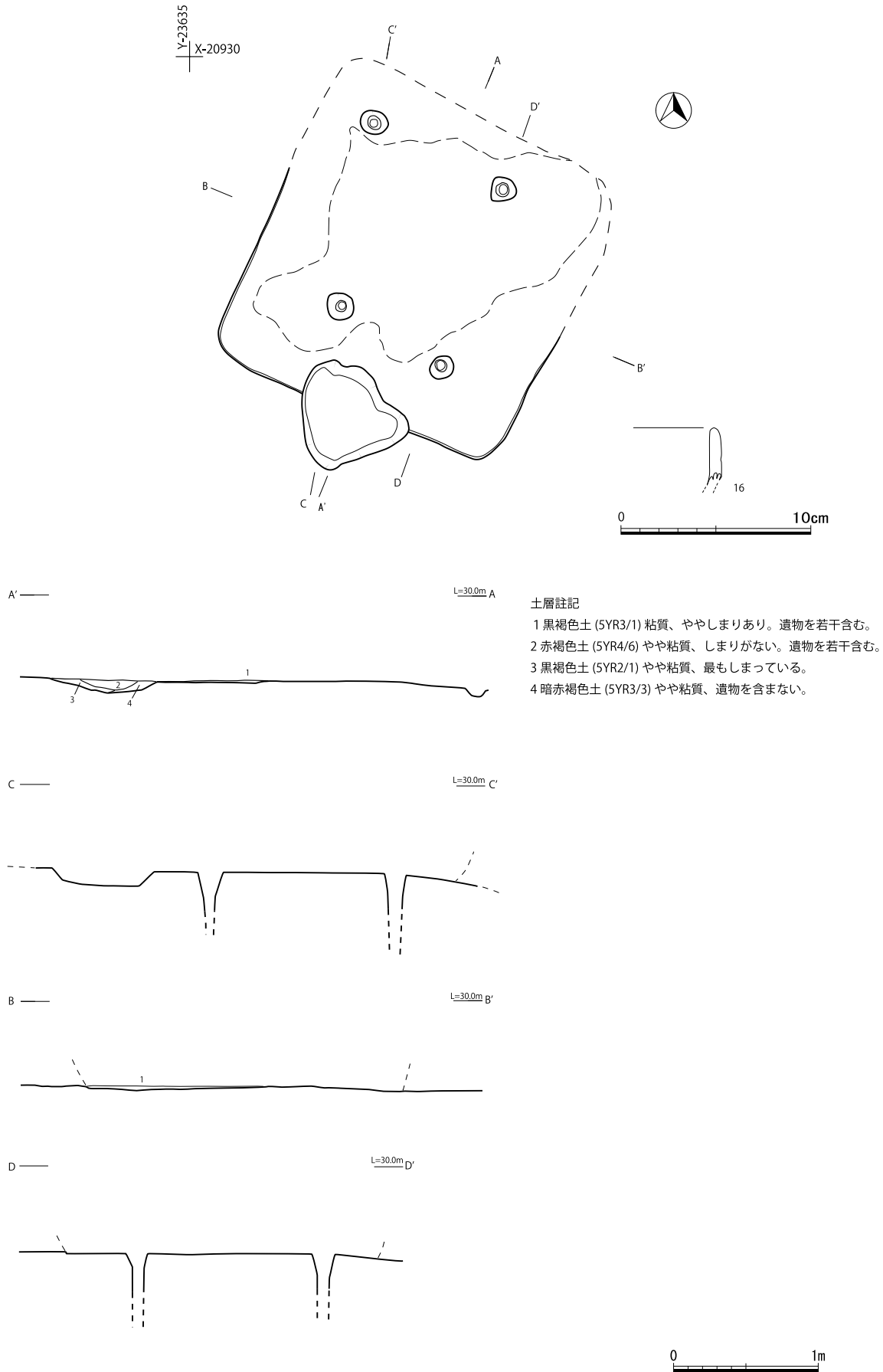
北西に造り付けカマドを有する建物である。袖を構成する粘土の範囲は建物の外に広がっているので、北西壁を切り込んでカマドが配置されていると考えられる。現状では長さ240cm程、深さ10cm程の規模の住居である。調査者は6本柱を想定されているようである。柱掘り方は径約20cmほどであるが、掘り過ぎており柱径や深さは不明である。出土遺物としては、土師器口縁部片がある。

12号竪穴建物（第26図）

11号竪穴建物のすぐ南に位置する、西に造り付けカマドを有する建物である。東側は調査区外になっている。袖部を構成する部分が赤変しており、一見すると焼土の範囲がH字状に残存しているので、カマドの上端部の掛口部分が残存しているように思える。ところが断面図（G-G'）でみると赤変している箇所は、床面より僅かに高いくらいであり、カマド部分はほとんど削平されていることになってしまう。となると何故破壊され割れた面まで赤変しているのか等うまく説明することが出来ない。一方でカマド部分にはトンネル状に深く掘り込まれた箇所がある。トンネルの壁部分についての注記がなく、単に堆積層を掘り抜いているのか、粘土で構成してあるのかは不明である。仮に粘土等で構成されているのであれば、断面図で宙に浮いたように

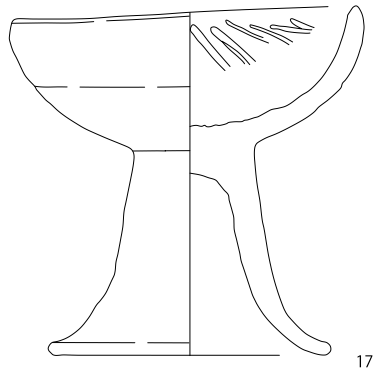


第25図 G区11号建物平面図・断面図(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)

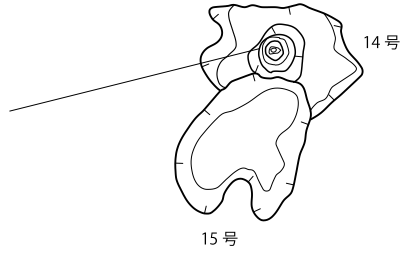


第 27 図 H区 13号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

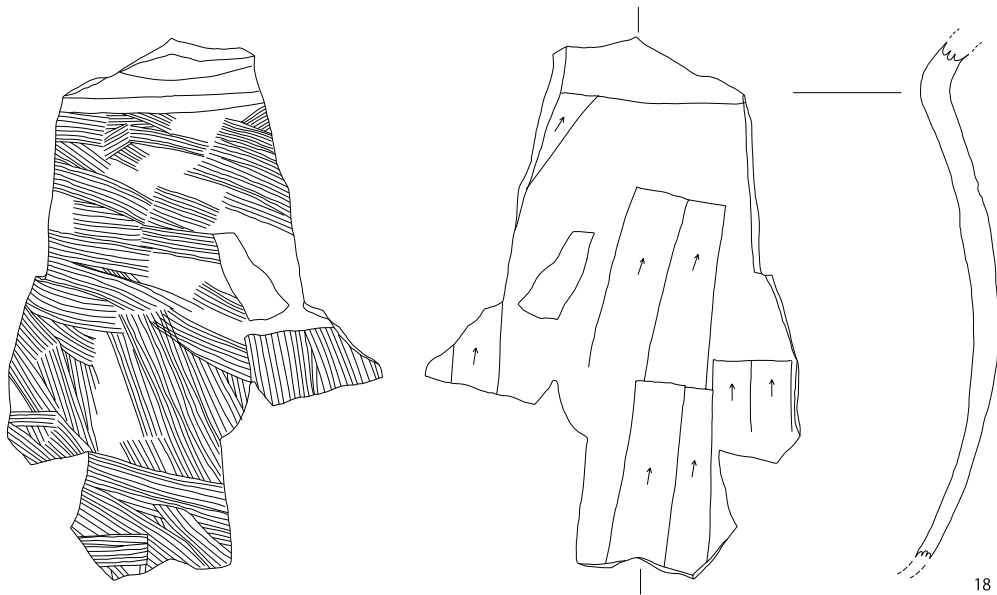
Y-23650
X-20950



17



15号

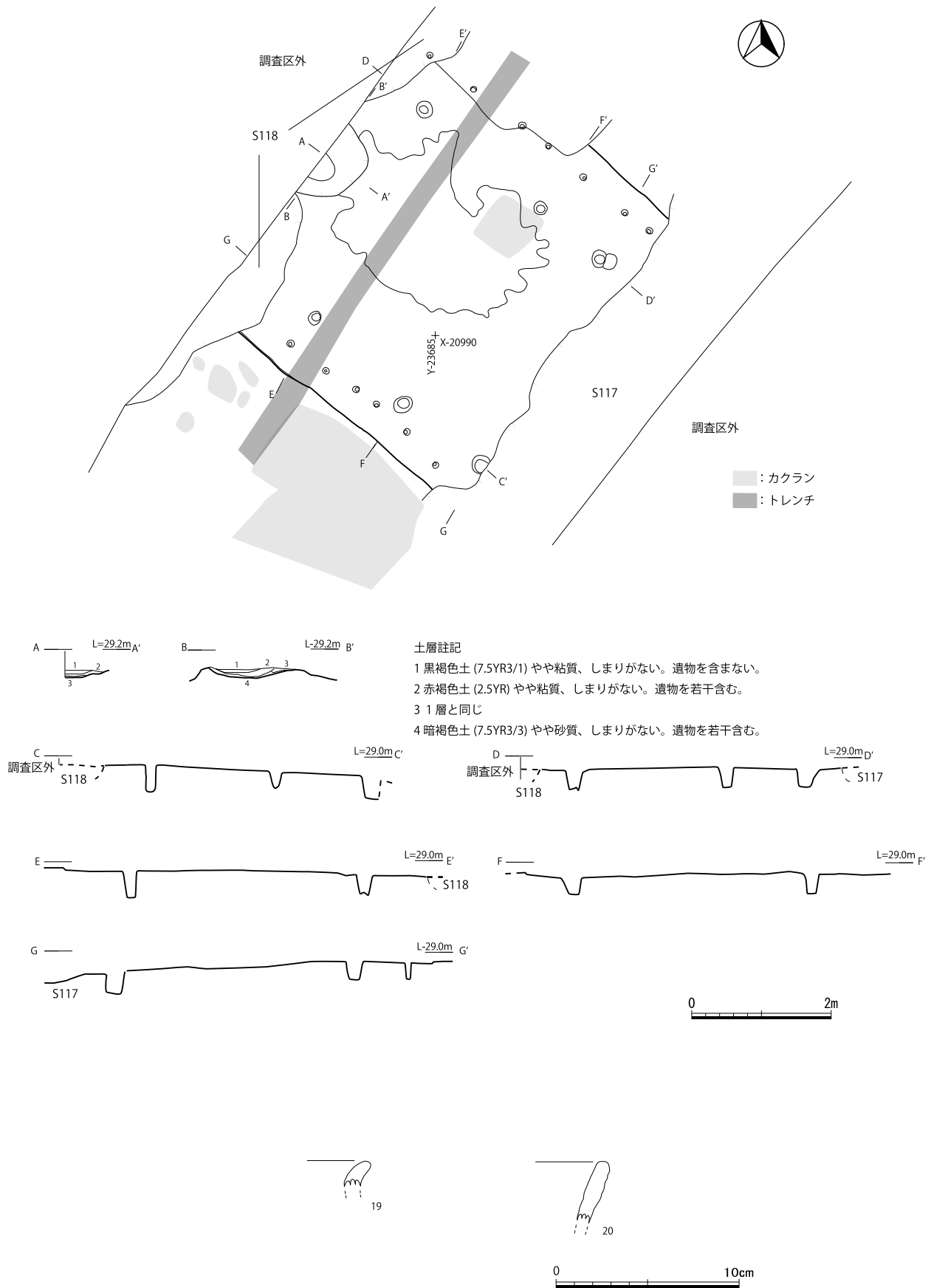


18

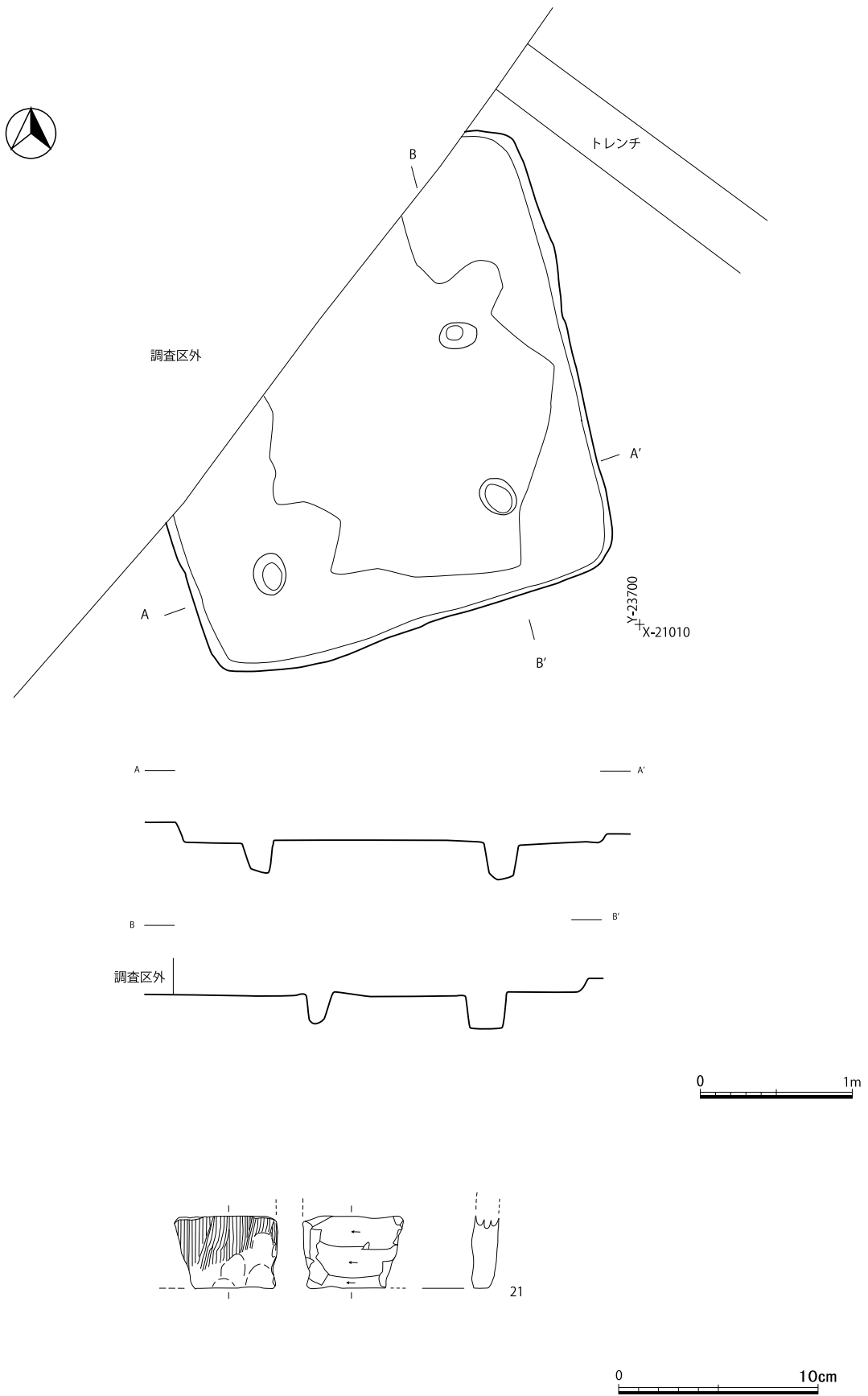


第 28 図 H 区 14 号・15 号建物平面図 (S=1/40) 及び

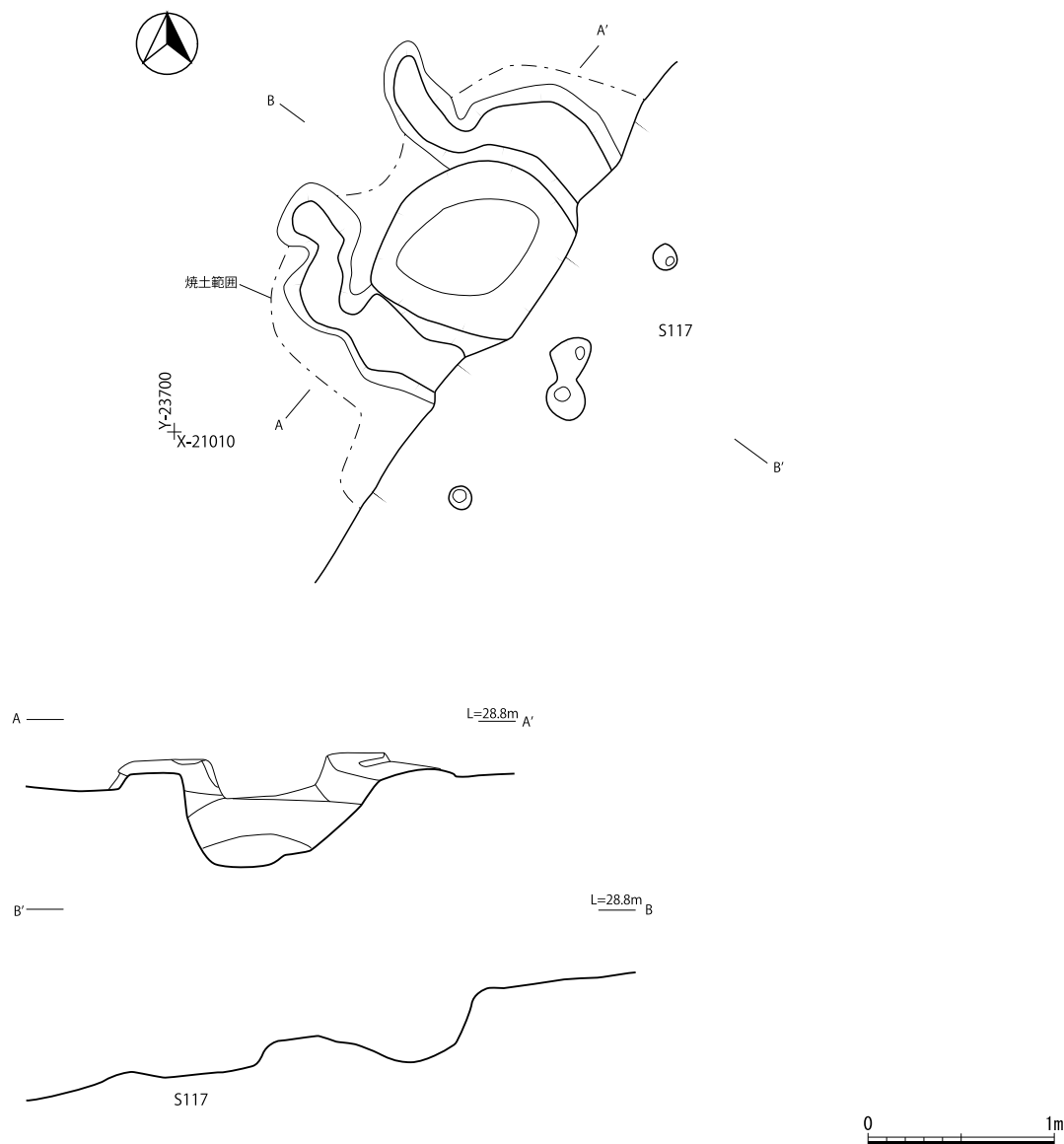
14 号 (17)・15 号 (18) 出土遺物実測図 (S=1/3)



第 29 図 I 区 16 号建物平面図・断面図 (S=1/80) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第 30 図 I 区 17 号建物平面図・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第31図 I区18号建物平面図及び断面図(S=1/40)

描かれた部分はカマドの掛け口であり、本来の床面はもう少し下で、掘り足りていないのかも知れない。

またA-A'の土層堆積状況はAが建物の堆積状況、それ以外はカマドの堆積状況のようであるが、よく理解できない図面である。建物に伴う柱痕跡は、3か所が確認され、4本柱が想定されている。柱掘り方は約15cm、柱径5cm前後、深さは1m前後であり掘り過ぎている可能性が高い。土師器口縁部片が出土している。

13号竪穴建物(第27図)

H区の中央東寄りで検出されている。北側は削平を受け、南側壁中央に浅い掘り込みがある。この掘り込みが13号竪穴建物に伴うもので、カマドの燃焼部に該当するものか、全く別の遺構なのか削平がひどく不明である。土師器の口縁部片が出土している。

14号・15号竪穴建物（第28図）

H区南西端で検出されている。カマドに付随すると考えられる燃焼部分のみが確認されているだけであるが、便宜上14号・15号竪穴建物とした。

14号竪穴建物は、焼土部分と粘土塊が残存する。一方15号も、削平され硬化面とカマドに使用されていたと思われる粘土の痕跡が確認されているだけである。出土遺物は、14号側の燃焼部の中から高環が出土している。残念ながら出土状況の写真は撮影されていないが、平面図をみると逆さになった状態で検出されているようである。しかし15号出土とされる土器片とも接合する。或いは一連の遺構かも知れない。

I区の調査

16号竪穴建物（第29図）

削平され柱痕跡と硬化面の広がり確認されているのみである。北・東・南側はカクランにより破壊されているようである。また西側は調査区外になるが、その手前部分もS118で破壊されている。現状では6本柱の方形建物で、1辺520cm程の規模がある。これまでの建物に比べると柱掘方径も30cm程で大きい、深さも30cm程度である。西側端に浅い掘り込みが確認されており、検出された位置から推測するとカマドの痕跡かも知れない。しかしながら粘土や焼土、炭化物は無いようである。

遺物は、土師器の口縁部の小片が出土している。

17号建物（第30図）

北西側が調査区外となるが、4本柱の方形竪穴建物と思われる。南北長300cm程、東西285cm程である。削平を受け深さは15～20cm程である。柱掘り方は28～20cm程度、深さは20cm程度である。中央部分に硬化面は確認されているが、炉は確認されていない。或いは北側の調査区外部分にカマドがあったのかも知れない。出土遺物は、移動式カマドの底部片が出土している。

18号竪穴建物（第31図）

カマドのみの残存であり、南東側は後世の溝状遺構（S117）で破壊されている。カマド断面図は作成されているが、注記がほとんど書かれておらず、加えて整理担当者の理解不足で、どのような構造であったかわからない。遺物は確認されていない。

19号竪穴建物（第32図）

1辺170cm程度の小型の方形竪穴建物と思われる。南西部分がカクランにより建物の半分以上が破壊されている。2つのピットが検出されているが、やや西側にかたよるようである。またその深さは極端に違い、建物に伴う柱痕跡かどうか不明である。土師器の壺が出土している。

K区の調査

1号溝状遺構（第33・34・35図）

ほぼ既存の道路と同じ方向に延びる溝である。溝の中からは、縄文土器、甑の把手や土師器高環等の他、近世の陶磁器なども出土している。38・39は江戸時代中頃の上野焼の破片である。

その他各調査区でやはり既存の道路に沿うように、溝状、或いは道路状遺構が検出されているが、時期が不明であるが、この1号溝状遺構同様近世以降の可能性が高いのではないだろうか。廣田静学氏より近世以降の井手の管理用道路の可能性も考慮してもいいのではないかとご教示を受けた。

包含層出土の遺物（第 35 ～ 43 図）

土偶 7 点を除けば、調査当時遺構と認定されていたものから、遺構出土の遺物として選定したものであった。しかし円形住居とされていた遺構に縄文式土器と土師器が伴っていたりしたため、再度精査した結果、遺構ではないと判断した箇所から出土している遺物であり、既に実測を開始していたこともあり、包含層出土の遺物として掲載している。

40 は、A 区出土の須恵器椀である。

41 ～ 45 は、B 区出土の遺物である。41・42 は土師器の坏か椀である。43・44 は土師器口縁部片、45 は移動式カマドの口縁部片の可能性はある。

46 ～ 49 は、C 区出土遺物で、すべて縄文式土器である。46・47 は口縁部片、48・49 は底部片である。

50 ～ 74 は、D 区出土遺物である。50 ～ 64 は縄文式土器の口縁部片、65 は胴部片、66 ～ 68 は底部片である。69 は磨製石斧、70 は打製石斧で円盤状石器と呼ばれてきたものである。71 は土偶で胴部から脚部にかけての部分である。72 は土師器の口縁部片、73 は須恵器の蓋と思われる。74 は須恵器の口縁部片である。75 ～ 121 は、E 区出土の遺物である。75 ～ 99 は縄文式土器の口縁部片、100 ～ 102 は同じく胴部片、103 ～ 110 は底部片である。111 は腕部分、113 は足部分の土偶片である。112 は磨製石斧である。114 ～ 116 は移動式カマド片で、114 は底部分、116 は、胴部下反に焚口の切り口部分が残存する。117 ～ 120 は土師器片である。121 は、須恵器の蓋である。

122 ～ 124 は、F 区出土の遺物ですべて土偶片である。

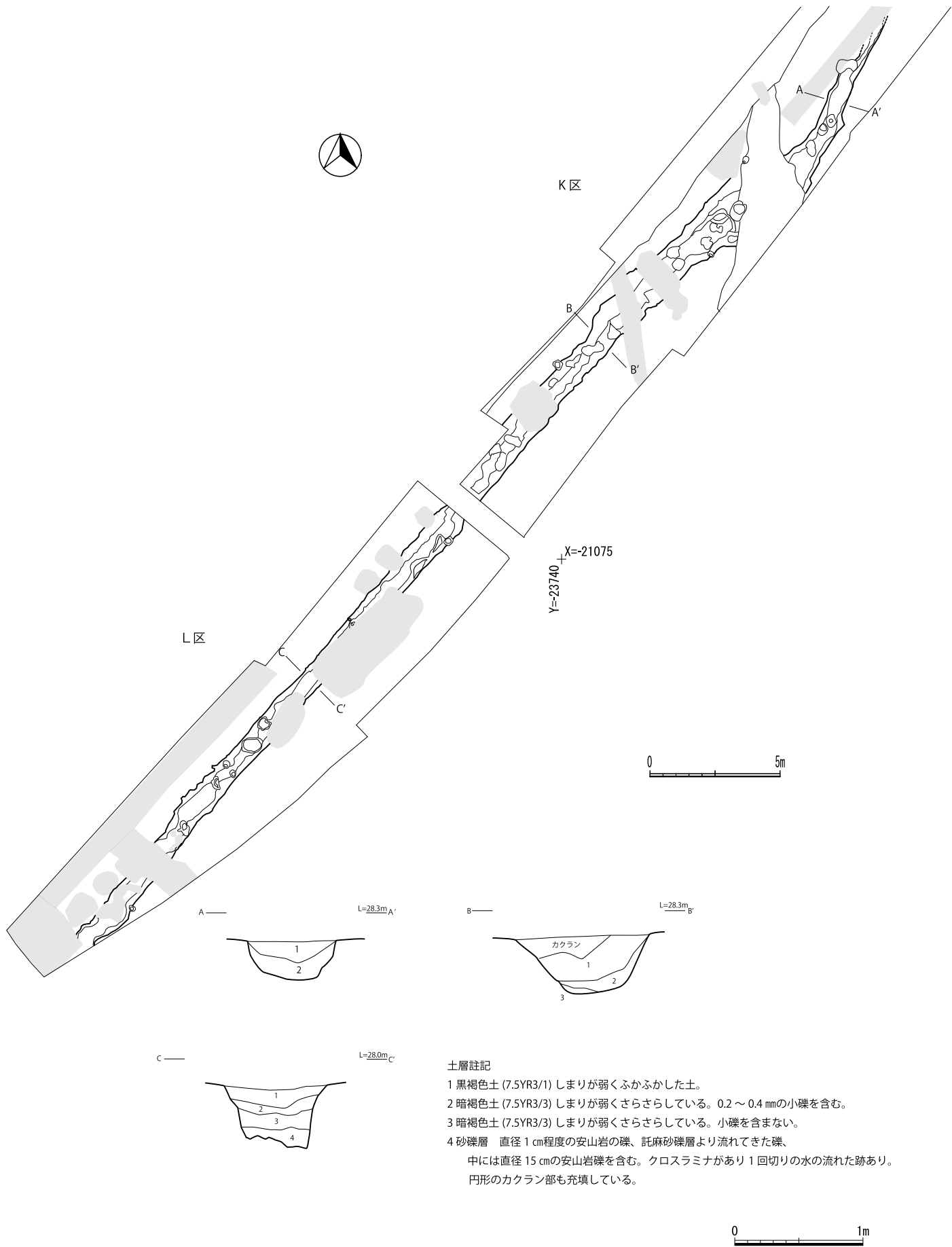
125 ～ 131 は G 区の出土遺物である。125 は土偶で、腕の一部、126 ～ 129 は土師器口縁部片、130 は同じく底部片である。131 は移動式カマドの底部分と思われる。

132 ～ 134 は H 区出土の遺物である。132 は土師器高坏、133 は小型壺、134 は坏である。

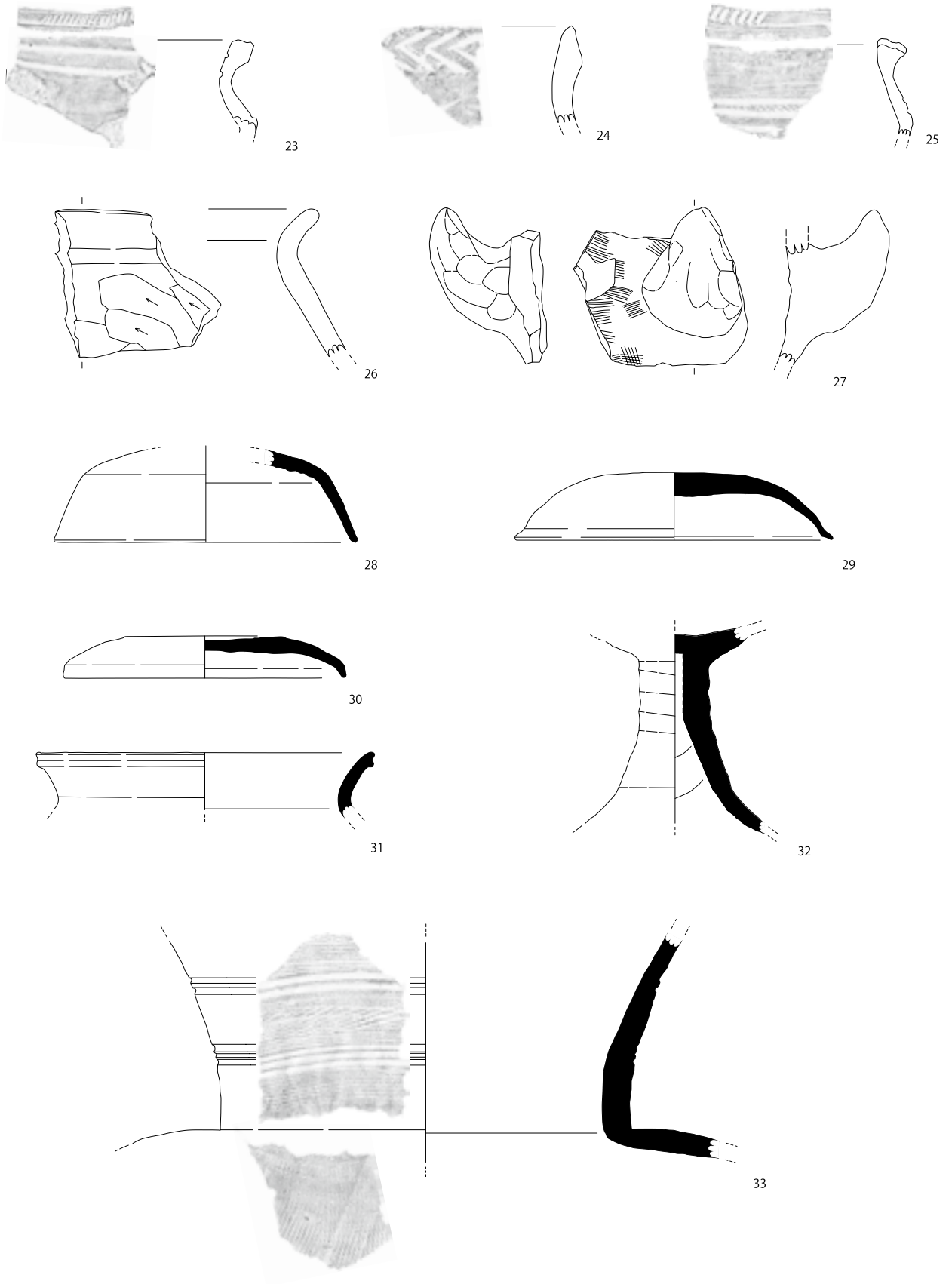
135 ～ 141 は I 区の出土遺物である。135 ～ 139 は土師器口縁部片、140 は椀の底部片、141 は甑と思われる。

142 ～ 146 は K 区出土遺物である。142 は縄文式土器の口縁部片、143 は土師器壺、144 は高坏、145 は須恵器の蓋、146 は底部片である。

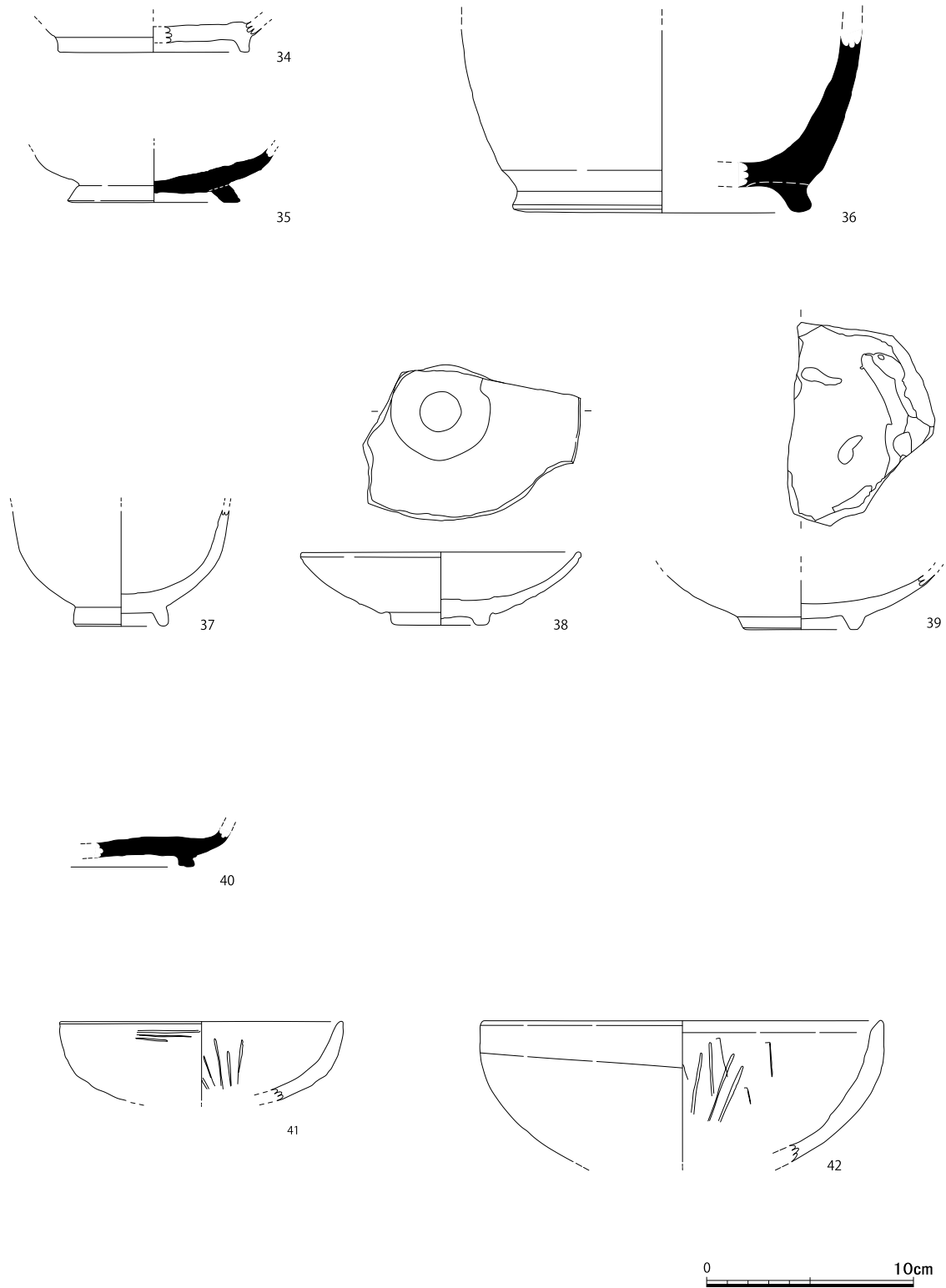
147 ～ 150 は L 区出土の遺物である。147 は甑の把手、148 は須恵器、150 は陶磁器片である。149 は磨製石斧である。



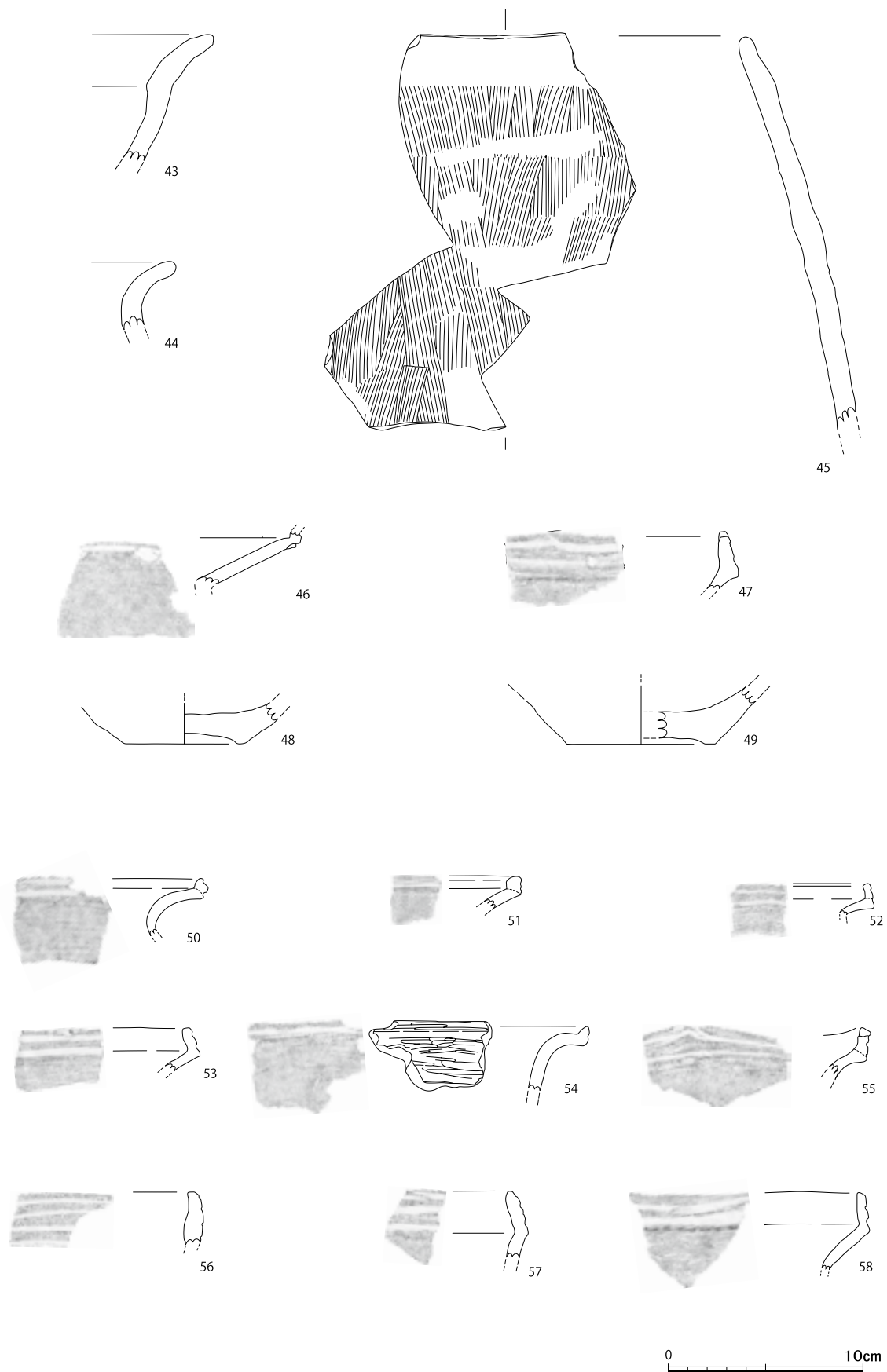
第 33 図 K・L 区 1 号溝状遺構平面図 (S=1/200) 及び断面図 (S=1/40)



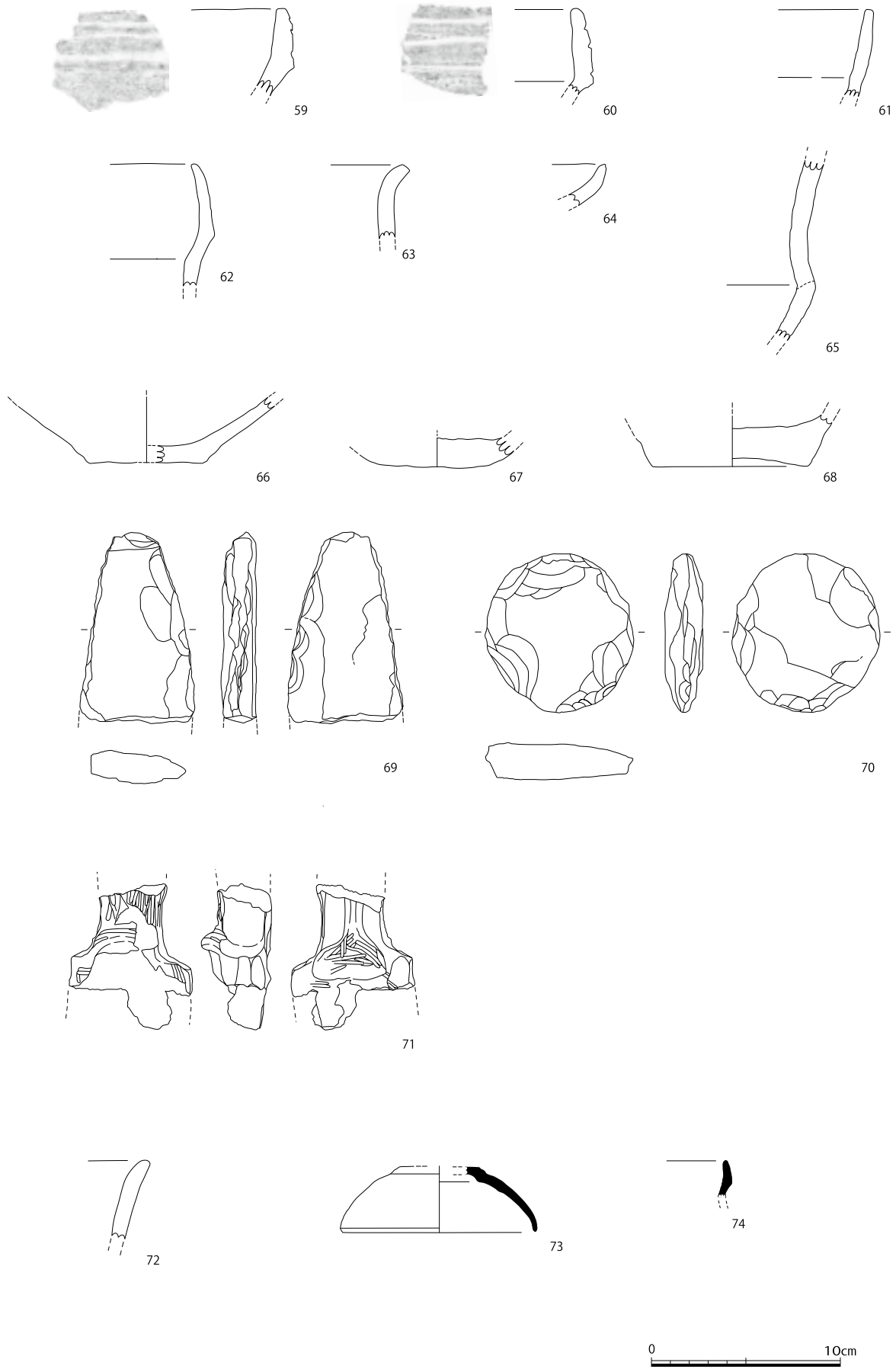
第34图 K·L区1号沟状遗构出土遗物实测图(S=1/3)



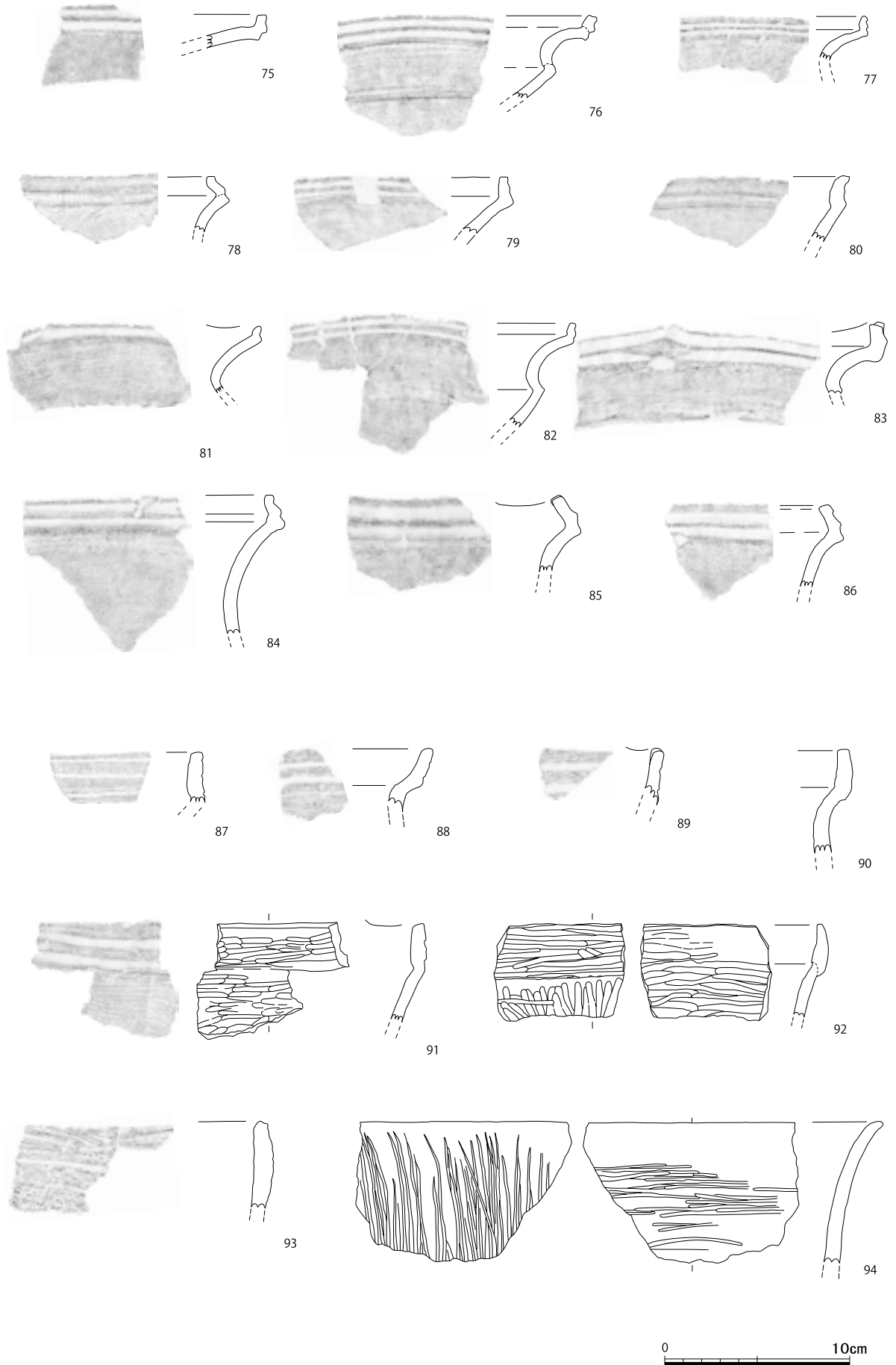
第 35 図 K・L 区 1 号溝状遺構 (34-39)・A 区 (40)・B 区 (41-42) 出土遺物実測図 (S=1/3)



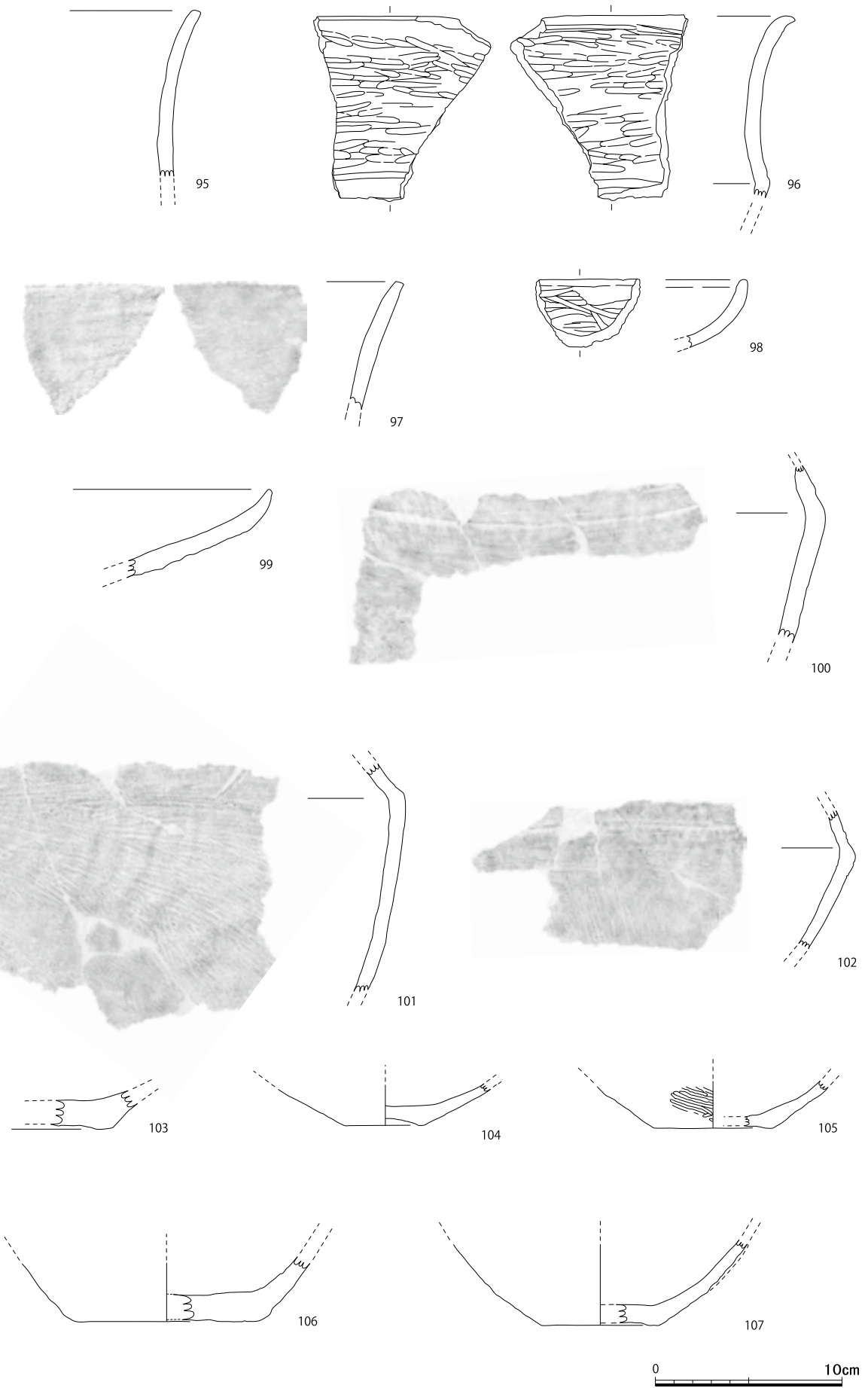
第36图 B区(43-45)·C区(46-49)·D区(50-58)出土遺物実測図(S=1/3)



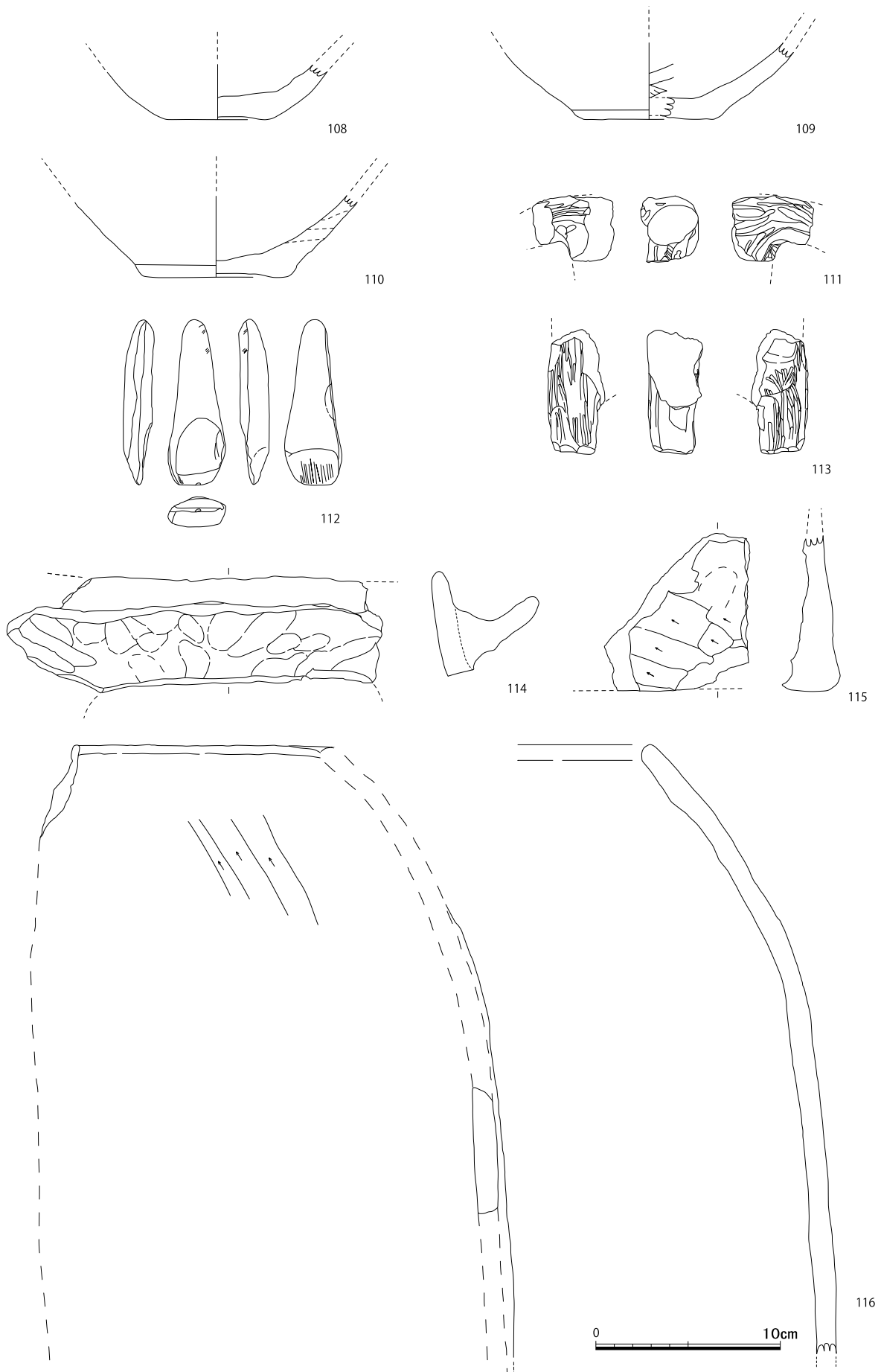
第 37 図 D区出土遺物実測図 (S=1/3)



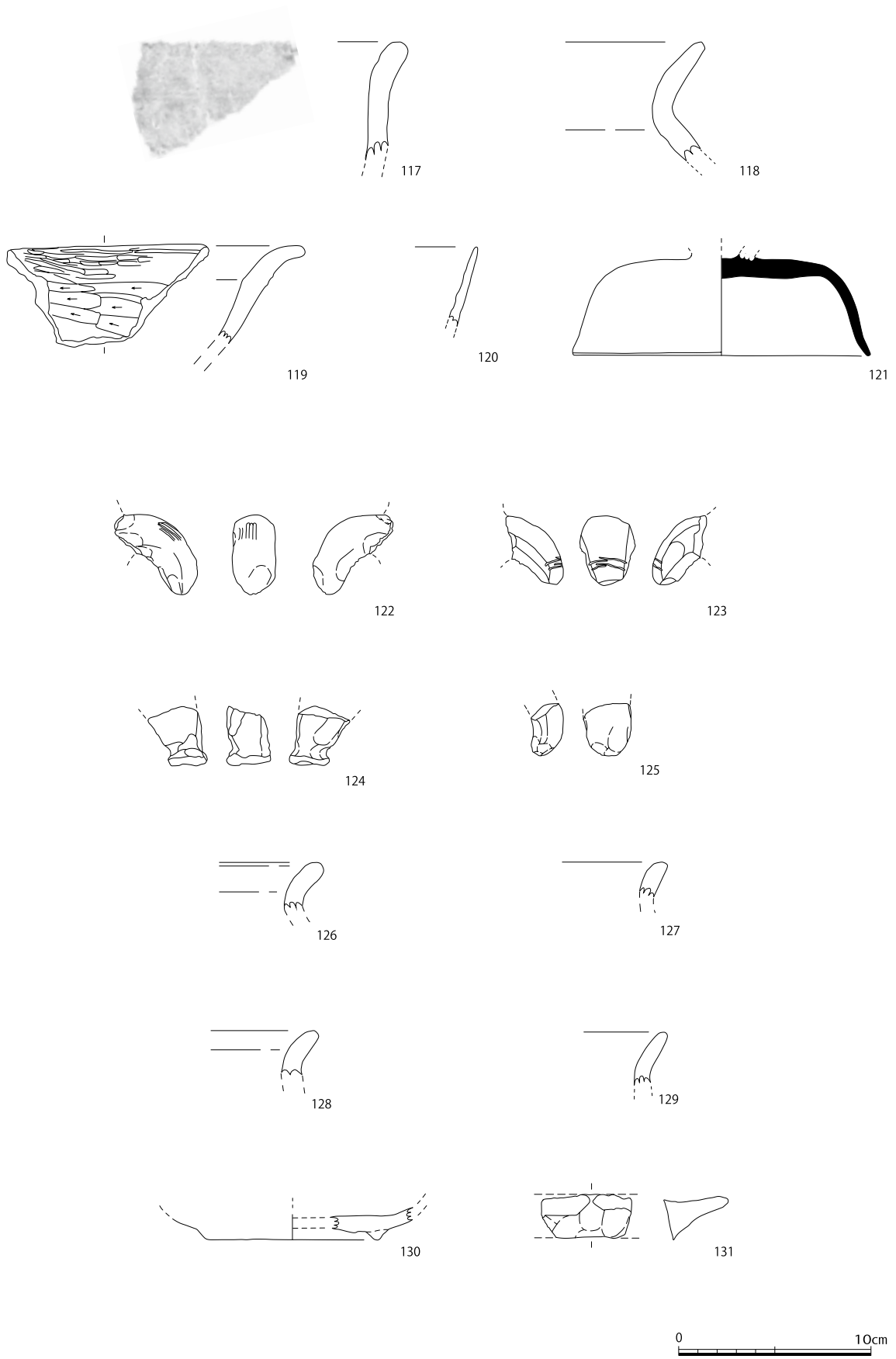
第 38 图 E 区出土遗物实测图 (S=1/3)



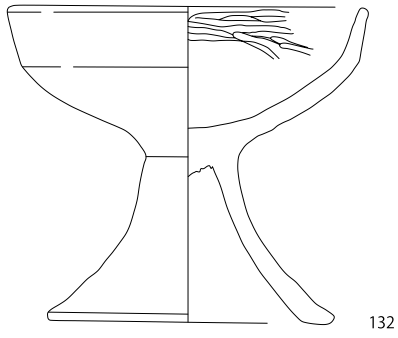
第39図 E区出土遺物実測図 (S=1/3)



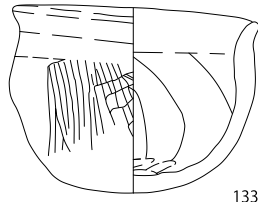
第40图 E区出土遺物実測図(S=1/3)



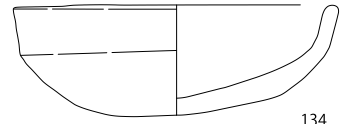
第41図 E区(117-121)・F区(122-124)・G区(125-131)出土遺物実測図(S=1/3)



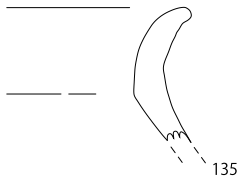
132



133



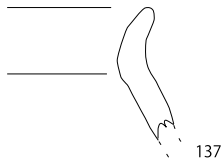
134



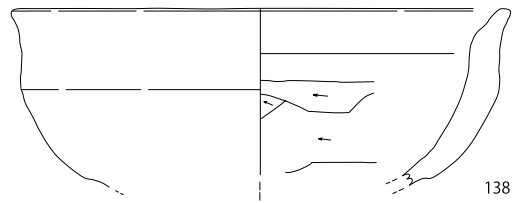
135



136



137



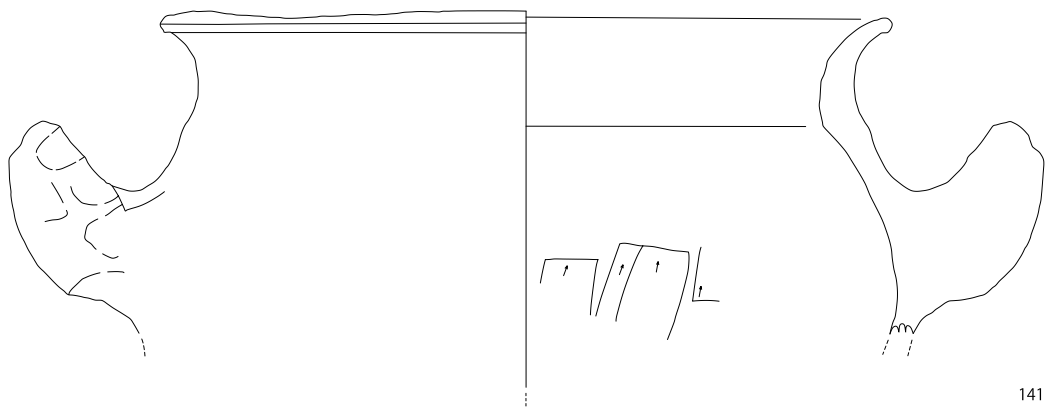
138



139



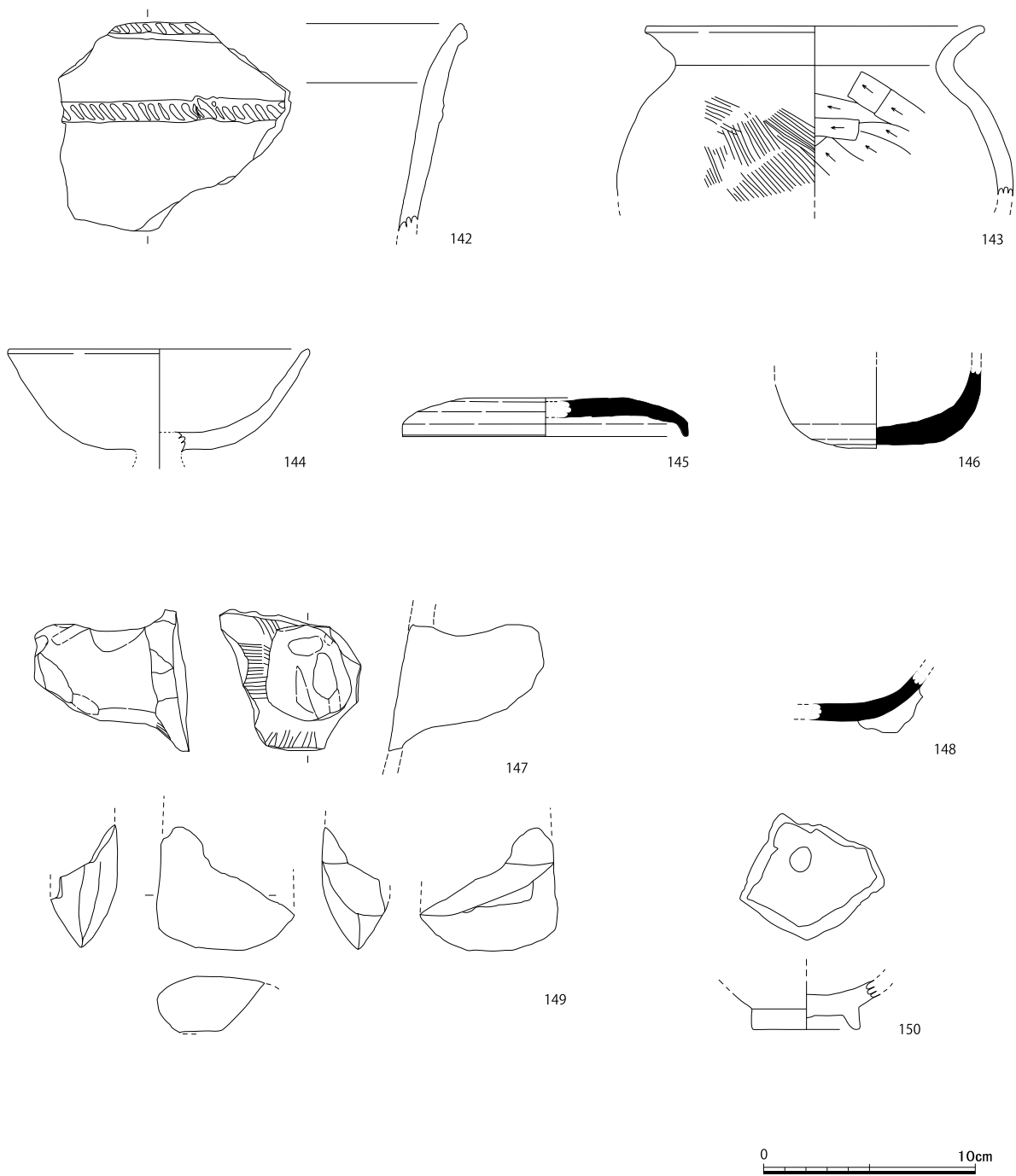
140



141



第 42 图 H 区 (132-134) · I 区 (135-141) 出土遺物実測図 (S=1/3)



第43図 K区(142-146)・L区(147-150)出土遺物実測図(S=1/3)

第Ⅳ章 総括

今回報告した新南部遺跡群の主体となる時期は、縄文時代後・晩期と古代の2時期である。

縄文時代後期・晩期の出土遺物の特徴として、土器片は一定量の出土があるが、小片が多く、口縁部片でも全体形の半分以上のものが多く、1/4以下のものがほとんどであり、完形に近いものは一点もない。また石器類の少なさも顕著である。石器は、掲載した4点のみであり、明確な磨石もない。その割に土偶片は7点出土している。小片が多いのは削平を受けていたことに起因するかもしれないが、石器の出土量の少なさにどのような状況を想定すればいいのか成案をもたない。遺物の分布は、土器はA区からE区にかけて顕著で、土偶はD・E・F・G区から出土しており、総じて調査区の北側に分布の中心がある。その他、B区からF区にかけて多数のピットがあり、調査者は円形建物の存在を想定しているが、平面的な並び以外に根拠がなかったため認定していない。しかし完全に否定できるものでもないこともあらためて付け加えておきたい。

古代の遺物も一定数の出土がある。やはり削平のためか小片が多いが、縄文土器片よりは残存状況は良い。遺物の分布は全域であるが、強いて言えばE区からI区に顕著である。

遺構としては、造り付けカマドをもつ建物、12軒程が検出されている。特徴的なのは、造り付けカマドの設置が、住居の壁に対し斜めに付くことが多いこと、また住居の壁を切り込んでカマドが設置されており、外に突出するものが多くみられることである。また造り付けカマドを持つ8号竪穴建物、造り付けカマドの有無は不明だが17号竪穴建物で、移動式カマド片が出土している。また包含層からも5点程移動式カマドが出土している。移動式カマドは、祭祀等特別な用途に使用されるという説もあるが、今回の調査ではそれを証明できるような遺物や遺構は見られない。この状況は、造り付けカマドから、移動式カマド或いは地面に達しない火炉等への変化の過程にあるのかも知れない。

また削平され粘土と焼土が平面的に検出された箇所（H区14号竪穴建物）で、高坏が出土している。断面図が作成されておらず、写真もないので推測にしかすぎないが、ほぼ完全な形の高坏が残っている。造り付けカマドの燃焼部の掘り込みにあったことで、削平を免れたものと考えている。カマドを廃棄する際の何らかの儀式が行われた可能性を伺わせる。

その他、1間×2間の柱配置や2間×2間の柱配置の掘立柱建物として調査時に報告されているものについて、確かに家畜小屋、工房跡などを想定すればその存在は肯定できるものかも知れない。しかし、集落全体の構成を考えれば、その周囲には平地式建物か竪穴式建物かは別として住居も存在すると思われる。調査区が狭いことも影響しているのかも知れないが、1間×2間等の掘立柱建物が割りと多く存在するB区の遺構配置をみても、そのような状況は読み取ることはできないと考えている。またこの場所に限って2間×1間や2間×2間の柱配置の建物ばかりが集中するのも理解できない。以上からは、掘立柱建物の存在を完全に否定できるものではないが、可能性は低いと考えている。

整理担当者の能力不足から、実測図の内容を完全に読み取ることが出来ず、個々の遺構の性格を完全に把握できていない。結果的に遺跡全体の理解が出来ていないため、内容のない総括になってしまったことをお詫び申し上げたい。

参考文献

- 馬場正弘 2006「第Ⅱ章 第1節 地理的環境」『大江遺跡群』熊本県文化財調査報告第232集 熊本県教育委員会
- 横山勝三 1998「第2章 地形・地質 第1節 熊本市の地形」『新熊本市史 通史編第1巻自然 原始・古代』新熊本市史編纂委員会
- 熊本県地質図 2008
- 九州縄文研究会編 2000『九州の縄文住居』第10回九州縄文研究会 福岡大会
- 九州縄文研究会編 2008『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会 熊本大会
- 杉井 健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
- 杉井 健 1998「古代における竈の変質」『古代中世の社会と国家』（大阪大学文学部日本史研究室創立50周年記念論文集 上巻）
- 杉井 健 1999「熊本県における甑形土器と竈の普及—熊本県出土甑形土器・造り付け竈・移動式竈の集成—」『文学部論叢』65号 熊本大学文学会

第3表 遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	F区 S080 5号建物	土師器	甕	(15.6)	—	—	ナデ、ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色砂粒を含む。	良好	
2	G区 S099 6号建物	土師器	甕	(20.4)	—	—	ナデ、横方向のハケメ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	長石、角閃石を含む。	良好	
3	G区 S099 6号建物	土師器	甕	(20.0)	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、白色粒を含む。	良好	口縁部の歪みが大きい。
4	G区 S092 2層 7号建物	土師器	甕	23.9	—	24.4	ナデ、縦方向のケズリ後ナデ	非常に丁寧な不定方向のナデ	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	砂粒、赤色粒を少量含む。	良好	外面胴部中央に黒斑が3カ所みられる。
5	G区 S100 2層 8号建物	土師器	甕	(24.0)	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	角閃石、黒色粒、白色粒を含む。	良好	口縁部の歪みが大きい。
6	G区 S100 8号建物	土師器	甕	—	—	—	ケズリ	押え	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	長石、角閃石を含む。	良好	外面下部にスス付着
7	G区 S100 8号建物	土師器	移動式 カマド	—	—	—	ケズリ後ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐灰 (10YR4/1)	石英、白色粒、褐色粒を含む。	良好	
8	G区 S084 9号建物	土師器	甕	(22.4)	—	—	ナデ、ケズリ後ナデ	ナデ、ハケメ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	砂粒、石英、赤褐色粒、白色粒を含む。	良好	内外面に赤色顔料がみられる。
9	G区 S083 2層 10号建物	土師器	坏	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、長石、白色粒を含む。	良好	
10	G区 S083 2層 10号建物	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	石英、白色粒、褐色粒を含む。	良好	外面スス付着
11	G区 S109 2層 11号建物	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	石英、赤褐色粒、白色粒を含む。	良好	
12	G区 S109 2層 11号建物	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石、白色粒を含む。	良好	
13	G区 S088 2層 12号建物	土師器	甕?	—	—	—	ナデ	ナデ	褐灰 (10Y4/1)	黒褐 (10YR3/1)	石英、白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	内外面にスス付着
14	G区 S088 12号建物	須恵器	壺?	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	黒色粒を含む。	良好	
15	G区 S088 2層 12号建物	須恵器	坏?	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	黄灰 (2.5Y6/1)	黒色粒、白色粒を含む。	良好	
16	H区 S076 13号建物	土師器	—	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、赤褐色砂粒を含む。	良好	

遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
17	H区 S107.S108 14.15号建物	土師器	高坏	13.3	(11.0)	13.6	ナデ、指頭圧痕	ナデ、ハケメ	ナデ、指頭圧痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	長石、赤褐色砂粒を含む。	良好
18	H区 S107.S108 14.15号建物	土師器	甕	—	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	黄褐 (10YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	小礫、0.7mm大の礫を含む。	良好	外面黒斑あり
19	I区 S120pit3 16号建物	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	小石、赤褐色砂粒、角閃石を含む。	良好	
20	I区 S120 16号建物	土師器	坏	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、角閃石を含む。	良好	
21	I区 S123 17号建物	土師器	移動式 カマド	—	—	—	ナデ、ケズリ	ハケメ、指頭圧痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石英、砂粒を含む。	良好	
22	I区 S125 19号建物	土師器	甕	(12.6)	—	—	ハラケズリ	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	角閃石、赤褐色粒、白色粒を少量含む。	良好	外面スス付着
23	K区 S202 2b層 1号溝状遺構	縄文土器	浅鉢	—	—	—	ミガキ、沈線 (2条)	ミガキ、刻目	暗灰黄 (2.5Y5/2)	黄褐 (2.5Y5/3)	砂粒、黒色粒を含む。	良好	口唇部に刻目がみられる。
24	K区 S202 1号溝状遺構	縄文土器	鉢	—	—	—	ナデ	ナデ、凹線 (2条)	黄褐 (2.5Y5/3)	黄褐 (2.5Y5/3)	砂粒、滑石を含む。	良好	
25	K区 S202 1号溝状遺構	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ、部分的に刻目、凹線 (2条)、瓜形文	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	砂粒を含む。	良好	口唇部に刻目がみられる。波状口縁
26	K区 S202 2b層 1号溝状遺構	土師器	甕	—	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR4/3) にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	赤褐色粒、白色粒を含む。	良好	
27	K区 S202 2a層 1号溝状遺構	土師器	甕	—	—	—	ケズリ	ナデ、指頭圧痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、長石、赤褐色粒を含む。	良好	
28	K区 S202 1G2b層 1号溝状遺構	須恵器	蓋	(15.4)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (5Y5/1)	黒褐 (2.5Y3/1)	白色砂粒を含む。	良好	外面自然釉
29	K区 S202 2b層カケラン 1号溝状遺構	須恵器	蓋	(16.5)	—	3.5	不定方向のナデ、回転ナデ	不定方向のナデ、回転ナデ	灰 (5Y5/1)	灰褐 (7.5YR6/2)	赤褐色粒を少量、黒色粒を含む。	ややあま い	
30	K区 S202 1号溝状遺構	須恵器	蓋	(14.4)	—	2.2	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	石英、長石、白色粒を含む。	良好	全体的に磨減のため調整不明瞭
31	K区 S202 1号溝状遺構	須恵器	甕	(17.4)	—	—	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	暗灰 (N3/0) 灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	黒色粒を少量、白色粒を含む。	良好	
32	K区 S202 埋4層 1号溝状遺構	須恵器	高坏	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	灰黄 (2.5Y6/2)	砂粒を含む。	良好	
33	K区 S202 1号溝状遺構	須恵器	甕	—	—	—	ナデ、青海波状文	ナデ、ハケメ、沈線 (2条)	灰 (5Y6/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	黒色粒、白色粒を含む。	良好	

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	器高	内面	外面	内面	外面			
34	L区 S202 埋1層 1号溝状遺構	土師器	碗	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	黄褐 (2.5Y5/3)	石英、長石、角閃石を含む。	良好	
35	K区 S202 1G2b層 1号溝状遺構	須恵器	碗	—	—	ナデ	回転ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	石英、長石、角閃石、白色粒、黒色粒を少量含む。	良好	長頸部の間部分。
36	K区 S202 1G2b層 1号溝状遺構	須恵器	壺	—	—	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	灰 (5Y4/1)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	径0.1cm大の赤褐色粒を多く含む。	良好	
37	L区 S202 10G埋4層 1号溝状遺構	陶器	碗	(10.0)	—	釉	釉	オリーブ黄 (5Y6/3)	オリーブ黄 (5Y6/3)	混入物なし。	良好	
38	K区 S202 2.2b層 1号溝状遺構	陶器	皿	(12.9)	3.3	釉 (抹茶色)、釉藍色、抹茶色が混じる。	釉 (灰色がかかった醬色)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	きめ細かい、暗褐色の小粒子を少量含む。	良好	内面に見込み疵の目あり。上野焼 (江戸中期)
39	L区 S202 10G埋4層 1号溝状遺構	陶器	碗	—	—	釉 (淡黄、苔色)	釉 (淡黄)	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	黒色粒を少量含む。	良好	内面見込み砂目あり。上野焼 (江戸中期)
40	A区	須恵器	碗	—	—	回転ナデ	横ナデ、回転ナデ、ヘラ切り	灰 (N5/)	灰 (N5/)	石英、長石、角閃石をわずかに含む。	良好	
41	B区 S019	土師器	坏	(13.0)	—	横ナデ、ミガキ	横ナデ、ケズリ後粗いミガキ、ミガキ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	石英を多量、長石、角閃石、赤褐色粒、雲母を少量含む。	良好	
42	B区 S019	土師器	坏	(18.4)	—	横方向のナデ、ケズリ後ミガキ	横方向のナデ、斜め方向のケズリ、ミガキ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	石英、長石、赤褐色粒をやや多く含む。	良好	外面に赤色顔料付着
43	B区 S019	土師器	鉢	—	—	横ナデ、ケズリ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	石英を多量、長石、角閃石を少量、赤褐色粒を含む。	良好	
44	B区 S019	土師器	甗	—	—	横ナデ	横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	石英を多量、長石、角閃石を少量、赤褐色粒を含む。	良好	
45	B区 S019 2層	移動式 カマド	土師器	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	にぶい黄褐 (10YR4/3)	明褐 (7.5YR5/6)	やや粗く、2～5mm大の砂礫を多く含む。	良好	
46	C区 S054	縄文土器	浅鉢	—	—	横方向のナデ後ミガキ	横方向のナデ後ミガキ、凹点文	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	石英、長石、角閃石を含む。	良好	口縁部欠損
47	C区 S055	縄文土器	深鉢	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	灰黄 (2.5Y7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、角閃石を少量、赤褐色粒を含む。	良好	波状口縁
48	C区 S054	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	工具によるナデ	ナデ、ナデ後ミガキ	灰黄褐 (10YR5/2)	橙 (7.5YR7/6)	石英、長石、角閃石を含み、赤褐色粒を多く含む。	良好	

遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
49	C区 S051	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	ナデ	粗いナデ後ミガキ、ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	石英、長石、角閃石を少量含む。	良好	内面磨減
50	D区 S049 1層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	黒 (10YR2/1)	浅黄 (2.5Y7/3)	石英、角閃石を含む。	良好	
51	D区 S049 1層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英、長石、角閃石を含む。	良好	凹線はきれいに一周しておらず、始点と終点がつながっていない。
52	D区 S039	縄文土器	浅鉢	—	—	—	ミガキ	ミガキ、浅い凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	角閃石を含む。	良好	
53	D区 S049	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石英、金雲母を含む。	良好	
54	D区 S041	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ後ミガキ	横方向のナデ後ミガキ、凹線(1条)	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	石英、赤褐色粒を含む。	良好	
55	D区 S049	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	角閃石を含む。	良好	波状口縁
56	D区 S041	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ、指頭圧痕	横方向のナデ、凹線(4条)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	石英、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
57	D区 S041	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ後細いミガキ	横方向のナデ後細いミガキ、凹線(3条)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	石英、赤褐色粒を含む。	良好	
58	D区 S039	縄文土器	深鉢	—	—	—	粗いナデ、強い横ナデ	粗いナデ、ミガキ、粗い凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石英、長石を含む。	良好	凹線は深い。
59	D区 S039	縄文土器	深鉢	—	—	—	粗いナデ	粗いナデ、粗い凹線(3条)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm大の砂粒、石英、長石、角閃石を含む。	良好	
60	D区 S040	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ、凹線(3条)	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
61	D区 S039	縄文土器	深鉢	—	—	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm大の砂粒を多く含む、角閃石を含む。	良好	
62	D区 S039	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ、貝殻糸痕後ナデ	淡黄 (2.5Y8/3)	灰 (5Y5/1)	1mm大の砂粒を多く含む、石英、角閃石を含む。	良好	
63	D区 S041	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナデ	横方向のナデ後ミガキ	灰黄褐 (10YR4/2)	黒褐 (10YR3/1)	石英、角閃石を多量、赤褐色粒を含む。	良好	
64	D区 S041	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ後細いミガキ	横方向のナデ後細いミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
65	D区 S049	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向の粗いミガキ、縦方向のミガキ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	1~2mm大砂粒、石英、長石、角閃石を含む。	良好		
66	D区 S039	縄文土器	鉢	—	(5.6)	—	粗いナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	1mm大の砂粒、角閃石を含む。	良好	底部は平底	
67	D区 S039	縄文土器	鉢	—	5.7	—	ナデ	淡黄 (2.5Y8/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	1~3mm大の砂粒、石英を多く含み、角閃石を含む。	良好	底部は丸底、内面スス付着	
68	D区 S040	縄文土器	深鉢	—	8.0	—	ナデ、粗いナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好		
72	D区 S041	土師器	甕	—	—	—	横方向のナデ後細いミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	石英、角閃石を含む。	良好		
73	D区 S039	須恵器	蓋	(9.8)	(4.2)	3.4	ロクロナデ、横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	長石、1mm大の白色粒を含む。	良好		
74	D区 S039	須恵器	不明	—	—	—	回転ナデ	灰 (5Y4/1)	灰 (5Y4/1)	長石、白色粒を含む。	良好		
75	E区 S063	縄文土器	浅鉢	—	—	—	ミガキ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	石英、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好		
76	E区 S061	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ (2条)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好		
77	E区 S061 1層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ (2条)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	にぶい黄褐色 (5YR5/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好		
78	E区 S059	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	石英、長石、赤褐色粒を含む。	良好		
79	E区 S059 1層 カクラン	縄文土器	浅鉢	—	—	—	ヘラミガキ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂粒、赤褐色粒を少量含む。	良好		
80	E区 S063	縄文土器	浅鉢	—	—	—	横方向のミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好		
81	E区 S063	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナデの後横方向のミガキ、凹線 (1条)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	石英を多く含む。	良好	波状口縁	
82	E区 S063 1層	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ (2条)	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	石英多量、赤褐色粒を含む。	良好	黒色磨研土器	
83	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ (2条)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英少量、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	波状口縁	
84	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、長石、赤褐色粒を含む。	良好	内外面スス付着	

遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
85	E区 S061	縄文土器	深鉢	—	—	—	横ナズ後横方向のミガキ、凹線(2条)	横ナズ後横方向のミガキ、凹線(2条)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	石英多量、角閃石わずかに含む。	良好	口縁部に黒斑あり。波状口縁
86	E区 S061	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	黒 (7.5YR2/1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	内面に黒斑あり。
87	E区 S063	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナズ	ミガキ、凹線(3条)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	灰褐 (7.5YR5/2)	石英、角閃石、赤褐色粒多く含む。	良好	
88	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ、凹線(2条)	橙 (5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英、赤褐色粒、長石、角閃石を含む。	良好	
89	E区 S063 3層	縄文土器	鉢	—	—	—	横方向のミガキ	ミガキ、凹線(2条)	褐灰 (7.5YR4/1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	石英多量、赤褐色粒を含む。	良好	波状口縁
90	E区 S061	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナズ、横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	
91	E区 1層	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、凹線(2条)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	橙 (7.5YR6/6)	石英多量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	波状口縁
92	E区 S059 3層	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ、縦方向のミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、赤褐色粒を含む。	良好	
93	E区 1.2層	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナズ	条痕	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
94	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のナズ後横方向のミガキ	横方向のナズ後縦方向のミガキ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	石英、長石少量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
95	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm大の石英、長石、赤褐色粒を少量含む。	良好	外面スス付着
96	E区 S063 3層	縄文土器	深鉢	—	—	—	粗いナズ後横方向のミガキ、凹線(1条)	粗いナズ後横方向のミガキ、凹線(1条)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	石英多量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	内部に一部黒斑あり。
97	E区 S059	縄文土器	鉢	—	—	—	ケズリ後ミガキ、ミガキ	粗いミガキ	赤褐 (2.5YR4/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	石英、赤褐色粒、雲母を多く含む。	良好	
98	E区 S059	縄文土器	坏身	—	—	—	ミガキ、横ミガキ	ケズリ後ナズ、横ミガキ	褐 (7.5YR4/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	石英まれ、長石、赤褐色を少量含む。	良好	
99	E区 S061	縄文土器	浅鉢	—	—	—	ミガキ	ココナズ後ミガキ、ケズリ後ナズ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	石英多量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
100	E区 S059 1層	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナズ	横方向のミガキ、凹線(1条)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm程の石英、長石、3mm程の黄白色、赤褐色粒をわずかに含む。	良好	

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)		調整		色調		胎土	焼成	備考	
				口径	底径	器高	内面	外面	内面				外面
101	E区 S059 1層	縄文土器	深鉢	—	—	—	横方向の条痕後ナデ	横方向及び左上がり方向の条痕後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	内面スス付着
102	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ、凹線 (1条)、横方向のナデ、縦方向のナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英、長石、赤褐色粒を含む。	良好	
103	E区 S063	縄文土器	鉢	—	—	—	ナデ	ナデ、ケズリ	褐灰 (10YR6/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英多量、角閃石少量、赤褐色粒、雲母を含む。	良好	
104	E区 S061	縄文土器	浅鉢	—	4.2	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	内外面スス付着
105	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	ミガキ	ミガキ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒少量を含む。	良好	
106	E区 S061	縄文土器	深鉢	—	(9.5)	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着
107	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	ケズリ後ナデ	不明	にぶい赤褐 (5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	角閃石を含む。	良好	内外面ともに熱を受け表面剥離
108	E区 S059 1層	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	不定方向の指ナデ	ナデ、不定方向のミガキ	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英多量、角閃石わずかに含む。	良好	
109	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	ケズリ後ナデ	ナデ	黒褐 (10YR3/1)	橙 (5YR6/6)	石英、長石、角閃石少量、赤褐色粒を含む。	良好	
110	E区 S059	縄文土器	深鉢	—	(7.4)	—	ナデ	ナデ、ナデ後ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着
114	E区 S059 1層	土師器	移動式 カマド	(23.0)	—	—	ナデ、横ナデ	横ナデ、ケズリ後ナデ、指頭圧痕	黒褐 (10YR3/2)	黒褐 (2.5Y3/1)	長石を含む。	良好	外面スス付着
115	E区 S059	土師器	移動式 カマド	—	—	—	指押さえ後ナデ、横方向のケズリ	ナデ、ハケメ後ナデ	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/8)	石英多量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
116	E区	土師器	移動式 カマド	(23.8)	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	白色粒、褐色粒、小石を含む。	良好	
117	E区 S059	土師器	甕	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1～5mm大の石英を少量、赤褐色粒を含む。	良好	外面口縁付近に赤色顔料付着
118	E区 S059	土師器	甕	—	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の赤褐色粒、白色粒を含む。	良好	
119	E区 S061	土師器	鍋	—	—	—	ナデ、ケズリ後ナデ、横方向のミガキ	ヨコナデ、ナデ後ミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	石英多量、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着
120	E区 S059	土師器	坏	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	砂粒、赤褐色粒を含む。	良好	

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
121	E区 S059	須恵器	蓋	—	—	ナデ	ナデ、自然軸	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	角閃石を含む。	良好		
126	C区 S096 2層	土師器	甕	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、白色粒を含む。	良好		
127	C区 S096 2層	土師器	甕	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	長石、石英、白色粒を含む。	良好	外面スス付着	
128	G区 S111	土師器	甕	—	—	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	砂粒を含む。	良好		
129	C区 S110 2層	土師器	甕	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	砂粒を含む。	良好		
130	C区 S110 2層	土師器	椀	—	(8.7)	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	長石少量、赤褐色砂粒を含む。	良好	外面に赤色顔料付着	
131	C区 S110	土師器	移動式 カメラド	—	—	ナデ	ナデ、指頭圧痕	黒褐 (2.5Y3/2)	黒褐 (2.5Y3/2)	砂粒を含む。	良好		
132	H区 S102 2層	土師器	高坏	14.0	(11.1)	12.4	ナデ、横ナデ後ミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	石英、長石を含む。	良好		
133	H区 S102	土師器	小型壺	9.2	5.0	7.3	ナデ、縦方向の強い、横方向の丁寧なナデ、ハケメ	にぶい橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/6)	砂粒、石英を含む。	良好		
134	H区 S102 2層	土師器	杯	12.3	—	4.4	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	石英、長石、赤褐色砂粒を含む。	良好	全体的に磨減のため調整不明瞭。	
135	I区 S121	土師器	甕	—	—	ケズリ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	石英、赤褐色粒、白色粒を含む。	良好		
136	I区 S121	土師器	甕	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	石英、白色粒、赤褐色粒を含む。	良好		
137	I区 S126 1層	土師器	甕	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	小石、赤褐色砂粒を含む。	良好		
138	I区 S117	土師器	壺	(18.6)	—	—	不明	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	小石、石英、長石、角閃石、赤褐色砂粒を含む。	良好	外面スス付着	
139	I区 S121,126	土師器	甕	—	—	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	赤褐色粒、白色粒を含む。	良好		
140	I区 S130	須恵器	椀	—	(7.1)	—	ナデ	灰白 (YR8/1)	灰白 (YR8/1)	石英、長石を含む。	不良	高台部破損	
141	I区 S117,121 S122,126	土師器	甕	28.4	—	—	ナデ、横方向のケズリ、把手接合によるナデ、ケズリ	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/8) 黒褐 (10YR3/2)	石英、長石、黒色粒を含む。 1cm大の礫を数点含む。	良好	口縁部はいびつ	
142	K区	土師器	甕	—	—	—	ナデ	赤褐 (5YR4/6)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	砂粒、角閃石、白色粒を含む。	良好	突帯を貼り付け後刻目	

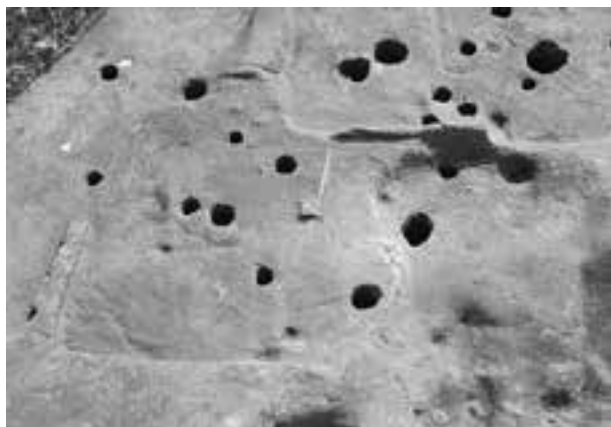
遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
143	K区 S256 埋1層	土師器	壺	—	—	—	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	明褐 (10YR5/6) 暗褐 (10YR3/3)	橙 (7.5YR6/6)	3cm 程の長石多量、赤褐色の小粒子を含む。	良好	内面スス付着
144	K区 S256 埋1層	土師器	高坏	—	—	—	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	
145	K区	須恵器	蓋	—	—	1.8	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	角閃石、白色粒、1mm 以下の黒色粒を含む。	良好	
146	K区	須恵器	壺	—	—	—	ナデ	ナデ	灰オリーブ (5Y6/2)	灰 (5Y5/1)	砂粒、石英を含む。	良好	
147	L区	土師器	甗	—	—	—	ケズリ	強いナデ、ハケメ、指頭 圧痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	砂粒を多く含む。	良好	
148	L区	須恵器	坏	—	—	—	ナデ	ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰 (5Y5/1)	砂粒を含む。	良好	底部に付着物あり。
150	L区	陶器	碗	—	—	4.8	釉 (淡黄、若竹色)	ナデ、釉 (若竹色)	灰黄 (2.5Y7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	混入物は見られない。	良好	上野焼 (江戸中期)

土偶観察表

遺物番号	出土位置	器種	部位	法量 (cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
				長さ	幅	厚さ					
71	D区 S041	土偶	胴～脚部	—	3.2～	2.1～	ミガキ	褐灰 (7.5YR4/1)	長石を含む。	良好	
111	E区 S059	土偶	腕	—	—	2.6	ナデ、ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	角閃石を含む。	良好	赤色顔料付着
113	E区 S059	土偶	足	—	2.3	2.3	ナデ、押さえ後ナデ、ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	赤色顔料付着
122	F区	土偶	手	3.2	2.2	2.0	ミガキ、指頭圧痕	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	
123	F区 S062.2層	土偶	手	2.8	2.5	2.1	ナデ、沈線 (2条)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	砂粒、白色粒を含む。	良好	赤色顔料付着
124	F区	土偶	足	—	3.0	2.2	ナデ、指頭圧痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	石英、長石、角閃石を含む。	良好	
125	G区 S073	土偶	腕	—	2.3	1.6	ナデ、指頭圧痕	浅黄 (2.5Y7/3)	長石、赤褐色砂粒を含む。	良好	

石器観察表

遺物 番号	出土位置	種別	種類	部位	法量 (cm・g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重さ	
69	D区 S039	磨製石器	石斧	基部	—	—	1.5	137	
70	D区 S049	打製石器	凹盤状石器	完形	8.1	7.6	1.8	152	表裏ともに自然面が残る。
112	E区 S059	磨製石器	石斧	完形	8.7	3.0	1.5	44	剥離後摩研
149	L区	磨製石器	石斧	刃部	—	6.2	—	73	



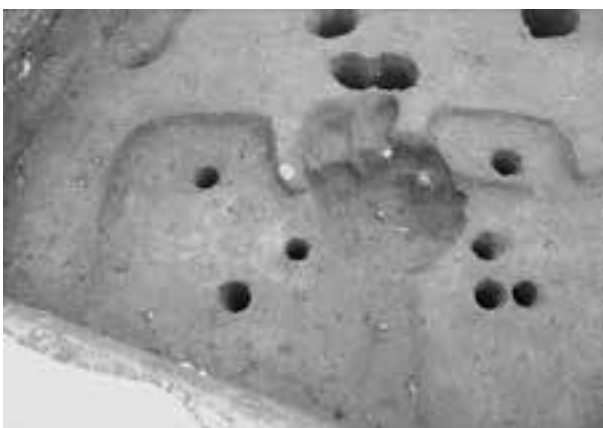
1号建物完掘状況



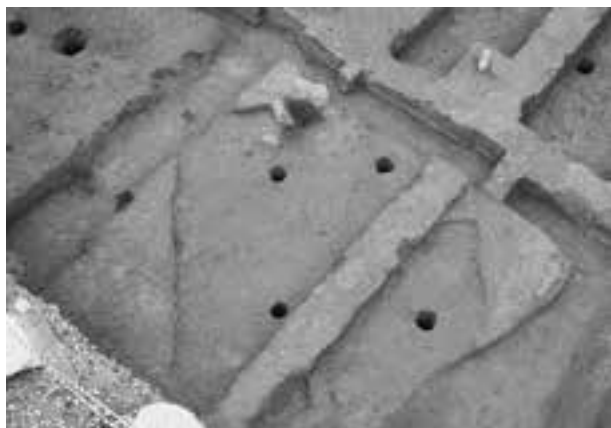
3号建物完掘状況



4号建物完掘状況



5号建物完掘状況



6号建物完掘状況



7号建物カマド近景



8号建物カマド近景



9号・10号建物カマド完掘状況

図版 2



11号建物完掘状況



12号建物カマド近景



16号建物完掘状況



17号建物完掘状況



18号建物完掘状況



19号建物完掘状況



1号溝状遺構完掘状況



A区全景



B区全景



C区全景



D区全景

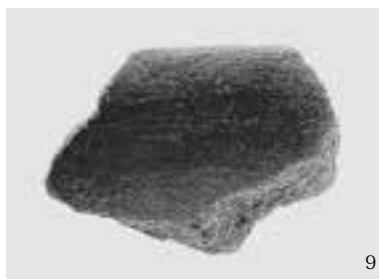


E区全景



I区全景

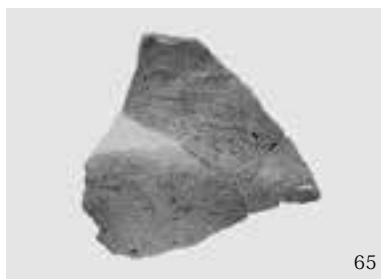
图版 4





图版 6













图版 12



ふりがな	しんなべいせきぐん 4							
書名	新南部遺跡群 4							
副書名								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第313集							
編著者	坂田 和弘・古城 史雄							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本市中央区水前寺六丁目18-1							
発行年月日	平成27年3月12日							
フリガナ	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺構番号					
しんなべいせきぐん 新南部遺跡群	熊本市	43201	332	32度 48分 53秒	130度 44分 44秒	平成11・ 12・13年度 平成16年度	3500㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新南部遺跡群	包蔵地	縄文 古代	ピット 竪穴建物	縄文土器 土師器 須恵器	

要約	<p>今回の発掘調査は、県道瀬田熊本線整備事業に伴い実施された。遺跡の主体の時期は、縄文時代と古代の2時期である。遺構としては、造り付けカマドを有する竪穴建物等がある。移動式カマドも検出しており、カマドの変質を考えるうえで貴重な資料となるであろう。</p>
----	--

熊本県文化財調査報告第 313 集

新南部遺跡群 4

発行年月日 平成 27 年 3 月 12 日

編集 熊本県教育委員会

発行 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷 (有)ソーゴグラフィックス

製本 868-0015 熊本県人吉市下城本町 1426-1

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 313 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新南部遺跡群 4

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 9 月 21 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>